

## 第九章 心に即する問題

唯心論は心に即して起つた處の宇宙觀である、前章に於て既に説きたる如く、心は自然現象に於ける複的作成であつて、本來に於ける形而上學は自然の本然的實在即ち物に即して起るべきが至當なる理論上の徑路である、宇宙の實在は其の人以前のものであり、人は宇宙の本體に於ける原理の作爲の一部であり、心は其の一部に寄生されたる一現象である、されば自然に於ける攻究は物其のものに即して提起されるのが純粹なる考察的順序でなければならぬのである、其の心を主として観ると云ふ事は、其の人間以後に於ける作用に屬するものであつて、人間の主觀の活動に原因するものである、しかしてこれは自然の形象的發現の必然の作用に屬するものであつて、即ち或る一現象が生起されんとする、其の場合にありては、其の現象が自然に於ける物質に或範圍を與へ、そして其の現象其のものを中心とする處の活動となる、だから其の現

象其のものにありては、其の自然に於ける物質の現象的活動は其の現象其れ自體の中心となつた活動によつて成象するのであるから、其の現象其のものにありては、其の現象其のものに於ける現象活動が本體に於ける原理の活動であると感ずるは蓋し當然の事であり、またそれが實在の原理に共通せられてあるはこれを認めなければならぬ、自然現象は要するに其の現象其れ自體の自己中心的活動によつて現れたるものである、ところで哲學は、この人間の心を中心として生起されたる處の理念の發活であつて、其の内容が心を主とする處の主觀的傾向の顯著にあり得るのは蓋し當然のことであり、また其處に本體的原理の存在を認むるのはこれまた其の原理に共通の自覺として必然のものである、しかして哲學其のもの、起因する時は、其の必然に唯心論的考察のあり得るは當然の結果である、で其の唯物論にありては、心の作用の客觀的理念の活動によつて現れたる處のものであつて、これは心を一步離れて見る處の純粹なる理念活動による處の産物である、だから吾人は、其の宇宙的實在の考察に於ける本體

論をさして、これを純粹本體論と云ひ、其のこれによる現象觀に由る論究を、純粹現象論と云ふのである、と同時に、其の理念の活動の其れ自體の原理たる處の心を主として觀る處のもの、即ち心に即して生起されるもの、其の唯心論をさして、これを主觀的本體論と云ふのであり、其のこれによる處の現象觀を、主觀的現象論と云ふのである、要するに此の主觀的本體論の發生は、自己中心の本體的原理の自覺によつて起つた處の論辨である、果して其れが本體的原理の究竟原理であり得るか否やは、彼の唯物論に於ける場合と等しく、其の實在の本體の神秘であり不可思議であり、そして不可解の領域であり得る間は到底、其の論辨の範圍を出づる事の出來ないものでなければならぬのである、唯心論とは即ち心に即して宇宙萬象の其の實在的本體の原理を探究する處の、即ち主觀的なる論究をさして云ふのである。

### 一、唯心論の起原

唯心論は人間以後のものである、すべての物象は、其の成形を得てそして其の成形

の確固たる形態を表示されて始めて其の全體的觀察と批判とが現れるものである、即ち人間が心的原理の考察に入るのは其の知力の自己全體に關する觀念と内容を得てからでなければならぬのである、だから、其の哲學的考察即ち對象に對する思念の活動も、また從つて其の感覺に即して、即ち對象其のものに即して生起されるのは當然の事であつて、其の古代に於ける唯物的觀察の、其の唯心的觀察に先だつて現れたのは蓋し必然の徑路でなければならぬのである、其の唯物的觀察にあるものは其の心的内省の不完全であるからであり、古代印度希臘に於ける其の心の發達の幼稚なる未開の時代にありては、其の思想は内省を缺く處の安價なる現實生活に於ける程度を越ゆる事の出來ない處のものであつて、從つて樂天的に單に對象に關する感覺と其れに伴ふ處の思念の所動以外あり得なかつたのである、しかるに其の知力の漸次進歩發達するにつれて、自然と自己内省の傾向を現はして來る、そして其處に自己存在の意義に關する思念が現れて來る、かくして其處に其の思想は非現實的生活に關する思想を惹起す

るのである、其の結果は必然に人生の無常觀と云つた様な傾向を現はして來るのである、其處で前の樂天的觀は變じて厭世的に事物を觀する様になるのである、そして其の對象に對する關係は、其の自然に即する感覺的なる客觀的思念は、轉じて自己其のもの即ち心に即する處の主觀的思念となつて現はれるのである、これが其の唯心觀の生起される處の起因である、古代希臘印度に於ける思想の變遷は明かに此の傾向を語るころのものである、即ち前にも述べたる如く、希臘にありてはタレオスの水を以て萬物の根源なりと唱へたるが如き、またアナクシマンドロスの無限物より萬物を説明せるが如き、アナクシメネスの空氣を以て世界の根源であるとせるが如き、印度の服水論師の水を世界の根源とせるが如き、風仙論師の氣を以て萬物の根元とせるが如き、皆其の感覺的物に即する思念の考察による處の産物である、後世これ等を指して素朴實在論と云ふ處のものは、其の論究の只管に感覺に即して立論せる處のものであるからである、でこの感覺的實在論に其の心的考察の一路を與へたのはプラトーンに

至りてからであるとせなければならぬ、勿論感覺的實在論にありても、其の理念の活動がなくて形而上學的考察の現はれ得よう筈はないのであつて、其の唯物觀即ち宇宙の唯物的見解其のもの、眞價に於ては何等増減すべき筈ではないのであるか、其の内的心的なる一觀察の存在を認むる事の成形を得たのはプラトーンに至つて始めてこれを認むる事が出来るのである、蓋し人間にありては、其の感覺的生活が主となり、其の思想的生活が従となつて生起されるのは必然の順序であつて、其の哲學的思索の傾向もまた其の感覺的傾向による處の思索として其の唯物的觀察の唯心的傾向に先きたつて生起されるのは蓋し必然である、今其の哲學の發達に關するキンデンバルトの所見に徴すれば、これを三大區分して居る、即ち、宇宙論期、開明期、組織期との三期である、でこの宇宙論期はソクラテース以前に屬するものであり、其の開明期はソクラテースよりアリストテレスに至る期間を指すのであり、そして其の組織期はアリストテレス以後指差して云ふのである、で宇宙論期は其の感覺的に對象に即し

て素朴的實在論を唱ふる處の獨斷時代であり、また開明期は其の懷疑的時代であり、しかして其の組織期は所謂批評的時代であつて其の論據に組織的説明をも有する時代である、ところで其の宇宙論期に於ける思想の變遷を序してヘーゲルは六小期に分けて居る、即ち、

第一期、此の時期にありては、全く抽象的なる決定に基づき、タレウス及び其の他のイオニア派に於て論せられたる處のものであつて、彼等は普遍なるものを其の自然決定のもとに認めたとのである。

第二期、此の時期にありては、單なる感覺より非感覺なるものに論據を求めた時代であつて、ピタゴラスの數を以て本體としたのである、數とは決定的の意味であつて即ち物の自立自存を認めたとのである。

第三期、此の時期にありては、かの決定的なるもの即ち數は、一より二三と移るものであつて、物に於ける眞ではない、眞なるものは唯一なるものでなければならぬと

したのである、即ち眞は可感的形と數的形とより純粹なる分離を爲すものであると云ふ論據から、多數は眞なるものでなく、眞の本體は一なるものでなければならぬとしたのである。

第四期、此の時期にありては、其の決定的を否定する處の思想の辨證法的運行が起つたのである、ヘラクライトスは、其の絶對を以て過程其のものと見たのである、そして絶對は活動的であると見たのである。

第五期、此の時期にありては、エムペドクリス、ロイキツボス、デモクリスト等はヘラクライトスとは反對に、絶對は單一物質的靜定であるとしたのである。

第六期、此の時期にありては、アナクザゴラスは、本體として認めらるゝものは、動き且つ自ら定むる處のものであると見たのである。

以上の如く、此の期にありては其の感覺的憑依を脱して純粹思索的に宇宙を觀する事は出来なかつたのである、従つて其の傾向は物質的思想の範圍を脱する事の出来な

かつたのは蓋し當然であつたのである、だから唯心論的觀察は起り得なかつたのである、即ちツェレルの云へる如く、唯心論なるものは、要するに其の精神的と感覺的との區別の意識せられ、そして其の精神的なるものが其の感覺的なるものよりも本來的であるを認められ説明さるゝ事に於いて始めて現はれ得るのであると、即ち唯心論的思索の形式は、其の知的發展に伴ふて現れる處のものであつて、其の知的内容が自己内省に及ばざる時代にあつて起り得ないものである、だから此の唯心論的思索にありては、ソクラテース以前に於ては殆んど認め難いものであつたのである、彼のピタゴラスの「數」及びエレア派の「有」なるものは、これは單なる觀念に過ぎないものであつて、それは感覺的綜合概念に過ぎないのである、これ等の數とか有とかと云ふものは形ちに關する觀念であつて、質に對する説明ではあり得ないのである、従つて其の感覺的範圍を出づる事の出来ないものであるから唯心論的思索へは到達し得なかつたのである、これに對してアリステテレースはかく論じて居るのである、即

ち、感覺界が凡ての實在を含むとす點に於てはピタゴラスは他の自然哲學と一致する、而して其のプラトーンと異なる處は、數を物の眞體となすと、之を觀念となすとにある、數は其の非體的なるに關せず質料的主義である、これは感覺的を實在的としたものであると、しかして彼のエレア派にありては、此のピタゴラス派の感覺的觀念の個體的なるに慊らずして其の普遍的なる、有なる觀念を捉へ來つたものであるが、これまた感覺の概念化されたるに過ぎないものである、かくて此の感覺の概念化に内容を與ふるものが、其の所謂實在論であり本體論であるのである、即ち其の或るものは唯物論となり、其の或るものは唯心論となるのである、しかれども其の實在觀が統一的方向を現はして來た見のがす事の出来ない哲學論への傾向であると見なければならぬのである、即ち個々の事物は其の數なる觀念のもとに統一され概括されたのである、これは物に即する考察の哲學論への第一歩である、この傾向はやがて唯物論へ向つて行かねばならぬ筈である、しかして其の有なる觀念に至りては、其の普遍的汎稱的な

る傾向は、物に離れたる處の純粹觀念であつて、これやがて唯心論への一過程であつたと見なければならぬ様である、此の有なる觀念に立脚する處のエレア派のバルメニデースは明かに唯心論への先驅者であつたと見なければならぬのである、それは其の彼れの詩篇に於ける本覺道と倒見道なる二齣によつてこれを認むる事が出来るのである、即ち其の本覺道にありては實に其の理性を説く處のものであり、其の倒見道にありては彼の感覺を説いたのである、即ち本覺道はたゞ理性に於てのみ眞理は發見するを得べしと高唱し、また倒見道にありては可見の外界は吾人の感覺によりて誤認せらるゝ事の免かれ難きものなる事を説いたものである、で此の感覺に理性を對立せしめたのは、知的内省の作爲に基づくものである、而もバルメニデースが理性を捉へ來つて眞理發見の唯一の本覺道であると提示したのは、其の觀念論の思想を哲學界に導びき認識論上に於て唯心論的見解を其の實在觀の上へ加へたのは唯心論上に於て没すべからざる功蹟であつて、唯心論は實に、彼れバルメニデースに於て其の原流を生じた

と云つてもよいのである、かくて理性は感覺を離れた、そして心は感官の外に獨立の境地を與へられたのである、唯心論はこゝに於て其の生起の可能性を與へらるゝ事となつたのである。

## 二、唯心論の語義

唯心論はこれを「アイデアリズム」と云ふ、この語は理想的或は觀念的との意味の語であつて、或はこれを觀念論とも相通するのである、觀念論は認識論上の意義であつて、唯心論は實在論上の意義である、然るに此の二つのものが同一語によつて解釋さるゝと云ふ事は甚だ曖昧なる事ではなければならぬのである、勿論唯心論は其の觀念に基依して立論せるものであるから、それは或は止むを得ね事かも知れぬが、其の唯心論と觀念論とは其の根本的性質に於て別個のものであるのである、故にこれ等は確然たる差別を付けなければならぬ筈である、此の兩語に就きて其の意義を索むるに、此の「アイデアリズム」は本來に於て殆んど認識論上の意義即ち觀念論の意義に用

ひたものであつて、形而上學に於ける意義即ち唯心論の意義には用ふべきものではなかつたのである、しかして此語を最初に用ひたのは、かのプラトーンの學說を「アイデアリズム」と名付けたに原由するのである、で此の「アイデア」と云ふ事は、當初は眞の實在を意味するものであつたのである、しかるに中世に至つてこれを「レアリズム」と名付くる事によつて、其の意義は全然一變して了つたのである、この「レアリズム」の意義は外界の實在を拒む處のものに關する事であつて、純乎觀念論に對する語義となり了つたのである、かくて此の「アイデアリズム」は二つの意義を有するものとなつたのである、即ち、所謂「アイデアリズム」に於いて、其の粗雜なる形を執るものにはありては、觀念が其の寫象する實在と及び其の寫象を考察する心とは異なりたる實體であるとするものであり、しかして其の微妙なる形に於けるものにはありては、凡て覺知するものに於ては開が意識する處のものは悉皆たゞ心そのものゝ變化であるとするのである、かように此の「アイデアリズム」にありては、内容

に於て非常なる相違を包含する處のものとなつたのである、即ち一は外象の實有を認むるものであり、一は外象の實有を否定する處のものである、「アイデアリズム」はかくも矛盾せる内容の語となつたのである、しかして其の外象の實有を認むる處のものには開が唯心論に相當する處のものであり、其の外象の實有を否定する處のものには開が觀念論に付して妥當なる語でなければならぬ、ハミルトンは明かに此の語の蘊惑を受けたるものと見なければならぬのである、即ちハミルトンは其の哲學派を分類するに當りて、此の「アイデアリズム」を唯物論と對比させて居るのである、なほまた彼は其の性質を遂に明瞭に説明する事の出来ない様な困惑に陥つたのである、即ち彼は、其の唯心論を以て、唯心論は、外界或は物の存在或は直接の認識を拒み、心の外何物も存せず又知られずとする處の外界否定論であると見るやうな結果に陥つたのである、ところで此の語の蘊惑は其の他のリボー及びカルダーワードにも及んで居るのである、即ちリボーは、唯心論とは、たゞ心の存するあるのみ、物の概念を

分解せよ、汝はこれがたゞ性質の心的綜合なるを發見するであらうと、又カルダーワ  
ードは、唯心論は、物を存在より削除し心が唯一の存在なりと確言するものであると、  
此等は宇宙の實在を證するものではなしに、其の觀念を實在其のものとする處のもの  
であつて、これは大なる錯誤に陥つたものと見なければならぬ、「アイデアリズム」  
の蕪惑も其の此處に到りて極まれるものでなければならぬ、物の實在を否定する處の  
ものは、それは最早實在に關する本體論としての唯心論ではあり得ないのである、そ  
れは一種の理想的唯心論であつて、觀念の内的證明以外のものではあり得ないのであ  
る、「アイデアリズム」はかくの如く不明瞭曖昧なる語となり了つたのであるが、こ  
れに對してフアルケンベルヒはかく説明を下して居るのである、即ち、其の認識論上  
の立脚點によれば、認識の一部若しくは其の全部を主觀的根源のものと見、精神の構  
造に依存するものと斷じ、單に吾人の寫象即ち觀念に過ぎぬものであると、またカン  
トの批評的或は形式的「アイデアリズム」の語解たるや、認識の形式即ち觀念と思

考とは精神より起るもの、心意に於て先天的に存するものであつて、感覺と異なり、  
之れと共に外部より受け取らるゝものではないと、即ち又先天論とも云へよう、認識  
に於て先天的、非經驗的、主觀的要素ありとなすのである、フイヒテの絶對的「アイ  
デアリズム」は凡ての認識の原素を先天的のものであるとして居る、故に感覺の如  
きも自我の安定即ち自己制限に過ぎぬのである、これ即ち其の認識論上に於ける其の  
「アイデアリズム」である。

それから其の形而上學的意義に於ては、一、精神的即ち觀念的、非物的の或者を認  
むるものであつて一般に唯物論の反對である、二、精神を物質或は自然の上に位せし  
め物的存在の精神より説明するものであつて、物界の存在を假象に過ぎないとはせぬ  
が、ある精神的基礎を認定するものである、フイヒテ、シエリング、ヘーゲルの一派  
は此の類である、三、物界を拒否するものであつて非物説、心靈論と云ふ、世にたゞ  
精神あるのみ、物體は現象即ち精神中の觀念に過ぎないとした、即ちバークレー、ラ



イブニツツ、フイヒテ等は此の類である。

でこれ等の區別は其のカント哲學によりて確定されたるものと認むべきものであつて、「アイデアリズム」の語的内容は略明瞭に闡示されたるものと見るべきである、即ち、ファルケンベルヒは、其の認識の原素を先天的なりとする處のもの、其れを觀念論と云ひ、其の物質に於ける精神的基礎を認定する處のもの、其れを唯心論と見たのである。

これを要するに、唯心論は其の觀念論なしに唯心論の基礎を確立する事は不可能であり、觀念論は唯心論に根據を與ふるものに相違なく、兩者の因果關係が其の唯心的宇宙觀に到達するのであると見るべきものもあるも、其の兩論の立脚する實質の徑程は蓋し大なるものがあつて存するのであるから、其の兩者に於て、其の同一なる語「アイデアリズム」を並用するは何等か區分的名稱を設定するの要あるを認むるのである、唯心論とは、クルークの所謂、唯心論とは、實在を單に觀念として考察する哲學

組織にして、吾人の外界の寫象は毫も實の對象と適合せぬ、たゞ吾人が其の寫象を客觀化するもの即ち一の對象として直觀するもの、即ち吾人が其の寫象を必然に意識するによりて、始めて觀念を實在に關聯するものと思惟する、此の哲學組織の主要なる原理は、觀念は實在によりて導かる、根本的なるものであると、また、バウルゼンは、認識論の問題を、認識の本質の問題と、認識の起源の問題とに分ち、甲に關する學說を「レアリズム」と「アイデアリズム」とに分ち、乙に關するものを經驗論と唯理論に分けたのである、しかしてかく云つて居るのである、即ち、其の實在論によれば、認識は實在の摸寫であつて寫象は全く物に均しく、たゞ物性或は實在を缺ける處の、物の觀念化であり、「アイデアリズム」は寫象と物、思想と實在とは全然相異なりて全く比すを得ぬと主張した、即ち、「アイデアリズム」を以て唯心論となし、「レアリズム」を以て觀念と見たのである、或はこれ等も一見解なりと見るべきではあるまいか、唯心論は其の心に即する傾向によりて、必然に其の觀念論的傾向の招

致さるゝは蓋し免れがたきものであるのである。

### 三、唯心論と觀念說

前項に於て説きたる如く、唯心論が其の生起の基調に觀念論の有る事は當然の事であつて、唯心論はこの觀念に即して提起されたる處の實在論であるのである、これ其の觀念論が唯心論の本質を奪はんとするの傾向を現はし來たる處の因由である、即ち其れは其の觀念なるものゝ本質が、唯心的論據を形成する處の實在の本體への或共通を認めしむるからである、唯心論と觀念論とは其の本來の性質に於て非常の相違を有するに關らず、其の根本的所生に於ては一致して居るのである、即ち、唯心論は觀念論を無視して其の論據を得る事なく、觀念論は其の唯心論の變態的所生であるのである、即ち、唯心論は其の觀念の不可思議なる其の存在が生に及ぼす處の現象の神秘によつて其の實在の本體への探究の端緒を與へられたものであり、觀念論は、其の宇宙に於ける實在の本體の原理が其の唯心論に於て認めらるゝに於て、其の本體的原理は

即觀念の原理でなければならぬと云ふ處の見解から、遂に觀念が對象より獨立して唯一の原理たり得るものとの論據から立論されたものである、が此の兩論は表面の相扞格即ち、其の外界なる對象の肯定即ち唯心論と、其の外界なる對象の否定即ち觀念論との相矛盾相反せる形式のもとにあつて、其の根本起點に於ては心に即して一致共通する處にあるは以上の理由に基づく處のものである、唯心論は其の觀念論によつて或程度の惑亂を受け、そして其の内容の統一性を盪惑さる事を一つの難障と見れば見得るものでありながらも、觀念論は其の唯心論の發達に就いて到底分離すべからざる處の重要な關係を有するものである、従つて今唯心論の成形に就いて論述せんとするに當りては、當然に其の觀念論の唯心論に於ける位置に就いて考察せなければならぬのである、そして其の考察は、其の觀念論なるものが、若しくは其の觀念なる一實在現象が、其の哲學的論究と進路とに於て如何なる關係の基に其の變形唯心論にまで到達し得たのであるかを研究せなければならぬのである、かく觀念及び觀念

論なるものに唯心論的意義を與へて、其の哲學的關係を索むる時は、其の觀念によりて實在の本體に索及し其處に唯心論の成形を樹てた處の、彼のプラトーンに就いて其の思想の形態を知らなければならぬと思ふのである、プラトーンは、其のソークラテースの人生哲學より出發して、其の人生哲學の本原體は宇宙實在の本體でなければならぬ事を認めたのである、即ち、プラトーンにありては、道德の基礎となるべき不變の本體は即ち現象界の奥にある處の實在界の本體的原理に通ずるとの論究に到達したのである、そして外界なるものは感官の所生であるとの見解を有するに至つたのである、これは純粹主觀的見解であつて其の難點は觀念の蠱惑に陥入つたにあるは勿論であつて、或はこれを素朴本體論とも云ふべきものであらうけれども、觀念の本體論への影響の大なる事はこれを以ても知り得べきであらう、さればまた、唯心論を説かんとするには先づ其の觀念説なるものを知るの要あるを認むるのである、しかして今プラトーンの哲學を案ずるに、其の觀念に就いてはかく論じて居るのである、即ち、

若し心意と即ち眞知と臆見とを以て全然異種なりとせば、確然とした自在的なる觀念なるものありて、感官によりて知覺する能はずたゞ心意によりてのみ會得せらるべしと云ひ得るだらう、されど若し或人の云ふが如く、正しき臆見は毫も心意と異なる所なしとせば、吾人が肉體を通じて知覺するものは、皆最實在に且つ確實なりと考へねばならぬ、併し吾人は彼等を異類のものと思ふべからぬ、彼等の起原相異なり、性質相反するからである、一は教訓によりて心に移植せられ一は説服による、一は眞の理由によりて伴はれ一は然らず、一は説服によりて動搖する事なきも一は動搖する、終りに各人は正しき臆見を享有するが、心意に至りては獨り神祇の有する處、人の之れを有するもの甚だ少ない、夫れ然り、吾人は一方には恒常不變、不生滅不増減にして、感官の見觸認識するを得ざる所、靈知の獨り能く洞察すべき處なる實在を承認せねばならぬ、而して又一方には、之れと名を同じく様を等しくし、しかも感覺すべく生出すべく、常に運動し、轉化消滅し、臆見感官にて會得せらるべきものがある、之

れに加ふるに第三者あり、即ち空間である、常住にして破滅が出来ぬ、一切の造物の地を與へ、感官の助を假らず、たゞ似而非理性によりて認識せらるべく、殆ど信を置き難きものとする、吾人は恰も夢裡に一切の物を見て、それは必ず或場所にありて空間を占めねばならぬ、之れに反して天地の間に存在するものなきは全く存在せざるものとなすのである、されば事物の眞實覺醒の實在に關しては、吾人はかゝる夢の如き感覺を有するを以て、自ら之を直に記載し或は決定する能はぬ、蓋し映像にして若し其の映像の本體ならず他の變化的陰影なりとすれば、こは他物即ち空間を假りて眞體を顯現せねばならぬ、然らずんば全くある事なきものである、併し眞の實在を顯現する眞の理性は、此の二物即ち觀念と映像と、全く相異なるが故に、其の他の中に存して同時に一面二たる能はずと主張するのである。

即ちプラトーンは觀念の最高なるもの即ち觀念の本體原理たるものは理性であつて理性は實在の本體の原理と共通なるものであり、従つて實在の本體は理性であると論

じたのである、これ明かにプラトーンが其の觀念の眩惑を受けて純粹主觀的實在論に陥入つた事を論證するものである、觀念の理性より現はれ乍ら却つて其の理性を觀念其のものゝ範疇となすのは、心の开が其れ自身の主觀的實在なるに原由するものであつて、其の主觀的理性の承認が、其の實在の本體に關して素朴實在論となり了らしむるのである、プラトーンもまた其の素朴實在論者と云はざるべからざるを吾人は覺ゆるのである、吾人の見る處によれば、觀念は假定の本質でなければならぬと思ふのである、なんとすれば、觀念は認識の對象を内容化して一つの内的存在を與ふるものである、此の場合、外象は入つて觀念に映像するのであつて、觀念は其の映像に内的存在を與ふるものである、即ちたとへば今此處に一個の器物ありとせんに、其の器物を感覺するのは感官の仲介作用であり、しかして其の感官の仲介作用によつて感覺せる器物の反射作用の可能なるもの即ち外界の内的存在が觀念であるのであるから、眞の器物は器物其のものであつて、觀念に於ける内的存在の器物は假現のものであり假定

でなければならぬ、即ち觀念は假定に所依するものである、假定による處の本體論はまた其の到底素朴實在論たるの形體を拒み得ざるものあるを認めなければならぬのである、で其のプラトーンに於ける觀念の何ものであるかを解説した處のツエルレルの説く所を見るに、

其の第一義、觀念とは一言にして云へば、現象の變化と絶無との中にありて無規定的實在なるものであつて、是即ち多中の一、即ち自己同質のものであつて其の存在上の諸異質は其の反對として觸るゝものではないのである、しかしてプラトーンはこれを一般概念に對する實在であるとしたのである、即ち此の意味に於ては觀念は普遍即ち共通を顯はすものと云はなければならぬ、故に「デアイテトス」「ファイドロス」等の諸篇に於て、觀念とは事物の本質、知識の對象等なりとし、そして之を以て事物の間に共通なるものとしたのである、だからこれは、専ら普遍に關するものであつて、之を個體に關係ありとするは誤つたものである。

第二義、此の觀念なるものは、現象界を離れて存在する自存的の本體である、そして其れは眞理其のものである、其の「ファイドロス」に寓言せる處を見るに、純粹の實在即ち觀念は蒼天の穹隆の外に住する、正義、節制、知識の觀念の如き殊に然り、彼等は無色、無形にして感官によりて知り得ない、たゞ理性の冥想的考察によりて達すべきのみと、また「シンポジオン」に美の觀念と個々の美とを比較する所に就いて其の觀念と個體との關係を明かにする事が出來よう、即ち、美なる身體、智識、技術等に對して美の觀念或は美其のものであり、不朽、純粹、無雜等の屬性を有する、此の美其のものは恒常にして始終なく、増減なく、絶對的に自己に等しく止まり、一方より見れば美にして他方から見れば醜なる如き事なく、或は隨時隨處、比較せらるゝ物に従ひて美ともなり醜ともなるものでない、如何なる物體にも生物にも存するものでない、たゞ其れ自身自立自存の本體であると其の他に諸篇に於ても屢散見する處である、要するに觀念は自立自存的のものであるから、开を分取する處の個體の變化

に犯されるものではないので、これは實在の模型と見るべきものであつて一切の事物は其の模寫に過ぎないものである、即ち觀念は獨り知界に存するものであつて個體と分離したものである、これはたゞ思考して知り得るものであつて耳目を以て經驗する事の出来ないものである、畢竟するに可見の世界は陰影に過ぎない處の相對境である、獨り觀念の世界のみが絶對のものである。

第三義、で其の概念は「一」なるものとなる、けれどもそれはエレア派の一の如く多を拒む處のものではない、有と云ふ事は部分を無視した一であつて賓位を作る事の出来ない性質のものである、觀念に於ける一は全を意味するものであつて多を認むるものである、即ちプラトンは具體的一元を唱へたるものと云はなければならぬ、此の點よりしては彼の「數」の思想より脱化したものと見られる、けれども其のピタゴラス派と異なる處のものは、プラトロンにありては數を數字的數と觀念的數と分つて居る、即ち前者は可感的なれども、後者は然らずとし、また後者にありてはまた前後

の別があるとして居る點に於て異つて居るのである。

第四義、エレア派にありては變化と云ふ事を拒んで居る、プラトロンもまたこれに同感して居るのである、けれどもエレア派にありては單的に現象外に有と云ふ事を立てたのであるけれども、プラトロンにありてはこれに反して現實の中に共通點を索めて説を立てたのである、此の點から見ても觀念は事物の内在的原因であると云ふ事が出来る、而して觀念中最高位にある善の觀念は凡ての現實の原因であると認められたのである、そしてこれを生力であるとも見たのである、蓋し實在と云ふものが知る事の出来るものであるとしたならば、實在は吾人の知力に受感を與ふるものでなければならぬ、而してそれは運動精神でなければ得る事の出来ないことではなければならぬ、プラトンは又、世界は美の觀念より成つたものであつて、其の心と理性とから吾人の心と理性とは成つたものであるとしたのである、尙また觀念は、無限即ち物、有限即ち數、或は其の混合ではないのであるから、觀念はたゞこれを其の原因であると見るの

外ないのである、此の觀念はまた神の所造でもないのである、反つて世界は理性の所造であるから益其の原因を觀念に存するものと見なければならぬのである。

以上の四義に於てツエルレルの解説する處によれば、プラトーンの所謂觀念なるものは、不生不滅無色形のものであつて、經驗を超越せる處の本體なのであるのである、そして其の觀念なるものには、實體化せる概念、個體の模型、具體的一元、萬有の原因等の屬性を有する處のものであるのである、プラトーンは明かに觀念の上に唯心論の形態を作り上げたのである、觀念論即唯心論、これは誤まれるものでなければならぬ、それは理性の知的錯覺が觀念の包攝力の大に魅惑された結果でなければならぬ、其の内在的原因なりと云ふ處のものは、吾人の見解する處によれば、それは物質に於ける内在的原因が、觀念を生起して其の内容化せるもの以外のものでは有り得ないと思ふのである、そのこれを以て开が實在の本體なりとするものにはありては、それは其の因はれたる思想よりして到底素朴實在論たるの評を免がれ難きものなる事を覺ゆるの

である、眞個唯心論の面目は其の本體論の影障たる處の此の素朴實在論即ち觀念の盡在を芟除するの要あるものならんと思ふのである。

#### 四、主觀的本體論、唯心論

唯心論は、其の本質に於て主觀的起點より生じた處の立論である、既に前項に於いても説きたる如く、主觀的なる吾人の心の不可思議的なる存在の原理が、其の宇宙實神の本體に於ける原理と共通する處のものであり、實在の真相其の原理もまた其の心的原理たるものでなければならぬと云ふ處に其の唯心論は生起されたのである、即ち唯心論は、吾人の最も直接なる心的現象より他に類推を及ぼして、其處に一切現象の心的原因に所依するものなることを論究せるものである、此の唯心論にありては、宇宙の神秘的原理は吾人の心的原理の神秘なるが如く不可思議なるものであつて、此の惑秘はまたかの神秘其のものでなければならぬと云ふ處の類推的探究が其の原因となるものである、此の心的原理への思索は其の内省の所生によるものであつて、さき

に純粹本體論即ち唯物論に於いて述べたる如く、人間の知的進歩は外延に始まつて内延に了るものである、即ち感覺に刺戟されて思念に反るものである、しかして其の思念が其の思念其のもの、何ものであるかを内省せる場合、其處に心的現象なるものを認むるのである、だから其の必然の順序として其の唯心論なるものは、彼の感覺に誘發される處の唯物的考察の形而上學的論辯よりも、其の後れて實在論に參するものは蓋し當然の事であればならぬ、しかして其の唯物論にありては其の本體觀は、宇宙の實在の本體は物質であるとの觀念が其の唯物論の成形を見たのであり、唯心論にありては、其の宇宙實在の本體は精神的のものであるとの觀念が其の唯心論をなしたのである、しかして其の唯心論に於ては其の吾人の所謂素朴實在論と見る處の純粹主觀的唯心論、即ち萬有は觀念に於ける假現の寫像に過ぎない、觀念なければ其の寫像は失はれる、觀念は普遍的實在のものである、そして其れの概念化に於ては一である、一とは即ち完全統一の意味であつて、普遍的全體的の意義に於ける一であるとする處の

ものに於て初めて其の成形を見たのである、これは其の觀念に即する處のものであつて、實在の外廓的のものであり、其の本質に於ては理想的本體論である、即ち宇宙の眞相實在の實體を、理想の形ちに於て認め、しかして其の眩惑を蒙つたのである、プラトンの其の根本的なるものに對する思想の分裂は明かに其の體裁を想見するに足るものがあらう、彼れは其の實在の本體と見る處のものに對して種々なる名稱を以て呼んで居るのである、即ち、觀念、本體、眞實在、自立自存的、理、類、有るもの、特殊なるもの、知的形相など、無數の別稱を以て云ひ現はしてある、これ其の思想の眩惑の所生であるに原由するものであつて、其の根本思想の安定境にあらざるものなる事を表示せるものであるまいかと吾人は想察するのである、これは統一を以て原理と見たる處の知的錯覺にも原由する處がある、この觀念即實在的本體觀は、其の導程をピタゴラスの、數、及びエレア派の、有、に發源されてあるのであつて、ピタゴラスの數に於ては、其れは現象の客觀的單一化であり、其のエレア派の有にありては、そ



これは主觀的單一化である、これを要するに兩者とも其の概念化に於ける統一によつて本體に觸れんとしたものである、しかるに、數、なるものは説明に外ならぬものであつて、其の本體論としては成立すべき要素なく、また其の、有、なるものにもありてもそれは單なる認識であつて本體論ではあり得ないのである、かくて此の兩者の不徹底なる宇宙觀に内容を與へんとせるものがプラトーンの哲學であると見なければならぬのである、即ちプラトーンは、觀念なるものを拉し來りて巧みに此の兩者を統括したのである、即ち、プラトーンの所謂觀念にありては、其の觀念に於ける全的に立脚するものであつて、其の全的一と云ふ事は、即ち統一せられたる一を意味するものであるからして、其の全なるものは、其の數なるものを包容するものであり、しかして其の一なるものにはありては、其の統一的概念的に於て有を含攝する處のものであり得るのである、かくてプラトーンは其の素朴的實在論に於て、數、有、兩派の統一的原理の成形に成功し得たのである、即ち唯心論は、其の心に即して生起さるゝ處の立論

であると、以上に於ける推移は明かに其の由る所なる事を知る事が出来る、即ち、其のピタゴラス派に於ける、其のエレア派に於ける、またプラトーンに於ける、皆其の原由する處は、其の心に即して生起せられたものである、即ち何れも其の觀念の性質的説明に外ならぬものである、これ等は到底其の獨斷的なるの批難は免れがたき處でなければならぬ。

唯心論は、其のプラトーンの素朴的實在論によりて、其の主觀的本體論の其の第一成形は現はれたのである、かくて唯心論は其の唯物論と對抗する處の形而上學に於ける二大潮流たるの形成を得たのである、唯心論者によれば、宇宙の現象は、皆其の精神的屬性を有する處のある本體の發現であると論ずるものである、けれども、其の本體に關する觀念はいまだ統一されては居ないのである、即ち確定せるものとなり居らぬのである、今其の立脚地に於ける見解を區別せんに、一は主知説であり、一は主意説である、しかして其の主知説による處のものは其の理性による處の合理的唯心論と

なり、其の主意説による處のものは其の意志による非理的唯心論となつて現はれるのである、即ちプラトーンのいふ本體なるものは、至高の知的作用即ち理性によりて知る事の出来るものであつて、其の本體其のものもまた至上理其のものであると、これ其の主知説に屬する處のものである、しかして、カントに至りては、實在の本體を意志であるとするものであつて、本體は意志の至上權其のものであると説いてゐるのである、これ其の主意説に屬する處のものである、しかして、プラトーンの主知説を繼げるものはライブニツツである、ライブニツツによれば、本體なるものは、動力を有する體若しくは寧ろ活動力と見るべきものである、そして其の活動力なるものは、不可分不生滅のものであつて、外部から勢力を加へられずに活動力を有する處の單子であると、しかして此の單子は微小知覺的のものであつて、外部を内部に表はし、雜多を單一に現はす作用を有して居る、此の寫像力によつて各單子は各自に一切の現象界を寫象する、之を生鏡或は小宇宙と云ふ、かく單子は宇宙を寫像する處の力を持つて

居るのであるが、其の遠近によりて其の寫像の様を異にするのである、即ち近きものは明晰に遠きものは蒙昧である、それは單子の寫像力が活動力の接離による處の差違に外ならぬものである、しかして此の寫像力の最明晰に最活動力に富めるものは神と見るべきものであつて、其の最活動の妨害せられたるものは物質であると、しかして動物に於ける心なるものは其の中間に位するものであると。

これによつて見るに其の唯心論はライブニツツに於いて完全なる形態に到達せるを覺ゆる、即ち其の素朴實在論的形態から脱し得たるの觀を呈して居るのである、しかしてカントの主意説を承けたるものはショーペンハワーである、即ち彼れによれば、宇宙は其の一方から觀れば全く寫象に過ぎないものとなるけれども、また他方から觀る時は別個の實在である、即ち觀念に即して觀れば吾人自身もまた一個の寫象に過ぎないものである、けれども自己其れ自體の運動の巧妙なる點よりして他に何ものかの主宰する處の原理がなければならぬ、しかして其れは意志でなければならぬ、だから

自己其のものは、一方寫象であると共にまた意志其のものでもあるのである、此の意志なるものは、カントの所謂物其れ自身と云ふ處のものであつて、時間空間を離脱したもので、全く單一なる實在であつて、他に其れ自體に影響する處の何ものもない絶對的原理である、ところで其の意志なるものは、普通に云ふ處の意志とは異つたものであつて、普遍的な宇宙の内面的本質としての原理となる處の意志其のものであるしかして此の意志なる本體の特色は其の活動性にあるのである、で其の活動性なるものは三段の過程を経て發現さるゝものである、即ち最初は自然力となつて現はれる、これは本體たる意志の現象化である、しかして次には刺衝となつて現はれる、之は生物界に於ける有機的現象である、其の次には動機となつて現はれる、これは人間の行為現象である、しかしてこれ等三段の發動現象は其の本體なる原理の意志の活動性からする處の其の發現の形態に過ぎざるものであると、これ其のショーペンハウワーの哲學である、かくて唯心論は二大傾向をなす事となつた、即ち、ライブニッツは觀念に

推進せる處の知的寫象力に立脚して靜的唯心論を建設し、ショーペンハウワーは情念より出發して本體の意志的活動性を直觀して其處の本體の原理を認めて動的唯心論を立論した、唯心論は此處に至りて其の宇宙の實在に於ける本體論としての成形を得たのである、唯心論はかくて其の本體論上に於て動かすべからざる根據を獲得したのである、其の唯心論と唯物論と何づれが實在の本體的原理とし正しきものなりやはいまだ容易に決定すべからざる處のものでなければならぬ、宇宙に於ける物心生起の根本原理は果して其の何者なるか、物か心か將た他の或る物か、それはいまだ神秘の領域にあるものと云はなければならぬ、唯心論は主觀的本體論である、知的發展による主觀の徹底は遂に實在の本體の原理に參する處のものと成り得たのである。

##### 五、主觀的現象論、目的論

目的論と云ふのは、自然現象の生起が自然其のものゝ目的に隨つて種々なる變化相を現はすと見る處のものである、これは其の唯物論的見解による處の所生たる機械的

現象觀即ち自然現象なるもの、自然に於ける原因結果の法則に従つて生起さるゝ處の機械的作爲に外ならぬと見る處のものと、其の立脚地を異にして現はれたるものである、で目的論は其の唯心論的見地からする處の現象論であるから、其の觀る處の現象論、必然に自然現象なるものは、其の内存的精神の發現であつて、其の變化なるものは目的の方向に従つて發展されると見る處のものである、しかして此の目的論なるものは、自然の作爲が其の變化の不可思議なる、其の秩序の整然たる到底其の何ものかの作爲なくして行はれ得べきものではないとする處の觀念が、其の自然現象の生起を其の裏面に伏在する處の何者かの或はあるものゝ主宰のもとに、其の目的としての作爲によるものとの解釋によつて推究せられたものである、だから其の起源に遡つて考へる時は、其の淵源は古代神話に於て崩せるものと見なければならぬ、即ち、神話は自然現象をすべ神の作爲によるものと解釋して現はれたるものであつて、宇宙は一神若しくは無數の神々によつて支配さるゝものじあつて、すべての現象的變化は神の意志

によつて行はるゝと見る處のものであつて、目的論は疑ひもなく此の神話的自然觀によつて現はれ來つたものである、従つて目的論に於ては宇宙に於ける根本原理として其の宇宙の實在に於ける本體は人格的實在即ち神を豫想せなければならぬのである、即ち目的論は其の原由する處に神學の見解がなければならぬ筈である、即ち、目的なるものゝ其の生起さるゝ處の當體がなければならぬ筈である、目的論にありては當然は神學的傾向にあるものでなければならぬ、即ち神なる宇宙の主宰者實在の本體としての根本的原理が、此の宇宙に對して其の何等かの目的を有するが爲めに、其の目的に向つて其の作爲が展開發現される、それが自然現象であること云ふのが目的論の出発點となりしものと見らるゝのである、しかして此の目的論が其の形態を現はし來るには其の唯心的論據と共に提起さるゝ性質を有つて居るのである、即ち目的なるものは其の本來に於て精神的作用であるのであるから、其の精神的本體を豫想せずには單獨に起り得ない處のものである、で此の目的論的形態の現れたのは、其のプラトーンに

於ける唯心的宇宙觀の所生に於いてあると見なければならぬのである、しかして其のプラトーンに於ける目的論にありては、現象を離れて其れを支配する處の一觀念として即ち、超越的目的論として現はれたのである、プラトーンによれば、宇宙に於ける實在の本體は觀念である、しかして其の觀念なるものは、其の想念中に於て善なる想念を以て最高のものである、此の善なる想念は現象の各自の想念として賦與せられる、従つて其の現象各自の想念は其の善なるものに向つて進行する、即ち自然淘汰は此の善なる想念の作爲であると云ふのである、即ち現象界は善なる目的に向つて進みつゝあるものであると云ふのである、しかしてアリストテレスは此のプラトーンの超越的目的論より轉じて其の目的論は、自然現象に於ける變化活動は、自然現象に於ける純然たる質料が其の形式を得ようとする處の運動に外ならぬものとした、即ち目的は現象其のものゝ中に内存するものであつて、其の目的は絶えず其の活動によりて實現せられつゝあるものであるとしたのである、これを要するに目的論は其の内存的

性質を得て始めて目的論として成立するものであらう、其の超越的目的論にありては目的論として不完全なるを免れ難いであらう、なんとすれば、其の内存性が薄弱であるからである、しかして其れは觀念即ち實在なる思想に伴ふ處の難點である、即ち其の現象の寫象觀は其の目的論への移入は其の困難なる處のものでなければならぬのである、しかしてカントにありては、其の主意的見解は當然に目的論へ入るべき性質のものである、従つてカントは自然に於ける内存的目的を認めたのである、カントによれば、自然の現象に於ける各物は元來分離せるものではないのであるが、各其の目的に従つて結合したるものであるが故に諸種相となるのである、それは有機的の構造に於て最もよくこれを知る事が出来る、即ち各部分は各相依つて全體の生活を營んで其の一定の目的に向つて進みつゝあるのである、其の他なる無機體にありては此等關係が明瞭でないけれども、それはたゞ程度の差であつて元來存せないものではないのであると、目的論は其根柢に於て精神的實在の所生としての現象觀であるから、唯心論

は必然に通過せなければならぬ處の過程である、従つてプラトーン、カントの唯心論が其の自然の過程に於ける目的論に入るは蓋し當然の徑路でなければならぬのであるが、此の兩者は何れも心に於ける各或方面即ち、一は理性、一は感性に據るものであつて、全的心即ち精神其のものでなかつたのは、其の兩者に於ける何等かの不備を豫想せなければならぬのである、従つて其の目的論に於ても或は其の缺陷を保有するものがないであらうか、ハルトマンは、此の兩者に向つて、其の無意識的精神の立場から、其の本能論に於て兩者の缺點を捉へて居るのである、即ちハルトマンはかく論じて居るのである、本能とは目的を追求すと云ふ意志なくして而も一定の目的に適合した作用を爲す事である、即ち無意識的に目的に順應し、目的に合致した作用である、本能は物質的器械的原因に基づきて作用するのでない、寧ろ其の根柢に或る一定の目的の存し、而して此の目的が或は活動の瞬間に直接に現はれ、或は長き時間を経過したる後に到達さるゝを問はず、適當なる時に適當なる作用をなさしむる所の原動力が、

現象の背後に存在すと認めねばならない、本能中に現示さるゝ處の無意識其のもの、知識は、遙かに人間自身の意識的知識に優り、意識的動作よりも本能的動作の方遙かに錯誤少なく、複雑なる事柄に關しても直に適當の方法を以て暗示する、實に吾人の有機體は初めより存在する處の本能より組織され、而して本能は無意識作用の模範である、其の他の延髓、神經細胞、隨意運動、反射運動、又は有機的機關、性慾氣質、美的判斷、言語、思考、知覺、神秘的直觀等、此等一切のものが悉く一定の目的と合致するは、理性あるが爲めであり、此等の作用は即ち悉く意志の發現より成るのである、最後に現象の發生するには、必ず是等兩者の協力を要するよりして見れば、思考の力なき意志及び勢力なき觀念をば互に分離した二個の實體と見るは不可である、蓋し意志なしには其の自身に力なき知は存せぬ、理性なしには其れ自身に目的なき意志は定まれる意志とならぬ、故に意志も理性も共に相對的の根本原理であつて、絶對的の原理でない、絶對は精神にして意志も理性も共に其の屬性である、理性は意識の條件にし

て之に先きだつが故に無意識、意志亦盲目的のものなるが故に無意識である、従つて意志と理性と包含する絶対即ち精神は無意識的精神であらねばならぬと、即ちハルトマンによれば、理性は思考の力であり而して目的となる處のものである、で意志は勢力でありしかして力となる處のものである、此の二つのものは相合して精神の現象的作用を爲すものであると云ふのである、即ち目的の發現は本能なる無意識的精神の作用によつて行はるゝと云ふのである、この本能なるものは天賦を意味するものであつて、天賦は有機的存在の目的と見るべき發現の作爲を持つものである、或はまた無機物にありても無意識的本能の存在を認むべきものあるやうにも思はるゝのである、本能もまた具體的目的もしくは、究竟的目的とも稱し得べきものゝやうにも見らるゝのである、アリストテレスの四原因説は上述の三目的觀にも應用し得る様である、即ち其の四原因とは、材料的、形式的、活動的、究竟的である、此れ等の四原因は其の共存によつて其の目的とする處を發現するものであるが、一二三の三者は所謂原因と

なるものであつて、四なるものは所謂目的なるものである、原因は即ち手段であり過程に於て現はるゝものであつて、目的は即ち結果となつて現はるゝべきものである、しかして其の本能なるものは此の目的の無意識的自覺とも見るべく、其の意志なるものは其の活動力に相當すべく、しかして理性なるものは其の形式に相當するを認むる事が出来る、かくて其の残る一原因即ち其の材料的なるものは目的論に於ける一難障でなければならぬ、それは恰も機械論に於ける有機的原因の其の機械論に於ける難障であると同じ様に、目的論に此の材料的なる物質の介在は其の目的論の難障である、と同時に唯心論の難障でなければならぬのである、有機的原因と有機體の物質的原因とは、物心兩論をして容易に其の論の解決を許さぬであらう。

## 第十章 理に即する問題

宇宙間には自然即ち物と、精神即ち心と、此の二つが相對して其の二方面をなして

居る、で此の二方面が如何にして現れたか、また其の兩者間に如何なる關係があるの  
であるか、或は其の兩者は何れが主となり従となる處のものであるか、しかしてまた  
此の兩者は如何なる性質を有する處のものであるか、しかして兩者は無意義のもので  
あるか或は有意義のものであるか、兩者の存立は無關係のものであるか或は有關係の  
ものであるか、もし無關係のものなりとすれば、吾人の心的活動が外象を受理する事  
は何に原因するか、もしまた有關係なりとすれば、此の兩者の間を媒介接續せしむるも  
のは何であるか、それは非物非心の一物、即ち理なる自然と精神との間に存する處の  
媒介的なる作用によつて、此の物と心とは密接不離の關係を持続し得るのである、理  
は即ち相關的原因であつて、或一方に即して生起さるゝものではないのである、其れ  
は心に即して起る處のものでもなければ、物に即して起る處のものでもない、相互に  
因となり果となりて此の理なる不可思議なる、事物の物心の其の接續點を作為するの  
である、即ち單に精神ばかり單獨に存在して居る場合には此の理なるものは起り得な

いであらう、或は其の理なるものゝ存在は有り得ない處のものとなり了はるであらう  
しかしてまた單に自然ばかり單獨に存在して在る場合には此の理なるものは其の存在  
を認められ得ないであらう、或はまた其の存在は無意義なるものとなり了はるであら  
う、即ち自然と精神とが各單獨の存在であるなれば其處には理は其の存在の意義を失  
はれなければならぬのである、けれども、自然と精神とは其の本來に於て密接不離到  
底其の關係を拒否する事の出来ないものである、此の關係がもしも拒否された場合に  
は理の存在は失はれ宇宙は無意義なる存在とならねばならない、しかれども此の自然  
と精神との媒介者たる理は、其の偉大なる接續性によつて其の自然と精神の兩者、否  
宇宙に其の存在の意義を與ふるものである、此の理なるものは萬有に亘る處の媒介的  
接續者である、理を無視しては萬有は無意義となる、もしも此の理なるものが無かつ  
たならば、自然は其の存在を拒否され、精神は其の活動を失はしめらるゝであらう、  
かくて理は其の宇宙に於ける内存的原因である事を認めなければならぬ、即ち物心を



貫き萬有に通ずる處の活動性なる或るものである、しからば其の理なるものは如何なるものであるか、理は非物非心的のものであり、非形非質的のものである、これは單に物より心へ、心より物への過程である、しからば其の過程とは何んであるか、それは認識の理法其のものである、認識は自然と精神との接續的作用である、これは物と心とに相關する處のものである、しかしてこれは宇宙の内在的原因の發現に外ならぬものである、即ち理の作用に原因せるものである、自然と精神とは此の認識によつて其の存在性と意義とを與へらるゝものである、即ち自然と精神とが相乖離せず其の調和的實在となり得るのは一に此の理の作用によつて行はれ居るものである、これ其の哲學上の攻究事項として一要項たるを失はない處の所由である、此の理に即して提起せられた處の認識論はまた、其の哲學上重要な問題の一つでなければならぬものである、かくて吾人は其の理に即する處の問題として、其の認識論なるものを説かざるべからざることゝなつたのである。

一、認識の性質と知識

認識と云ふ事は一種の不可思議なる事ではなければならぬ、なんと云へば、認識と云ふ事は、事物を其の對するものゝ觀念の中に於て其れに肯定を與ふる事である、しかば其の觀念なるものは如何にして其の事物に對して肯定を與へ得るのであらうか、しかしてまた其の事物に對して否定を與へ得るのであらうか、これは一寸理解し難い處のものでなければならぬ、觀念は果して其の事物に對して肯定を與へ若しくは否定を與ふる處の權利が如何にして有り得るか、またしかる資格を何處から得て來たのであるか、これは疑問でなければならぬ、若し觀念が認識に於て可能であるとするならば、觀念は既に其の認識に先つて先天的に事物を内容する處の或るものでなければならぬ、したがつて事物は其の寫象する以前に於て既に觀念の中に存在する處の何ものでなければならぬのである、しかれども觀念は事物に對して絶對的な包攝の既存せるあるものではあり得ないのである、それは錯覺による觀念の認識に於て开を認め得

るのである、たとへば黄昏の山路に一條の繩を見て蛇であると認むる場合の如き、また其の觀念に於て其の内容が不完全の場合に於ては其の觀念は其の程度に應じてそれをそれに其の認識を限定されなければならぬのである、しからば觀念は認識の成立には全稱的のものであり得ない、即ち觀念は認識其のものではあり得ないのである、觀念は單に認識に於ける處の或一方の因たるものであるに過ぎないものである、しからば、認識の當體は事物其のものであるかと云ふに、事物は其の觀念と合するに及びて始めて認識となり得るのであつて、これもまた認識其のものではあり得ないのである、事物もまた其の觀念に於ける場合と等しく、單に其の認識される處の一つの因たるに過ぎないものである、しからば認識は、其の因たるものとして、其處に觀念と事物との兩者を認め得るも其の原理は何によつて來り得るか、これは考究せざるべからざる處の問題でなければならぬのである、これ其の哲學上の問題即ち其の考究事項たり得る處の所由である。

認識は以上に於て説ける處の如く、其の認識其のもの、本體、即ち認識其のもの、原理は一種の不可解のものである、認識の眞正當なるものが其の實在の本體的原理の不可解なるが如く若しくは其の探究の困難なると同一なる程度に於て困難であるのは其の認識其のもの、真相其の原理の不可思議なるに原因するものであつて、認識の眞正當は、實在の本體のその如く、難物であるのである、たゞ認識に於いて有り得るのは、其の認識が正當なりと認むるに過ぎないものでなければならぬ、したがつて認識は其の認識に於けるもの、客觀的妥當性に於て即ち、客觀する處のものに適合すると云ふ處の假定に立脚して其存在を有するものでなければならぬ、認識は要するに假定の事實である、しかしして此の假定は、其の認識の可能と云ふ事によつて現はれ得る處のものであつて、したがつて認識は、其の眞正當の不可證に原因して、其の認識は絶對的のものでは有り得ない處のものである、認識は相對的關係のもとに其の根據を有し、したがつて、其の相對者の不完全であつた場合には其の認識其のものもまた

不完全なるものでなければならぬのである、即ち觀念或は事物其のものが、不完全乃至は不正確であつた場合には、其れによつて現はれた處の認識もまた不完全であり不正確のものでなければならぬのである、即ち認識は、認識の可能であると云ふ假定のもとに行はるゝ處のものであるから、其の認識の本來の性質は、事物に對して、かく／＼のものと認むと云ふ處のものであつて、かく／＼のものであるとの斷定には到達し得ざる處のものである、即ち認識には絶對の斷定はあり得ないのである、其の斷定なるものは假定のもとに行はるゝ處の假定の斷定でなければならぬものである、即ち認識は、客觀的妥當性を目的として成形され、しかして其の成形は辨證法的累進を以て眞正當に向つて進みつゝあるものでなければならぬのである。

認識なるものはかくの如く眞正當を求めて進む處の或るものである、即ちしかして認識は、其の事物と觀念なるものゝ中間に介在する處のものであつて、其の事物と觀念とに或る一致點を與ふる處のものである、しかして其の與へられたる處の一致點即

ち認識なるものは、其の認識に於ける本體たる原理の眞正當なるものゝ一作用的なるものであつて、それは即ち假定である、しかして其の認識の内容は、客體的妥當である、認識の眞相は要するに其の攻究的目的たる或るものでなければならぬ、普通に云ふ處の認識なるものは、單なる辨證法的累進なる一過程である、しかして其の過程なるものは、其の一段一段に外廓を造りつゝ、進み行くのである、しかして其の外廓と云ふ處のものは、即ちそれは知識である、知識は疑ひもなく、認識なるものゝ其の一過程一過程に於いて、其の概念を觀念の中へ留めて行く處のものによりて其の理性に於ける批判を受けたるものゝ形式である、即ち知識なるものは、認識の理性に於ける認識の其の過程／＼の綜合批判によりて生起されたる處の形式である、吾人の知識が其の低級なる無智の状態から漸次に其の知識の進歩されて來るのは、即ち其の認識の過程なるものゝ豊富なれば豊富なる程、其の知識の量が増加され優越になり行くのはこれが爲めである、これを知るには、吾人の其の呱呱より幼年へ、幼年より少年中年

と經來つた處の知識の成長の事實に考へて見れば、其の状態を知る事が出来るのである、即ち知識は認識の外廓として成長せるものである、知識は其の認識に根據して其の成形を與へらるゝものである、しかして認識はまた其の辨證的累進に於て、其の自己の築ける處の知識其のものに立脚して其の認識の客觀的妥當を所定するのである、だから認識と知識とは相關的乃至は因果的に進歩すべき性質のもので、此の兩者は到底相離るゝべからざる處の密接不離の關係のもとにあるものである、即ち認識は或はこれを知識の表出であるとも云へよう、即ち其れは其の知識を根據として發現さるゝ處の作用の形式であるからである、しかして知識はまたこれを認識の統一的集團體とも云ふ事が出来よう、即ち知識は無數の其の認識を抱擁して一つの考察の資料としての内容を造つて居るのである、即ち知識は認識を得て其の内容を豊富にし充實させ遂次完全に向つて進むと共に、認識はまた知識に立脚して其れに内容を與へながら漸次其れ自らも其の眞正當なるものに向つて進み行くのである、これを要する

に、認識は知識を無視して其の客觀的妥當性を得る事なく、或は認識其れ自身の成立をなし得る事なく、知識はまた認識を拒否して其の内容の批判的作用を得る事なく、或は知識其れ自身の存在は有り得ない事となり了はるのである、即ち認識は知識の作用の發現であり、知識は認識の結晶であるとも云へよう、しからば知識は認識の要素であり、認識は知識の原因である、かくて其の認識發現の過程は知識の活動其のものでなければならぬ、知識は其の認識より得來つて反つて認識の因たるやの觀がある、しかれども知識は認識の所生である、しかして認識は知識の所定である、この二つのものは到底其の相離るべからざる處のものである、しかして認識其のものゝあり得る處の本體即ち原理は一種の不可解である、しかして其れは宇宙間の或るもの即ち實在に參する處の本體の原理に原因するものであつて、吾人はこれを宇宙に於ける自然現象に於ける哲學的攻究の三事項中に於ける處の、理、其のものゝ其の奥底に横はる處の或る作爲であると見るのである、しかして其の或るものは、其の眞正當なる處の物

心兩方面の中介者でなければならぬと思ふのである、哲學は、其の物心の兩方面に其の攻究の歩を進むると同時に、また此の理なるものに向つて、其の宇宙に於る根本的原理の何者であるかを攻究して行かなければならぬのである。

## 二、認識論

以上に於て説きたる如く、認識は即ち知識の其の考察の決定に基づく處のものであつて、即ち知識に立脚して認識は生起さるゝものである、しかして知識は認識の集團によつて形成さるゝ處の一内容或は團體である、しからば認識は知識の根元であつて知識は認識の憑依の本體即ち眞の認識なるものゝ一種の幽秘なる原理に所依する處のものである、これ其の認識論の發生する處の原因である、即ち認識論は其の幽秘なる認識的作用の根本的なる真相即ち原理を探究せんとする處のものである、しからばここに一個の疑問は提起さるゝであらう、認識は一種の心理上の作用である、即ち認識なるものは、心理學上に於ける他の感情意志等の如く一種の心的作用に過ぎないもの

である、もし果して然りとせば、それは精神作用を攻究する處の心理學の範圍を出でざるものであると、これ或は普通に於ける見解であらう、認識が吾人の思惟の範圍に於いて現はれ得るに於けるのは妥當の見解であつて、吾人は要するに吾人其れ自身の精神状態を離れて認識は行はれ得べき性質のものではなく、また有り得ないものである事は其の經驗上に於いて認め得る處のものである、しかれども、心理學と認識論とは其の根柢の立脚點に於て非常なる相違を有して居るのである、即ち心理學なるものは吾人の此の心即ち精神の状態の諸作用に關する分析的説明に外ならぬものであり、認識論は心理的作用を離れて其の認識なるものが如何にして可能なるものであるかを攻究するものであるから、全然別個のものであると云はなければならぬのである、心理學の立場よりすれば、認識なるものは心理上の一作用に過ぎないものであるとする、しかれども、心理學に於ける場合には單に、單純なる感覺より進んで其の複雑なる認識に至る處の過程を説明するに過ぎないものであつて、認識其のものゝ本來

の性質其のものに就いては何等疑問を提しては居ないのである、即ち心理學は科學として其の現象の作用的方面以外のものには即ち其の根本的なものには攻究を及ぼさぬのである、即ち、たとへば花を見て雪と見たる場合、心理學に於ては單にこれを其の誤まれる見方、或はこれを妄覺と呼び或は其の根據なき視覺、即ち單に視ゆるだけであつて觸れる事の出来ない形像即ち視覺の錯覺によりて有るべからざる形像を視覺せる場合には、これと呼んで幻覺とする、けれども心理學にありては、其の妄覺幻覺に於ける認識の不成立即ち其の誤謬なるもの、其の何故に誤謬であると認むるかに就いては即ち其の根本的なものには論及せないのである、しかも認識論にありては、其の正しきものと誤れるものとは畫然たる差別を附さなければならぬのである、即ち認識論にありては、其の心理學上の妄覺幻覺に於ける場合には、これを誤謬として其の認識の不成立を斷言するのである、即ちこの場合にありて認識論は、其の客觀的妥當性よりして、單に其の精神状態を觀察するに留まらず、其の精神状態と其

の對象との關係に就いて其の一致的妥當の、正當なりや不正當なりやを攻究するのである、即ち心理學にありては、要するに過程即ち作用に即する處の事實の學であるが認識論にありては其の根本的なもの、即ち事實の意義に關する處の學であるのである、しかも認識なるものは前にも述べたる如く、其の立脚を知識の其の範圍に有するものなるが故に、其の心理學なるものを無視する事の出来ないのは、唯物論が其の自然科學と離るゝ事の出来ないのと同じい立場である、認識的所依たる精神に於ける科學の心理學は其の認識論に於ける重要な基礎或は關係を有する處のものである唯物論に於て其の自然科學を以て材料とすると等しく、認識論もまた其の材料としての心理學を要するものである、認識の根本原理は其の材料に即せざる處の、宇宙間の理に於ける根本的原理の所生であるのであるけれども、其れの攻究上の便宜は心理學を無視する事は出来ないものである。

認識論の發生に就いては、其れは哲學の攻究事項としての當然の順序、しかして人

問の知的考察の必然の徑路として、宇宙の人間關係の知的内容化の遲速によつて現はれるのである、即ち吾人が第一其の考察を及ぼすもの自然其のもの即ち物である、しかして第二に考察の向けらるゝものは精神即ち心である、しかして第三に其の考察の働き行く處のものは理である、即ち其の吾人に於ける知識考察は其の感覺的可能の方面より、其の感覺の不可能的方面に向つて進み行くものである、即ち自然即ち物は、其の最も吾人の感覺を刺衡するものなるが故に、吾人の考察は第一にこれに向つて行はれる、しかして第二には感覺の可能其れ自身即ち精神に向つて行はれる、しかして第三には其の感覺の不可能なる方面、即ち物と心との中間なる或者、即ち理に向つて行はれる、それが考察の發展的進路でなければならぬ、従つて認識論は其の哲學論として唯物論的唯心論的なるものに後れて現はれ來つたのは當然の事でなければならぬ、此の認識論の其の端緒を現はし來つたのは、彼のバルメニデースの本覺道倒見道なる二篇の詩に現はれたる處の思想の根源即ち其の哲學に於て、感覺を倒見道としてこ

れを誤認多きものと黜け、理性を以て正しき認識の可能なるものとして尊んだのである、しかして其の必要の結果としてバルメニデースは其の倒見道的感覺に於ける可見の世界は到底眞實體ではない、これ等のものは畢竟吾人の感官に對して發現するものに過ぎないと云ふに至つたのである、かくて認識は其の認識論に到達すべき處の動機に遭逢したのである、それより哲學にありては此の知識の不確實を疑ふに至つて、其の諸家によりて此の認識なる問題の論議さるゝ事となつたのである、即ちソークラテース、プラトーン、アリストテレースに至りて其の認識論形成の氣運を助長して來たのであるが、いまだ其の哲學論としての形態を具ふるには至らなかつたのである、しかしてこれを或は其の論理學の一部であるものゝ様に扱はれ居つたのである、しかして其の後に至りて其の認識論の一派の見解を有せるものはデカルトであつたが、猶其の認識論としての成形には至らなかつたのである、しかして此の認識論に組織的内容を與へたのはロツクである、彼れは其の「人間悟性論」に於て、認識の起原、確否、本

質及び限界等の諸問題に於て其の組織的攻究の端緒を開いたのである、けれども此の認識論が眞に其の哲學的根據を得たのはカントの彼の批判哲學に至つてからである、即ちカントは其の所謂獨斷的睡眠より覺醒して、吾人の認識能力は形而上學に對して適當なるか否かを質さなければならぬと云ふ處の見解から、彼は數學及び自然科學の成立を論じ、そして其の數學及び自然科學をして成立せしむる認識作用は、古代の形而上學に對して効力なきことを論定したのである、そして其の認識の要素を分析し其の經驗との關係を論じ、其の認識の對象たるもの、意義を明かにして其の範圍を限定したるが如きは、其の認識論に於て始めて其の成形を見たのである、かくて認識論は知識の門として、其の哲學攻究に於て魁先的事項としての論究となつたのである、以上の説明によりて、其の認識論の全體を知る事が出來た様に思ふ、で吾人は其の認識論の内容の一般を知るを以て便宜とするが故に、以下シヨールペンハワールの認識論の一般を引いて此の項を結ばうと思ふのである。

シヨールペンハワールの知識論は、其の「充足原理」に於ける四原理說に於て其の大體を説かれてある、其の充足原理に於ける四原理と云ふのは、存在、生成、行爲、認識なる四つのものである、シヨールペンハワールによれば、充足原理なるものは、吾人の表象の間に存在する規則正しき聯絡を示すものである、即ち、物あれば必ず其の故ある事を先天的に決定するものである、だから自立自存して何等の聯絡關係のないものは吾人の認識の對象とはなり得ないのである、しかしして此の聯絡結合法は、吾人の表象の對象の性質と共に變ずるのである、即ち、吾人の認識の對象となり得る處の一切のもの、即ち吾人の一切の表象は、これを分つて四種とする事が出来る、従つて其の充足原理は、それ／＼是れ等に對應する所の四種の形式を豫想しなければならぬ、即ち、生成、認識、存在、行爲などの四充足原理である、即ち其の認識力の對象の第一は、生成充足原理、これは直觀的、完備的、經驗的表象である、此の表象の形式は内官外官の形式、即ち時間空間の形式である、此の種の對象に於ては、充足原理は因果法



となりて表はる、即ち、一つの或は種々の對象に新状態の生ずる場合には必ずこれに先だつ處の他の状態がなければならぬ、此の先だつ處の状態に次いで此の新状態は生ずるものである、かくの如く新舊相繼ぐものを、これを繼起と云ふのである、しかし其の始めに存する處の状態を原因と稱し、後に起る状態を結果と稱するのである、此の因果律なるものより惰性律が派生される、なるとなれば、其の前状態なるものは外部から或る影響の來る事なしに決して變ずる事の出來ない性質のものであるからである、しかし又因果律は物質保存則をも派生する、なるとなれば、因果法は唯物質の状態にのみ關係して物質其のものには全然相關する事のないものであるからである、だから物質其のものは不増不減のものでなければならぬ、因果の形式には狹義の原因と刺戟と動機とがある、しかしして無機界に於ける變化は狹義の原因から生じたものである、しかしして此の際に於ける動と反動とは互に相均しいものであり其の方向は相反する、また有機界に於ける變化は刺戟から生ずる、しかしして一切の動物の外部に現は

す處の意識的動作は動機より生じ、其の動作と動機との媒介となるものは認識である、しかしして原因と刺戟と動機との差異は是れが作用を受くるもの、感受性の程度の如何に關するものである、しかしして認識力の第二類に於ける對象は、

認識充足原理、これは概念或は抽象的表象より成るものである、吾人の判斷が認識を云ひ表はそうとするには必ず充分なる理由を有せなければならぬ、即ち其の理由には有すに於いて始めて其の興ふる處の賓辭が眞であり得るのである、しかしして眞理には四種あるを認むる、即ち、論理的即ち形式的眞理、實質的眞理、先天的眞理、先論理的眞理の四つである、しかしして、其の論理的眞理は判斷を結び付くる上に於て其の形式上に於て正しきもの、其の實質的眞理は感性的直觀を本とするもの、即ち判斷は其の直接經驗を本とするものであるからまたこれを經驗的眞理とも云ひ得る、其の先天的眞理は悟性と純粹なる感性に存する直觀的經驗的知識の形式を基本として生じたるものである、先論理的眞理は同一原理、矛盾、不容間位及び判斷の充足原理の眞理の

如く、理性の中に存する一切の思惟の形式的制約を基本として生ずる所の眞理であるしかして認識力の對象の第三、

存在充足原理、これは完全なる表象の形式的部分、即ち内官外官の形式即ち時間空間の形式の先天的直観より成るものである、これ等は純粹なる直観としては認識力の對象である、時間空間は其の各部分が相互に關係する處の特性を有つて居る、しかして其等の各部分は相互に相制約する、此の關係をば空間の場合には位置と稱し、時間の場合には繼起と稱するのである、かくの如く時間空間の各部分が相互關係によつて規定さるゝと云ふ理法が即ち存在充足原理と云ふのである、時間の場合には其の各時間はその先だつ所の時間に所依する、だから時間の各部分の相互關係は一切の數に依從する、其の各の數は其の存在基本としてこれに先だつ處の數を豫想するものである、これと同様に、幾何學は空間の各部分の位置關係を以て其の基本とするものである、實にこの時間的關係と空間的關係とは共に事物存在の基本を成す處のものである

しかして認識力の對象の第四、

行爲充足原理、これは内官の直接對象即ち欲求の主體より成るものである、しかして此の欲求の主體は、其の認識する處の主觀に對しては客觀即ち對象である、しかして此の欲求なるものは唯其の内官に與へらるゝ處のものであるが故に時間に現はれて空間には表はれないものである、で此の欲求に於ける場合には、其の充足原理は、行爲充足原理或は動物行動の法則となる、即ち動機が、動作の依つて生ずる處の外的制約たるだけは其の原因として認むる事が出来る、しかしてそれは外的直観に於て得られた處の物質世界より成る所の對象の第一類と聯關せしめて考察する事が出来る、けれども吾人は動機の影響を以て他の一切の原因の様に、全く外部より即ち従つて間接に認識するばかりでなく、又同時に内部から即ち全く直接に認識する事が出来る、ここに於て吾人は其の内的經驗によつて、原因によつて結果の生ずる處の秘密を認知し得る、即ち其れは動機の内部に於て見らるゝ處の因果律其のものである。

以上はショーペンハウアーの其の知識論の大體である。

### 三、認識の批評、純理論

純理論は其の認識を理性の優越に訴へて其の認識其のものに價值を求むる處のものである、しかして其の價值とは即ち其の正確であると云ふ事の其のものである、だから其の理性に於て其の正確と價值なるものが成立しなかつた場合には、其の與へられた處の認識其のものは不成立となり了るのである、即ち認識論は其の理性の優越性に據る處の論究である、純理論者によれば、吾人の認識中に於て正確であると認め得べきものは、それはたゞ吾人の先天的に具はれる處の能力たる處の理性と稱する處の知能に基ける認識に於て始めて其の正確と價值とを認め得るものである、しかして、彼の感覺等に即して所定する處の認識は到底其の認識の妥當性を認むる事は出来ないものである、即ち感覺なるものは所謂妄覺幻覺錯覺なる種々なる状態のもとに其の認識の誤謬を來たす處のものであつて到底其の正確なる認識客觀的妥當を求むるには不正

確のものでなければならぬと云ふのである、たとへば若し其の感覺による所の認識が正確であると認むるならば、視界に於ける遠近の關係の如きは到底其の説明する事の出来ないものとならなければならぬ、即ち近くのものはその眞形體に妥當する程度の感覺を得るのであるとするも、其の遠方に在る處のものにありては其の形體は其の距離に従つて縮小されてあるのであるから、其の場合には感覺は其の眞形體の妥當的認識は不可能のことではなければならぬ、其の場合にありては其の形體の妥當的認識である事はたゞ其の理性に於てのみこれを行ふ事が出来るのである、即ち理性に於ける認識は、たゞ其の感覺に憑依するものではなく、其の感覺を理性に於て批判して其の判断の結果としての認識が所定されるのである、即ち理性に於ける認識は、感覺を其のまゝ受くる事なしに此の場合には其の物體と距離との關係に就いて其の認識の客觀的妥當性を求むるのである、だから純理論に於ける認識は、事物の感覺に現はれる處の種々なる場合に於ける其の變化に關することなしに、それを理性の批判の力に

よつて其の變化相に囚はるゝ事なく、其の事物に於ける客觀的妥當性を捉へ來つて認識の所定とするのである、だから其の認識は正確なる處の客觀的妥當性を認むるものであるのである、しかるに此れには反して、彼の感覺なるものは、其の單なる感覺其のものに憑依する處のものであるから、其の事物に於ける種々なる場合の其の變化相をも、其の感覺の其のまゝなる状態に於て其の認識を所定する、此れ其の到底其の正確なる客觀的妥當性を求め得る事の出來ない所由である、感覺によつて得る處の認識は到底不正確のものたるは免がれ難いものであると、即ち純理論に於ける認識は其の理性の批判によつて行はるゝのである、しかして理性は吾人の本來に於て具有する處のもの即ち先天的能力である、だから純理論はこれを先天論とも稱するのである。

純理論は其の本來に於て、認識の確否の問題として生起されたるものである、即ち認識論に於ては其の認識其のものゝ可能性に關する處の即ち真相の攻究であり、純理論にありては其の認識に於ける作的方面に於ける價值の問題に關する論究である、其

の價值は即ち客觀的妥當性に於ける確否の問題である。

此の確否の問題としての純理論は、彼のヘーラクライトスの云へる處の、即ち眼と耳とは其の意を理解せざる心を有する人に對しては不良の證憑であると、此の言葉は即ち純理論者の憑依する處のものである、即ち理性なしには妥當正確なる認識は行はれ得ないと云ふのである、吾人の感覺による處の認識は ばゞ、其の誤謬である事を認むるのである、たとへば其の簡單なる事實としても、彼の太陽が東より西へと運行する、それは吾人が日常目撃する處の事實である、しかるに實際は太陽の周圍を地球が回轉して居るのである、此の場合太陽の東より西へと運行する事實を其のまゝ認識する事は其の感覺に依る處のものであり、太陽の周圍を地球が回轉するのであると認識する事は其の理性の判断によるものである、しかして太陽の運行すると見るのは誤謬であつて、太陽の周圍を地球が回轉すると云ふのが眞理であることされるのである、即ち感覺は其の變化相に囚はるゝ結果其の誤謬に陥入る處のものであり、理性は其の

變化相に囚はるゝ事なしに其の批判の作用によりて推究して真相に到達する、従つて其の正當なる認識の行はれ得るものと認めなければならぬものである、即ち純理論は理性の價値に憑據して立論せられたものである、これを要するに純理論は其の理的根據によつて推演して其の普遍的必然的なる其の状態を認識する處のものである、之は知識の作用即ち理性の批判である、しかして其の普遍的なるものは、尋常に行はるゝ處の感覺にも其の認識の可能を認め得べき處のものであるけれども、其の必然的なるものに到りては特種の理的根據によつて行はるゝ處のものである、即ち其の普遍的なるものにおいて、其の物の長短に於ける場合、其の長短は感覺によりて判斷する事が出来る、けれども純理論において其の認識は、感覺の無批判に關せず其の五尺は四尺より長いから五尺は其の長さものである事を認識するのである、而して其の必然的なるものは、理的現象に關して其の理的推究の結果として其の現象其のものご一致する處の推斷に於て其の認識を所定するものである、これ獨り理性に於て可能のもので

あつて感覺の及ぶべからざる處のものである、かるが故に純理論の認識に於ける處の正確を豫想し得るのである。

此の純理的傾向は其の事物に於ける眞と假との觀念によりて生起される、即ち吾人が一個の矛盾を経験したる場合、たとへば干物を幽靈と誤認したる場合、其の幽靈と認めたる事は假象であつて其の干物である事は真相である、しかして其の假象である處は要するに其の理的根據即ち理性の批判が行はれなかつたから、其の認識の誤謬に陥入つたのである、即ち真相に到達するには其の事物に於ける理的根據、即ち理性の批判に須たなければ認識の正確を豫想する事は出来ないと考へる、此の矛盾に於ける眞假の批判は、其の感覺の不正確を経験する事によつて當然に必然に純理論的傾向を惹起するものでなければならぬ、此の矛盾は人間に於て屢々經驗し得る處のものであるしかして此の矛盾の發生は此の純理論の微因でなければならぬ、従つて此の純理論的傾向は古代に於て現はれ居つたのである、で此の純理論が其の形ちを現はし來つたの

はバルメニデースに於てある、けれどもこれが大成をなしたるものはプラトーンに於てある、即ちプラトーンにありては、世界を眞假の兩面より觀、其の感覺によりて知る處のものは假相に過ぎざるものとなし、眞世界は概念の世界に外ならぬものであるから、其の認識即ち眞正當は吾人が先天的に有する處の理性によつてのみ得らるべきものであるとしたのである、此れ其の純理論の徹底的立言をなす處の所由である、かくて純理論は其の成形を得たのである、要するに純理論は其の理性を以て唯一の眞知として知識の根元とするものによりての所論である、即ち眞知ありて始めて眞なる即ち正確妥當なる認識が可能であると論ずるものである、而して此の純理論の其の理性に憑依する處の極端に走れりと見るべきものによりては、其のこれを以て一の神秘的視する底の説を生ずるに至つたのである、即ち此の派の見る處によれば、認識の可能性は、其の認識の行はれる原理は感覺を越えて而して尋常理性を越えたる處の或る知識であるとの見解を有するに至つたものである、此の派の其の見解する處によれば

認識の外形たる概念なるものは、それは眞に實在する處のものである、しかして個物は單に其の模寫に過ぎざるものであると、此の見解のもとに行はるゝ論説を實念論と云ふのである、實念論は其の純理論即ち認識論の派生として、其の認識の作用方面の論究の範圍を脱して、認識の本體論或は觀念論に於ける實在論的傾向に陥入つたものである、しかして此の實在論的傾向の實念論は、彼のデカルトに到りて其の正系に引き戻されたのである、しかしてデカルトに依れば、理性は唯一の眞知の本源である、吾人の感覺は誤謬に陥入り易きものであつて眞知は到底望むべからざるものである吾人には其の本有なる觀念なるものがある、たゞこれに基づいて理性によりて知るもの、みが正確なるものであると、しかして彼れは其の理性の特質は其の數學的なる知識であると思惟せるのである、即ち事物に關しての眞正なる認識を得ようとするには數學的なる知識によらなければならぬと云ふのである、然るに數學なるものは、其の本來の性質よりして、一の公理から演繹して行はるゝものである、しからは又認

識に於ても其の公理となるべきものがなければならぬ、デカルトは此の點に關して、それは本有觀念なるものである、即ち人が其の生來に於て有する處の觀念なるものが即ち其れである、しかして觀念とは思惟即ち理性其のものであると、彼れの此の數學的なる見解は左の如く論じて居るのである。

余が今日まで最眞實なりとせるものは、凡て直接或は間接に感官より受けたるものたらざるはない、然れども時としては余は其の感覺を以て欺騙なりとする事がある、既に此の如く一回にても余を欺むくものに對しては、余は決して信用を置くことが出來ない、或は云はん感官は實に微小、遠隔なる事物を誤まり傳ふることあるべきも、余がこゝに於いて云ふが如き知覺に至りては斷じて誤まる處がないと、然れども吾人は夢に某所にあるを見れば夢中には之れを眞と思ふだらう、されど覺醒の後誰れか之れを信ずるものがあらう、然らば余が今眞とする所のもの豈に夢中に現象の如くならざるか、或は云はん夢中の現象は此の如く明瞭でない、然れども是れまた事實に反す

るものと謂ふべきである、要するに吾人は今、大夢中に在ることなきを保せぬのである、然れども此の中最確實最普遍なるものなきか、想ふに、延長的物體の形狀及び其の分量、即ち大きさ及び數—其の物體の存在する空間及び時間等は即ちこれである。

此れ其の數學的なる知識を理想する所由である、しかれども此の數學的知識の規範は其の認識の其の必然性に於けるものによりては稍其の規範を超ゆるものなきか、デカルトは此の點に就きて其の所謂數學知識なるものも又欺騙ならずやとの疑惑を生じたのである、しかして彼れは其處に、より唯一に確實なるものとして、自我、なるものを捉へたのである、かくて彼れはかく論ずるに至つたのである。

自我の存在、は實に解釋の端緒である、然らば自我とは何ぞや、普通に解釋する處に従へば、この身體及び精神より成るものなりと云ふ、然れども吾人が前段に於いて知り得たる自我はたゞ一般に思惟するものたるに外ならぬのである、而して是れ實に自我の性質中直接且つ明晰なるものにして、他の性質は皆之れに基くものである、例

へば自我は感覺すと云ふことは實に感覺すと思惟する事に外ならぬ、一物を見ると云ふも實は思惟を以て其の眼に映じたる像を解釋したるに外ならぬのである、或は又自我は身體を有すと云ふ事も、是れ直接に言ひ得べきにはあらずして、身體を有すと思惟するによりて始めて成立するのである、かく自我の本質は思惟でなければならぬ、而して自我を思惟の本質と看做すことが最も明晰にして且つ確實なりとせば、爾後確實なる認識を得んと欲せば常にこれを模範とせねばならぬ、即ちこゝに次の如き確實性の標準を得た、曰く余が全く明晰且つ判明に觀ずるものは凡て眞である。

かくて純理論は、其の認識に於ける其れの作爲、即ち認識する事の正確であり得る事は、理念の活動即ち理性の自我の活躍に依る外ないものであるとの論究に到達したのである。

#### 四、認識の批評、經驗論

經驗論は、其の認識に於ける一切の知識は吾人の其の經驗に基づいて得る處のもの

であると云ふのである、されば知識の根源は經驗でなければならぬ、即ち認識の可能は其の經驗による知識に立脚する處のものであると云ふのである、即ち純理論にありては認識を先天的に解釋する處のものであるに對して、此の經驗論にありては認識は後天的なる經驗による知識に基づく處のものであるとするのである、即ち經驗論にありては、吾人の知識は悉く外界より來るものである、外界の刺戟が腦に傳はりて感覺となり、これ等が蓄積して諸種なる高尚なる知識は生するのである、吾人の知識は經驗より得來るものである、それは否定し難い事實である、吾人の成長は其の年一年と經來る經驗の外的經驗即ち事實と行爲との知識化——それから内的經驗即ち知的經驗による處の知識の淳化即ち理性化——此の二つの經驗的作用に淳化を與へて其れ自身の知識即理性の形態を生するのである、しかして認識は其の經驗によりて得たる處の知識に立脚して行はるゝものである、これ即ち其の經驗論の起る處の原由である、もしも吾人に經驗を與へなかつたならば、吾人は認識の可能を失ふであらう、即ち吾人



は其の自己に於てかつた経験せざる處の事物に遭遇したならば、そは何人も其の認識の可能を豫想する事は出来ないであらう、しかれども吾人の経験したる事物に對しては何人も躊躇なく其の認識の可能を斷言する事が出来るであらう、これ認識に於ける経験の動かすべからざる根據を有する處のものでなければならぬのである、即ち經驗論にありては、其の經驗以外なるものゝ認識は其の不成立を斷言せなければならぬ、しかして一部よりこれに類似せる他部に推論する場合にありては、それは經驗に立脚する處の類推であつて、其の經驗論的認識として何等疑ふ所なき處のものである、これを要するに經驗論に於ける認識は特殊蓋然的なるものである、即ち根據ある確實的認識である、したがつて彼の純理論に於けるが如き普遍的必然的なるものではないのである、所詮は、經驗論は認識の對象を其の自己の理性の經驗に觀照して其の對象に關する認識の所定を與ふるものである、即ち經驗論は、純理論の演繹的であるに對して歸納的である、しかして其の歸納的であるのは、認識の對象其のものを一度自己の

經驗的知識の中へ還元して其處に認識の所定をなすものであるからである、従つて經驗論は、其の所謂特殊蓋然的なるものとなり得るのである、認識が其の知識によりて行はるゝ事は疑ふ餘地もない、しかして知識は其の經驗によりて其の内容を充實をせしめ、其の認識の可能性を大ならしむる事もまた否定する事の出来ない事實である、即ちロックの云へる如く、心は猶白紙の如きもの、經驗の印象によりて始めて文字(即ち知識)を顯はすと、經驗が其の知識の根源となり其の輿材となる事は論議の餘地なきものゝ如くである、しかれば其の知識に立脚する認識はまた其の經驗に所依するものであると認むるもまた一つの見解でなければならぬ、ロックは其の經驗論者の立場から、純理論に辯駁を加へて居るのである、即ち、

第一の辯駁、純理論者は往々同一の原理即ち甲は甲である、及び矛盾の原理即ち甲は非甲でない、を擧げて本有的原理にして一般に認容せらるゝものとする、然れども是れ小兒及び蠻人の決して認容する能はざる所、焉ぞ之れを本有的と云ひ得るだらう、

斯く言はゞ論者或は答へて曰はん小兒蠻人等は素よりかゝる原理を知らぬだらう、然れども是れたゞかゝる原理として之れを意識認知せざるのみで、其の原理の内容意義に至りては既に彼等の心中に具はるあり、例へば同一物を見て同一物と認むるが如きは不識不知此原理に従つて推理する證である、然れども既に意識せずと云はゞ其の原理の心中に存せぬ事は明かである、意識せざるものを心中に存すと云ふは矛盾だからである、されば論者の説明は虚妄である、若し論者にして小兒等にかゝる原理を心中に有するなく、唯だ之を知る能力を有すと云はんか、是れ所謂本有の義の變じたのである、此の如くば如何なる知識も本有と云ひ得よう、なんとすれば、如何なる原理も如何なる知識も、心中に之れを知る能力なければ吾人に認知せられぬからである。

第二の辯駁、是に於て論者或は曰く、此の原理は推理と共に顯はるゝものにして臺も經驗を須たずと、然れども此の、共に顯はるゝとは、二様に解釋せられるだらう、第一、推理と同時に發生すと云ふ義、第二、推理の助けによりて發見せらるゝと云ふ

義である、第二の意義ならば無論本有的なりと云ふの證とならぬ、なんとすれば、如何なる原理も推理によりて發見せられるからである、之れに反して第一の意義なりとせば是れ全く事實に反する、なんとすれば、小兒等は此の原理を知らずして推理し得べく、即ち此の原理は推理より遅く顯はるれからである、例へば、甲は非甲ならずと云ふ原理を知らざる小兒もよく酸味は甘味と異なることを推理し得べきである。

第三の辯駁、或は又曰はん此の原理は一旦發言すれば容易に何人にも認容せられよう、これ他原理と異なる點にして其の經驗より來らざる證なりと、然れども第一に是れ決して本有的原理の特徴とするに足らず、論者が經驗より來る原理と看做すものに就きても此の如き事實あり、且又第二に此の如き原理は發言せらるゝに至りて始めて認容せらるゝものなりとせば、是れ直ちに其の原理が本有的ならぬ事を示すものである、なんとすれば、本有的原理は此の如き教訓を待ちて後知らるべきものでないからである、而して又第三に論者の言は全く虚妄である、論者の所謂本有的原理は決し

て發言せらるゝと共に直ちに理解せらるゝものでない、之れを理解せんが爲めには許多の準備を要する、然らば則ち之れを以て經驗に負ふ所なしとするは事實に背反するものと謂はねばならぬのである。

即ちロツクによれば、純理論に於ける原理なるものは彼の小兒蠻人等の如き到底その認容され得ざる處のものである、即ち知的經驗に乏しきもの或は其の實際的經驗に乏しきものありては、認識の可能性を缺きまたは乏しく其の程度に應じて限定されるは、明かに其の純理に於ける原理なるものも疑はざるべからざる難點でなければならぬ、要するに純理論に於ける本有觀念なるものは、其の原理に富める者にありてのみ可能なる處のもの以外認め難いものである、だから吾人の認識の根源は經驗以外にあり得ない處のものである、これ經驗論者の憑依する處の論據である、此の點に於て經驗論は吾人の實際上の證明に基づく處の確實性を有するものと見なければならぬ觀念なるものは要するに吾人の其の經驗に基づく處のものである、此の觀念の形成に

は四種あるを認むる、第一は單一なる感官より來るもの、たとへば色、音、熱、固結性の觀念の如きもの、第二には諸種の感官より來るもの即ち視覺及び觸覺の合して延長形狀等の觀念をなすが如きもの、第三には反省より來るもの、即ち思惟と意欲との二作用に於ける觀念の如きもの、第四は感覺と反省の合して生じたる處の觀念、たとへば快樂及び苦痛、存在及び統一、力、連續等の如き其れである、でこれ等の其の單純觀念は又相結合して複雑なる觀念となる、此の複雑觀念は三様にある、一は様式即ち時間空間等すべての物の存在する形態、本體、關係即ち因果律である、これは皆其の經驗に基づいて成形さるゝ處の觀念である、ロツクの經驗論を承けて其の頂點に達せしめたるものはヒュームである、即ちヒュームによれば、吾人は實際事物が前後相連續して起ることを經驗するのみで、其の間に必然的聯絡あるを経験しない、木を火に投すれば即ち焚く、是れ吾人の曾て經驗せし處である、然れども火の燃ゆると木焚くるとの間の關係は吾人の毫も知る能はざる所である、されば過去に於て、是等二件が

相繼起せりとて、未來に於てもまた必ず然るべしと斷じ能はぬ、たゞ過去に於て常に繼起せるを経験したるを以て、其の知識は習慣となり終に未來に於てもまた然るべしと思ふに至るのみである、故に因果の原理は事物の間に必然に存せぬ、従つて之れが知識は本來我に具はるのでなく、たゞ經驗的習慣的知識なのである、従つて又其の知識は決して普遍的必然でないこと、即ち、ヒュームは純理論者の其の必然的知識とする處の因果の原理に於ける觀念の優越を一蹴了つたのである、かくて經驗論は其の批評認識論に於て動かすべからざる一論究となつたのである。

五、批評の批評、カントの批判論

カントの其の批判論は、其の批評の批評即ち懷疑的傾向より出發せる處の論究である、即ち彼れによれば、「一切の認識は經驗を以て生まれども經驗より來るものではない」と、即ち彼れは、純理論と經驗論とを其の辨證法的方法のもとに其の批判論を成形したのである、カントによれば形式即ち形は先天的であつて、質料即ち感覺は後

天的である、しかして形式は事物の其の本來の具有する處の一感覺たり得る處のもの即ち區別の統一に於いて表はれる、しかして形式なるものは其の認識上二つの形式となる、一つは直觀の形式これは感性の作用であつて知覺と同じものである、一つは思惟の形式これは悟性即ち理解力其のものである、直觀の形式は時間と空間との二つに分けなければならぬ、時間は内感の形式であり、空間は外感の形式である、しかして思惟の形式はこれを範疇と云ふ、これは感性の統合作用である、で此の形式の内容は四綱十二範疇となる、即ち、

一、分量—數學的範疇—直觀の對象。

單一性、全稱的、「すべて猿は獸類である」

雜多性、特稱的、「或る猿は人に酷似してゐる」

全體性、單稱的、「ソークラテースは希臘の聖哲である」

二、性質—數學的範疇—直觀の對象。

實有性、肯定的、「猿は獸である」

非有性、否定的、「猿は鳥ではない」

制限性、無限的、「猿は非鳥である」

三、關係—力學的範疇—對象の存在。

本質性、定限的、「甲は乙である」「甲は乙ではない」等

因果性、假言的、「若し甲が乙ならば丙は丁である」

交互性、選言的、「甲は乙若しくは丙である」

四、様相—力學的範疇—對象の存在。

可能性、未決的、「甲は乙であらう」

現實性、決定的、「甲は乙である」

必然性、必然的、「甲は必ず乙でなければならぬ」

で其の直觀の形式は、

一、時間及び空間は非抽象的概念である。

時間は經驗を抽象して得たる處の經驗的概念でない、蓋し、今爰に一の經驗を檢すれば、其の中には現象が同時に存在即ち俱在し、若しくは前後相連續即ち續在するを見るであらう、人或は時間の概念は此の現在及び續在の事實を抽象して得るものとなせども、然らず、なんとなれば、かく俱在若しくは續在と云ふ事の中には、既に時間の概念が含有豫想するものであつて、時間てふ事なくば俱在或は繼起と云ふ事も意味なき事となり了るべき筈であるからである、之れと同じく空間の概念もまた或物體が同處若しくは異所に在る事を抽象して得たるものではない、なんとなれば、其の所謂同所または異所とは空間中の名稱に外ならぬものであるからである、だから空間及び時間の概念は經驗によりて生じたるものではなく、反つて經驗こそ此の空間及び時間によりて造らるゝと謂ふべきものでなければならぬ、それは一切の經驗は此の兩形式によりて形づくらるゝものであるからである。

二、時間及び空間は先天的必然的觀念である。

吾人は一切の現象を離脱すと思惟するを得るもなほ時間と空間を脱する事は出来ないのである、即ち現象なき時間及び空間を考へ得べきも時間及び空間以外の現象を想像する事は出来ないのである、かく兩者は不可離の觀念であつて即ち必然的である、これは現象の存在し得ることの要件であつて、しかして現象の前に存する先天的觀念である。

三、時間及び空間は分析的或は普遍的觀念でない。

時間と云ひ空間と云ふも各一なるものである、即ち年月日時の如き、遠近、平面立體の如きは同一の時間及び空間の部分ではないのであつて、これは單に或點に於て限れるに過ぎないものである、だからこれ等各部分は決して全體を離れて存在し得べきものではない、又しか考へ得べきものでもない、かくの如く各々唯一なる時間及び空間は、單一なる觀念であつて、諸物から共通の點を抽象して得たる概念ではない、從

つて此の觀念は經驗を待たずして直觀に顯はるゝものである。

四、時間及び空間は無限である。

個々の時間及び空間は唯一の時間及び空間を制限したるものに過ぎないのであるから、此の根本の時間及び空間は無限のものでなければならぬ、で此の無限なる觀念は直觀に顯はれるものであつて概念と稱する事は出来ないのである、なんとなれば、概念は同種類の事物を抽象して得たる名稱に外ならぬものであるから、それは各個物中に含まれて居なければならぬものである、たとへば、馬なる概念は個々の馬にも包含せられて在るものである、けれども無限の時間及び空間は決して有限の時間空間を認むる事は出来ないのである、だから時間空間は概念ではなくて直觀に於けるものでなければならぬ。

で其の直觀の形式は之を先天的感覺論として論辨され、其の思惟の形式は之を先天的分析論として論辨されたるものである、で此の二つのものは先天的必然的のもので

あり、其の觀念は普遍的確實性を有するものである、しかして一切の判斷即ち認識は此の觀念に基づいて行はるゝに於て最も確實なるものと認めなければならぬ、で此の判斷なるものに二種あるを認むる、即ち一は分析的であつて、たとへば「物體は延長を有する」と云ふ類である、即ち物體なる概念の中には其の延長性なる概念は必然に含まれて居る筈であるからである、尙また一は綜合的であつて、たとへば「物體は重量を有する」と云ふ類である、即ち其の物體と云へる概念の起る瞬間には未だ其れが果して重量を有するか否かに思ひ至らない筈であるからである、ところで其の分析的判斷は先天的であり、しかして綜合的判斷は經驗的のものであると見なければならぬのである、したがつて綜合的判斷は吾人の知識を擴充するものである、即ち他の概念を包攝する性質をもつて居るからである、しかるに其の分析的判斷にありては單に既知の概念を分析するに過ぎないのである。

かくてカントは其の認識の起原に遡りて、悟性と感性とは其の相融合せざるべから

ざる關係のもとにある事を論究して 其の純理論と經驗論とは俱に其の認識の用たるもの以外のものでない事になつたのである、即ち此の兩者の特質が相合して判斷の作用をなすところのものであると云ふのである、これを要するに、知識は經驗によりて形ち造られ、判斷は知識によりて行はるゝのである、しからばまた純理論と經驗論とは二つの一つであると云ふ事が出来よう、即ち經驗論は純理論の根據の問題であり、純理論は認識の生ずる處の問題でなければならぬ、批評論は此の點に於て優越せる見解であると見なければならぬ。

#### 六、認識と其の實在論

既に述べたる如く、認識は理に即して生起せられたる問題である、しかしてこれは即ち、認識の本體は宇宙の實在の本體の原理が其の原理の不可思議が吾人の哲學上三大事項とする處の、物、心、理なる三を發現せるものであつて、これを要するに實在の真相は其の根本的原理に於て此の三者を統一包括せる處の一なる原理の存するもの

でなければならぬのである、しかし其の何者であるかは、いまだ其れは宇宙の神秘なる真相の秘密として不可證の範圍に屬して居るのである、これは其の可證は前途なほ遼遠なるものでなければならぬ、哲學はこの真相の可證を目的として進むものである、即ち哲學は遼遠に亘る過程な假定の學たるを豫想せなければならぬのは之が爲めである、此の宇宙の實在の本體の原理の探究の困難な事は、到底吾人の其の造化の模擬の企及不可能なるが如く不可能である、即ち吾人の所謂細胞の有する活動力と其の結合の作用とは、もとより其の有機的成長の現象の原理の本體の到底其の不可知を存する間は、吾人が此の宇宙の實在の本體の神秘其の實相は到底其の不可知不可證のものたらざるべからざる性質のものでなければならぬ、哲學に於ける三大攻究事項に於ける其のそれ々の所謂根本的原理とする處のものは、やがては此の實在の真相に於ける眞原理に統括さるゝ處の辯證法的に於ける其の與材たるものを豫想せなければならぬ、しかしして認識の其の根本的原理は必ずや其の本體的原理に共通する處の原

理の發現として認識其のものに相違ない、即ち認識に於ける其の眞正妥當は必らずや其の必然的事實として其の實在の本體の原理のもとに存在する處の原理でなければならぬ筈である、これ吾人の認識論に關する處の見解である、若しかやうの見解が可認的のものであり得るものならば、認識に於ける其の實在論は、其の實在論と觀念論とは其の論究の方式に誤りなきやに思惟せらるゝものである、即ち認識其のものゝ本體的考察は物の存否に存するものとして攻究する事なしに、其の認識其のものが如何に其の宇宙の實在の本體の根本的原理の中に在り得るか攻究でなければならぬ、吾人はかゝる見解のもとに其の實在論と觀念論に疑を懷き在るものである、で今此の兩論の傾向を見るに、其の目的方面を出でざる體のものである、即ち此の兩論の其の論據とする處は、其の一は認識の確實性を固執するものであり、而して其の一は其の超越性を論證する處のものである、しかし其の確實性に論據するものは其の實在論に於けるものであり、其の超越性に論據するものは其の觀念論と稱する處のものに於いて



である、即ち實在論にありては、吾人の觀念なるものは外界に存在する實物と符合する處のものである、しかして其れは吾人の其の物によつて生ずる處の刺戟を感受してしかして其の物あるを認識する處のものである、しかして其の觀念論にありては、吾人の認識したる外物の觀念は單に吾人の觀念たるに止まるものであつて、必ずしも外物の正常なる映寫と斷すべきものではない、吾人の認識する處の外界は畢竟吾人の觀念に過ぎざる處のものでなければならぬとする處のものである。

此の兩論の其の分かるゝ處は、其の認識なるものが其の主觀的觀念に基づくか、或は其の客觀的觀念に基づく處のものなるかに於て分かるゝのである、で其の客觀的觀念に論據する處のものとしては其の經驗論的に生起せられたる處の實在論であり、其の主觀的觀念に論據する處のものは其の純理論的に生起せられたる處の觀念論となつたのである、しかして其の實在論の根據とする處は、即ち感覺は屢吾人をして錯誤に陥入らしむる事がある、これ其の感覺的認識の不確實或は虛妄であると認めしむる處

の理由である、けれども此の錯誤なるものは、吾人自ら生じたる處の錯誤であつて、したがつて其の錯誤に於ける處の觀念は、觀念が外物を模寫する處のものであると見るべからざる處の證左でなければならぬと見る處のものである、しかして其の觀念論の論據する處によれば、觀念は主觀的にも客觀的にも到底其の觀念の實在を證する以外のものではない、しかして認識は此の主觀的作用の結果に基づく處のものであつて其の客觀的物象は其の表寫に過ぎざる處のものでなければならぬ、しかして其の物象の表寫の可能は、觀念の認識の作用に於ける其の主觀的範圍を超越せる處の過境性に於ける處のものであると云ふのである。

此れ其の實在論と經驗論の分かれて論議さる處の要點である、しかして此の兩論に調和點を與へんとしたものはカントである、カントは其の先天的觀念論に於て此の兩者の包括をなしたのである、即ちカントによれば、認識即ち統一的經驗を構成する事は吾人の悟性の借用である、しかして此の悟性なるものは、既に述べたる處の思惟の

形式即ち範疇なる形式を有する處のものである、しかるに此の範疇の認識的作爲は、此の實在論と觀念論とに説明を與ふる處のものでなければならぬ、しかして此處に三様の問題が生ずる。

一、此の範疇なるものは悟性の其の先天的演繹に於いて表はれる、即ち純粹主觀的觀念として顯はれるものである、しかして此の範疇が如何にして客觀的認識を規定し得るかこれ其の第一の問題である。

二、悟性は其の圖形論的たるものである、此の悟性の形式たる範疇は如何にして其の感性と合同し得るものであらうかこれ其の第二の問題である。

三、感性の對象は物である、しかして其の物其れ自身は吾人の感性に觸れて經驗となる、經驗の説明は果して其の絶對的なるものであり得るかこれ其の第三の問題である。

カントは此の三様の疑問のもとに、其の實在論と經驗論の批評を下し而して其の統

一を試みたのである、即ち其處からカントの批判哲學は生じたのである、しかして其の批評論は、認識に於て其の先天的悟性の形式と後天的感性の經驗的質料の合同に於て其の判断の行はるゝ事を認むる處のものである。

吾人は以上に於ける三部門即ち物、心、理なる三大攻究事項に於て其の哲學に於ける問題の其の體系的説明を終つたのである、此の項部別は概して妥當なりと認むる處なれども、其の妥當なりや否やは識者の是正を須つて止む處のものである、之れを要するに哲學の根本問題は、其の宇宙の實在の本體に於ける其の本體其のものなる根本的原理の真相を攻究するを以て、其の體系論であると認めなければならぬと思ふのであるから、吾人の體系概論は此の意味に於て論述せるものである。

然しながら時代の進歩に伴ふて、今や在來の宗教は光りを失ひ、傳統的の藝術は廢れ、古い道德の根柢は朽ち、しかして之れまでの哲學は破滅の危機に瀕してゐる、素より新時代に宗教家として教育家として哲學者として立てる若き吾人が、本書の如き

其の意に充たざる所ある講演筆記を世に公けにするは自ら省みて其の僭越の甚だしきを深く耻づるものである、いづれ後日に於いて、新らしく稿を改めて吾人の新哲學を世上に公表して江湖の示教を仰がん心なるも、先づ其れまでは吾人の著なる中央出版社刊行の「哲學大成」によりて稍や其の缺を補ひ得べしと思ふ。

## 第三篇 旁系概論

體系と旁系——アリストテレスミカントの區分——人生——分析的證明——倫理學——道德哲學——廣義の人生——狹義の人生——奥底の假定——知徳合一論——福徳合一論——道德說  
 功利觀——法律的規範——人生の現實——生の持續——樂天觀——厭世觀——人生肯定——人生否定——人生の原理——豫定調和說——煩惱——人生の理想——動的原因——自律說——他律說——先天的道德法則——快樂說——嚴肅說——利己主義——利他主義——社會哲學——共同團體——秩序——內的既存性——權力意志——家庭——自我の放恣——屈伏意志——習慣的原因——國家の權力——法律——規定——民約——進步——強制的階段——政治的階段——實業的階段——義務の觀念——宗教哲學——人格的實在——假定——原始宗教——多神教——一神教——二神教——汎神教——萬有在神論——知信合一——天啓——美學——美意識——無關心の適意——相對關係——絕對無我——自然の理想——人間の理想——美の認識——カント判斷力批判——形式論——客體美——主觀美——遊離現象——經濟學——經濟活動——勞働職業——經濟的デモクラシー——唯物史觀——法律的原理の研究と効果——法理學と法律哲學の異同——經驗論的法學——社會法學——階級争闘の國家觀——社會法學の長所短所——社會功利說——社會主義共產主義法律觀——文化科學としての歴史——新カント派の解決——文化科學の解説——文化科學の分類——政治哲學——宗教哲學——言語學

## 第十一章 體系と旁系

既に説きたる如く、哲學の其の目的即ち其の攻究すべき本來の性質は、此の宇宙に

關する根本的なる原理、即ち宇宙の實在の本體の真相其のもの、闡明にあるのであつて、しかして其の宇宙の實在の本體的原理即ち真相は、前篇に抱括せる處の哲學に於ける正當攻究事項たる處の、宇宙の其の外象的問題即ち物に即して起る處の論究、それから其の宇宙に於ける内面的問題即ち心に即して起る處の論究、しかして此の物と心とを接續する處の認識の根本的問題即ち理に即して起る處の論究、此の三つに於ける其の探究上の便宜的區分のもとに其の宇宙に於ける實在的本體原理の攻究にあるものである事は上來説き來たれる處によつて略其の哲學其のものに關する意義は決定せられたと思ふ、即ち哲學に於ける主要目的は、宇宙に於ける單一根本的なる原理其のもの、即ち宇宙に於ける實在の本體の真相の徹底的闡明其のものにあるは吾人の信じて疑はざる處である、しからば此の物、心、理に關する攻究は其の單一根本的原理に到達する處の三方面或は三大部門であつて、宇宙の真相は疑ひもなく此の三つの中の何れにか或は三つの中に其の單一根本原理の存在を假定して出發せなければならぬの

である、而して此の三方面は宇宙の真相を闡明する處の、哲學の現在に於ける處の、それ／＼の究竟的なる途でなければならぬ、されば此の三大部門は哲學攻究の重要な處の體系的事項でなければならぬのである、で此の部門の設定にありては、其の各見解する處によりて多少の差異はあるが、其の哲學に於ける根本的乃至基本觀念は、宇宙の實在の本體の真相即ち原理の闡明にあるは諸家に於て一致せざるべからざる處のものである、けれども其の部門の設定にありては各其見解の相違に基づいて異なる處のものを見るのである、即ちアリストテレスにありては、哲學の内容は論理、倫理、物理の三種である事を提唱し、カントにありては、其の純粹理性批判、實踐理性批判、判斷の批判——に於て其の哲學内容を規範して居る、而も又わが先輩たる學者にありては、其の哲學の攻究事項を、自然、人生、知識——に分けて設定して居る、これ等は皆其の各哲學的見解の相違に基づく處の提唱である、此の諸家に於ける其の哲學に關する處の概念の相違する所由のものは、其の見解の相違に主由するものであつて、

これ其の哲學の攻究が其の過程にあるに原由するものである、即ち哲學の目的とする處はいまだ其の真相の不可證なるに原因するものでなければならぬのである、もしも此の哲學に於ける問題の真相が闡明せられたものであり得るには、これ等見解の相違は當然に一掃され、其の根本的原理の統一性のもとに必然に、其の哲學に關する概念は統一されなければならぬのである、しかるに其の統一の所定を見得ないのは其の過程にあるの學なる因由の證左である、即ち哲學はいまだ其の過程にあるの學である、しかして吾人は既に其の體系概論中に述べたる如く、吾人の見解する處によれば、哲學の其の眞面目は、其の單一根本的原理の攻究を以て其の正宗であると認めなければならぬと信するものである、即ち宇宙に於ける其の實在的本體的なる真相としての根本的原理の闡明それが哲學の純粹目的であると認めなければならぬのである、即ち哲學は此の純粹目的に到達するための攻究でなければならぬのである、従つて其の攻究事項として設定すべきものは、宇宙に於ける其の大體的區分に於いて行はるゝもので

なければならぬ、これ吾人の其の哲學に於ける攻究事項の設定に於ける其の基本觀念である、かくて吾人は其處に、其の吾人の體系概論に於ける部門、即ち物、心、理に於いて其の宇宙に於ける其の大體的區別に於ける妥當を信するものである、吾人の見解する處によれば、さきに揭示せる處の、アリストテレス、カント、及び我國の學者の其の設定に於て、吾人の所定と異なる處あるを見るのである、しかして吾人の其の哲學に關する處の概念によれば、即ち其の哲學を以て、宇宙に於ける單一根本的原理の攻究を其の目的とすべきものであるとの其の理想に於ける立場からすれば、アリストテレスに於ける其の内容の設定は、其の吾人の其の哲學に於ける基本觀念に照らして稍異なるものあるを認めなければならぬのである、即ちアリストテレスに於ける場合にありては、其の内容の設定は、其の哲學の目的即ち其の單一根本的原理の所依する處の論理に反する様である、即ち其の所謂論理と云ふ處のものは、何んであらうか、これは純理に立脚せるものには相違ない、けれども其の實在的本體には其の

關係を認むる事は出来ないのである、なんとすれば、論理は單に推理の形式其のものであつて、論理はそれ以上のものではあり得ないのである、即ち其の單一根本的原理の攻究には關する處のないものである、これは論理は要するに其の攻究的に於ける推理の形式即ち攻究上の用たる以外のものではあり得ないのである、しかして其の倫理なるものは何んであらうか、これは人間の其の生活相に立脚する處のものである、従つて其のこれは宇宙に關する其の單一根本的原理の攻究と其の方途を異にせる處の、其の單に人間に憑依する處のものであるのであつて、要するに其の哲學の其の本質的攻究の範圍外のものであらねばならぬのである、しかして其の物理なるものは何んであらうか、これは物に於ける其の種々相に立脚するものであつて其の科學に屬する處の問題でなければならぬのである、科學の原理が其の哲學的原理に移入され得る事は其の勢力保存則、生物進化則の如き原理の發見によりて、其の哲學的目的の闡明に其の過程に於て其の發展と進歩に貢獻する處の大なるはこれを認めなければならぬ、け

れども其の物理に於けるものは物理其のものに於ける單獨目的のもとに行はるゝ處のものであつて、哲學の其の目的とする處のものとは其の根本の目的地に於て全然異なる處のものでなければならぬ、だから其の物理に於て單一根本的原理に參する處の其の物理に於ける原理はあり得ても、それを以て直ちに哲學の問題とする事は稍妥當ならざるを覺ゆるものである、アリストテレスにありては、其の區分の大體に於て吾人の見解する處と大差なきが如きも、其の實質に於ては、吾人と可なりの徑程あるを覺ゆるのである、而して其のカントの場合にありては、其の所謂純粹理性批判なるものは、吾人の所謂理の部門に相當する處のものであつて、しかして彼れとしては其の唯心論的立場から、其の理なるもの、本體は其の理性に於て其の實在を認むる處のものであつた、従つて其の論究は唯心的傾向のもとに、即ち宇宙なる其の實在の本體は、即ち其の真相は精神的のものであるこの假定のもとに、其の立論を爲したる處のものであるから、其の哲學に於ける三大部門は従つて其の既定の概念たる唯心論的根據

のもとに區分されたものである、だからカントにありては、實在の本體は精神的なるものとの既定觀念から出發せるものであるから、従つて彼れとしての其の哲學は最早や過程の領域を脱した處の、其の既然のものであらねばならぬ、其處には最早や攻究の勞作は無視さるゝ事となつたのである、即ち彼れによれば、哲學は、其の目的する歸着點は既に與へられたるものでなければならぬ、されば其處には批判がありて攻究は重要ならざる如き觀があるのである、だからカントにありては、其の哲學は批判の表傍でなければならぬ、かくて其の三批判は現はれたのである、しかれども其の宇宙の本體的真相が果して精神的なる或るものであるか否やはいまだ懸案のものたらざるを得ないのである、即ち其の純粹理性批判は、既定の分析であつて哲學の其の特質たる進歩的學なる本來の性質は蔽はれたるを覺ゆるのである、しかして又宇宙の實在の本體的真相は、單に精神的なるものとの斷定は、いまだ哲學にありては獨斷的なるの懸念なきを得ぬではないか、吾人は其の所謂批判の其の唯心觀念の所説に於て、其の哲

學に對する態度に關して稍間然たるものなきやに考ふるものである、しかして其の實踐理性批判にありては、これは其の意志的行爲の批判であり分析による處の名稱であつて、これ等は其の心理學乃至は倫理學の領域に入れべきものならざるかを思はざるを得ないのである、カントの其の哲學は、其の唯心的基本觀念からの區分であつて、従つて其の範疇は唯心範圍にあるものであり、其の本來の哲學の攻究區分乃至事項としては、其の一般的性質を缺如せるものにはあらざるなきやを思ふのである、しかして其の實踐理性批判は、意志的行爲に依據せなければならぬ處のものであつて、吾人の其の見解する處によれば、これは吾人の所謂其の獨斷的哲學の範圍に入るべきものでなければならぬ、即ち、宇宙の實在の本體の真相は假定ではないのである、しかして哲學は其の假定ならざる眞實在を目的として進むものである、單一根本的原理は假定をゆるさぬものである、カントは其の主意説によりて其の單一根本原理は意志であるとの假定のもとに、其の實踐理性批判は現はれたりと見る、けれども、其の意志な

るものは、唯するに假定であつて、宇宙の本體原理としての實在を證する處の既定の眞理とはいまだなり得ないのである、其の批判に於て其の哲學を出發せしめたるは、カントの哲學に於ける一の難點たらざるなきか、カント哲學の分析ありて綜合なきかの觀あるは、其の哲學の本來の過程的性質を無視せるかの疑ひに於て吾人の取らざる處あるものである、しかして其の倫理説の如きは吾人の所謂旁系哲學に入るべきものであつて、哲學の正宗外のものでなければならぬ、しかして其の判斷の批判にありては、これは吾人の其の旁系哲學に入るべき性質のものでなければならぬ、即ち判斷は其の情に即する處の作用であつて、これは人其のもの乃至は實在の眞相に參すべきものではなく、これは心に屬する處の一樣式に外ならぬ處のものであつて、此の情による處の判斷は、其の精神なるもの、正宗的方面なるに對して其の旁系的なるは其の本來の性質でなければならぬ、カントの哲學は其の唯心論的哲學としての成形は吾人これを認めざるべからざるも、其の唯心的傾向の偏重に於いて、哲學の其の現實に照合して

一般哲學の攻究區分としては成立せざるものなるを覺ゆるのである、しかして我國學者にありては、前二者に比して其の哲學の攻究事項に於ける區分に於て一般哲學の範疇を得たるを覺ゆる、しかれども其の人生哲學にありては、吾人は其の吾人の哲學上の概念に照して、其の哲學に於ける正宗にあらざるものなるを認めんとするものである、なんとすれば、人生は、人間に即する其の作的方面であるものでなければならぬ、即ち人生なるものは、其の宇宙に於ける屬性であつて、自然に於て派生する處の現象であつて、従つて其の哲學に於ける其の目的とする處の本質的のものではあり得ないのである、人生は要するに人間的現象である、それが如何に深刻であり、幽微なる思索を要求する處のものであり得るとしても、これは其の人間の範圍を出で得ざるものである、従つてこれによつて其の所謂哲學的原理、即ち哲學の目的としての宇宙の實在の本體の眞相としての單一なる根本的原理は到底其の範圍を異にせるものでなければならぬ、人生哲學はこれを要するに其の吾人の所謂旁系哲學たるべきものであつて



哲學に於ける其の正宗的問題たり得ざる處のものでなければならぬ、これ其の吾人が此の概論に於て、其の體系概論中に此の人生哲學を編入する事なしに、これを以て其の旁系哲學中に編入せる所由である、併し人生は重大なる問題である、従つて其のこれに關する考究は其の思索上の價值に於て蓋し大なるものがあるであらう、しかれども其の外形の眩惑を受けて其の正系に悖り、これを以て其の哲學の正宗視する事は出來ないのである、素より人生哲學の價值は大なりとするも、其の旁系哲學たるは、其の哲學の本來の性質上免れざる處のものでなければならぬ。

しかして吾人の其の所謂旁系哲學とは何を意味するのであるか、其れは、吾人の其の體系論に於ける處の傾向を推知すれば其の必然に生ずる處の、即ち體系以外の其の普通に於ける形而上學即ち幽玄なる純理の思索的系統的組織的なるものは、これを其の哲學の範圍即ち、其の思索攻究の様式の哲學的形式のもとに、これを旁系哲學として、其の玄奥なる原理の、統括的作爲の或る其の根本原理に還元したる處の一種の哲學

として認めなければならぬのである、吾人はかゝる見解のもとに、人生哲學、社會哲學、宗教哲學、美學、經濟哲學、法律哲學、歴史哲學なる七種の哲學を拉し來りて、其の吾人の旁系哲學を編し其の概要を論せんと欲するのである。

## 第十一章 人生哲學

人生とはなんであらうか、人生とは、人の其の出生より其の死滅に到るまでの過程である、過程とはこの場合様式と見るが適當であらう、即ち人間の生活の様式其れが人生である、しからば此の人間の生活様式即ち人生なるものは如何にして現はれるか其れは生の要求によりて現はれるのである、しからば其の要求なるものはなにによりて行はるゝものであるか、これは其の人其れ自身即ち個人の自己なる處の我の存在としかして其の我の原因たる處の個體其のものゝ結合によりて行はるゝのである、しからば其の我なるものと、個體としての人其れ自身との結合は如何にして行はれ得るで

あらうか、それは其の自我意識によりて行はれ得るのである、あらゆる生物は生の意識を、其の自覺的乃至は無自覺的にもつて居る、而して其の最低級なる植物類の如きに至りては其の無自覺的に單に其の生の必然的要求のもとに其の有機的成長を行ひつゝある、ところで又低級範圍にある動物、この場合人間もまた動物の一部には相違なきも其の靈的優秀なる其の智的生活のもとに此の一般動物と區別する、此の人類以外の動物を指しての、其の動物にありては自覺非自覺的即ち半自覺的である、彼等にありては其の我なるものはある、けれども其の全自覺的我はあり得ないのである、彼等に於ける我は單なる其の生活の個體としての意識以外のものではあり得ないのである、彼等には私の意識はあり得ても私の自覺は無いのである、私の即ち自己の自覺は、私の統一即ち自己の存在の内省的確認に於て行はるゝのである、人生なるものは、此の私の自覺即ち私の自己の一個の統一體である事の確認のもとに此の人生なるものが顯現するのである、人生なるものは、人間の其の生活の开が全稱的名稱である、したが

つて其の人生なるものは、本來個體としての自己即ち個人に即する問題でなければならぬのであるが、人間なるものは、人の生活なるものは其の共同生存のもとに行はれるものであるが、其の個人的人生なるものは其の人間的生活と合して始めて其の人生の内容を形造くるものでなければならぬ、したがつて、其の人生は人間に於ける法則の支配を受けなければならぬところのものである、即ち單に人生と云ふ時は、其の單獨なる個人の生活其のものに即して云ひ得る處のものである、けれども眞の人生なるものは到底其の共同生存なる、其の人間の生の様式の範圍を無視しては有り得ない處のものであるから、人生の内容なるものは、其の個人の生活と其の人間としての生活との抱擁結合に於てこれを認めなければならぬ、しかして其の人生なるものは、主として其の個人に於ける其の生存の内的過程に即する處のものを指して云はなければならぬのである、即ち其の私の統一によりて自己と他との關係を意識しこれを自覺してそして其の存在の意義と内容とを具へた處の、其の生涯を貫くところの様式

の全體即ち其の生より死に至る過程に附せられたる處の名稱でなければならぬのである、しかして开が哲學の其の旁系的思索の幽玄であり得るのは其の、人間に於ける自己の統一的主體なる處の我の、自身と他との關係の微妙なる其の精神的共存の法則、それが其の幽微なる原理の作用に於て此の人生なるもの、存在を維持せられある、其の原理の性質は其の複雑多端なる到底其の攻究なしに了得し得らるべきものではないのであるからである、人生哲學の其の必要なる原因は其の此處に存するものでなければならぬ、しかして此の人生哲學の内容は、其の本來の性質よりするときは或はこれを一個の科學と見るのが妥當なるものであらう、なんとすれば、人生なるものは、其の宇宙に於ける現象の一部であつて、其の全體的内容ではないのであるからである、ところで其の原理なるものは、要するに其の一部の現象に關する處の原理であつて、其の根本的原理と呼ぶ處の哲學に於ける其の目的とは其の目的する處を異にせるものであるは必然なのである、而して其の思索其のもの、内容にありても、哲學の其の分析

的證明の不可能なる乃至は困難なる處の思索なるに反して、此の人生哲學にありては其の内容は分析的證明の可能性ある處のものであつて、したがつて其の科學的攻究の可能性なるものである、また科學として其の成形を得べき處のものである、即ち人生哲學は其の自己と他との其の精神的共存の形式を攻究する處のものである、しかして其のこれを具體的に成形せられたる學を倫理學とするのである、倫理學なるものは、要するに此の人生の哲理に答ふる處のものであるのである、所謂人生哲學なるものはこの、自己と他との其の精神的共同生存の原理を攻究せる處の倫理學に外ならぬものでなければならぬのである。

### 一、倫理學

以上に説きたる如く此の人生哲學なるものは其の本來の性質よりする時は、其の科學的範圍のものたるは其の免れがたき處のものである、しかして其の學的成形たる倫理學もまたこれを以て其の純哲學として認め難き處のものである、けれども其の内容

の幽微なる其の形式の形而上的なる、或はこれを一種の哲學と認むる事の許さるべき性質を保有せるものでなければならぬ。彼のソークラテース、及びプラトーンに於ける、其のこれを其の本質即ち倫理學の本質たる處の其の道德説を以て哲學の正宗であるかとまでに重視せることの所因もまた、其の人間に於ける重大主要なる問題の其の偉大なる眩惑を受けてある、此の道德哲學が、其の純哲學視され來つた事は、其の人間其れ自身の問題として重要意義のあつたが爲めである、所謂四聖の即ち釋迦、孔子、基督、ソークラテース等が其の夥だしく其の道德哲學的傾向のところにありしは、其の之れに原因する處のものである、人生哲學が他の諸科學に優つて其の哲學的思索のものこそせらるゝ其の因由なきにあらざるものであるのである。

しかして此の倫理學なるものは、一面に於ては其の人間に於ける處の規範を求めて推究せるものである、人間に於ける規範とは、其の行爲に於ける約束的事實の究明による其の妥當なる設定である、しかして行爲とは何を云ふのであらうか、それは即ち

ち行爲なるものは人間の意志的動作に基づく處のものである、即ち人の精神的生活の外形的發現としての行動である、この行動なるものは、其の人其れ自身の精神の外部への交渉である、即ち自己の生活と他人の生活との直接なる接觸に於て此れを認むる處のものである、しからばこの行爲なるものは、其の個人の單獨なる精神内容が、其の個人より離れて、其の個人外なる處の他の個人への影響を現はす處のものである、かくて此の個人其れ自身の精神内容は其の接觸の衝動を其の受者より又其の他の個人へと影響する、此の影響は其の渦紋を無限に波及して全人類に其の衝動力の程度に應じて加及的に傳波する、此の行爲の影響は其の個人の數量の大なるに従つて其の複雑の程度を増すのである、此の複雑せる人間生活の内容は、それはまた其の單獨個人に影響して其の個人の其れ自身の人生を形ち造るのである、だから個人の其の其れ自身の人生は、單にそれ自身の人生即ち單なる其の生より死へとのものであり得ないで、其の人間生活としての一般全稱的の一部分の人生でさへ有り得ない事となるのである

る、しかば、此の人生なるものは、到底其の單純なる現象であるとは云ひ得ないものである、其の複雑多端なる到底其の思索的探究の作爲なくして其の規範即ち原理に依る處の表準なしには在り得ないのである、これ其の古人より其の哲人間に於て其の思索を格した處の問題であり得たのである、しかして此處に所謂原理とは如何様なる状態のもとにあり得るであらうか、即ち前に述べたる如く、人生なるものは、個々なる人間の其の精神内容の外的發現に於ける行爲の作用が相影響して人間生活なる、其の全稱的的人生なるもの、内容を形ち造るものであるから、其の人生なるもの、原因は其の人間生活なるもの、單位たる處の、其の個人に存するや勿論なる事でないならばならぬ、しかして個人が其の全稱的的人生なるもの、其の原因たり得るものは、其の精神内容よりする處の行爲に存するは云ふまでもなき事である、即ち人生なるもの、根本原因は、個人の行爲にあるものでなければならぬ、しかして其の行爲の内容たるものは、其の自己なる處の我の様式即ち我の内容に存するものでなければならぬ、即

ち我の内容は倫理學に於ける其の根本的原理でなければならぬ、しかして此の我の内容なるものは、其の心に於ける其の本有の質に立脚するものであつて、其の形而上的性質よりして其の考察の形式は哲學的である、しかれども、倫理學に於ける其の根本原理は、其の純正哲學に於ける思索の目的地と其の目的地を異にするものであつて、其れはかの物理學に於ける場合と等しく、其の根本原理なるものは其の奥底に假定を殘存して成形をなすものである、即ち倫理學に於ける其の根本原理なるものは、其の行爲の原因としての我の本質的内容の原理に留まる處のものであつて、其の哲學に於ける場合と異なり、哲學が宇宙の實在としての心の本體的真相を攻究するのに比して開が倫理的なるにある、で其の心の本體的真相は、これを單に一假定として、其の心の現象的なる一我なるものに立脚して其の原理を索むるものであるから、其の本來の性質は當底科學的のものである、しかれども、其の人生なるもの、其の偉大なる本質が古來からして其の哲學的思索として認容し來つたものであり、しかして其の形而上

に立脚するものであるによつて、其の哲學的外形の認容すべきものがあるから、これを一種の哲學として扱はれて居たのである、けれどもこれを其の哲學なりとするには、其の特種なる名稱のもとに其の純粹哲學と區分せなければならぬのである、これ吾人の其の體系概論と區別して、其の旁系概論中に編入せる因由である。

倫理學なるものは、其の本來の性質に於て、道德に起因して生起せられた處のものである、しかしして此の道德なる觀念は其の人間生活の必然的要求によりて現はるべきものであつて、即ち人と人との其の共同生存に於て、其の生存上の必然の結果として、其の生活は相觸れ相接して相關係する性質のもとにあるものであるから、其處には相互に其の自己擁護の意志からするとその自我主義的行爲の存するものあるは蓋し自然のことであつて、従つて其處に相杆格する場合は當然であり弁は免れがたき趨勢でなければならぬ、此の相互の其の自己保護の利益と相杆格する場合には、其處に相互の啖恆争鬪の起り來る事もまた其の當然に豫想せなければならぬ處のものである、

若し其の人間に於ける各目の其の自己即ち我の放恣なる行爲を許す事となれば、人生は彼の獸類の其れの如く、其の人に於ける生活即ち人生は、其の他の動物界に於ける處の其れの如く、人生は無意義のものとならなければならぬ、即ち人生なるものは殺風景の觀を呈し、即ち其の快適なる生活を享受する事は不可能の事とならなければならぬ、だから人間の知的内省は其の共存から必然で、其の相互の安寧を保障すべき道即ち道德の必要を欲求するは蓋し當然生起さるべき問題でなければならぬ、されば此の道德の要求は其の人類の其の共同生存と其の起原を一にして復生せられた處のものでなければならぬものである、したがつて此の道德なるものは、人間に於ける其の最初に於て其の發生意志を有せる處の問題であつたと見なければならぬ處のものである、古來より此の道德に關する問題の哲人間に論議せられて居たのは其の必然の傾向であつたのである、しかしして其の倫理思想なるものは、此の道德觀念の學的研究によりて其處に成形を得た處のものでなければならぬのである、此の倫理なるものが其

の考究の目的となり得たのは、希臘に於ける彼の詭辨學派、即ちソフィストの簇生時代に於てある、此の學派は當時の其の道德の紊亂せる状態に慄焉たらずして、其の長ずる處の辯舌によりて當時に於ける道德思想の缺陷を暴露させ、其の是正を行つた處から、其の人生の意義に關する考究の必要の一端は現はれ來つたのである、即ち倫理に關する考察の端緒は與へられたのである、しかれども、此のソフィスト派にありては其の懷疑的傾向からして、其の事物に於ける缺陷を指摘し其の論難碎破の術に長じて居たのであるが、彼等にありては、其の破壊の場合其の現状打破を云ふ、即ち破壊に長じたものであつたけれども、其處によりよき状態の建設はいまだなし得なかつたのである、即ち彼等は消極的態度であつたのである、此の消極的態度は、事物に於ける其の成形即ち建設の作用たり得るものではないのであるから、従つて其の倫理的學的考究は有り得なかつたのであるが、其の倫理的考察の學的研究の端緒を開いたのは彼のソクラテース其人であつたのである、即ち彼れは人間の相互關係の其の

全體的生活を規範すべき哲理の要求を認めたのである、かくて彼れは、人の其の人間生活の上に於て當然かくあらねばならぬ處の道理、即ち、人々の眞正に執るべき方針のなからざるべからざるを認めて、しかして古來からの其の人間生活に於ける行爲の妥當的模範即ち其の道德と認むべきもの、分析を試みたのである、しかして彼れは其處に、知徳合一論、及び福德合一論を提唱したのである、即ち知徳合一論は、其の道德の實踐説として提起せられたものであり、しかして其の福德合一論は、其の道德に於ける功利説として主唱せられたものである、即ち其の知徳合一論によれば、人もし完全に善なるものを理解したりとせば、其は當然に必然にこれを行はなければならぬものであるとする處のものであつて、それからまた其の福德合一論にありては、人もし其の知徳合一の作用即ち其の道德を實踐奉行する時は、其の結果として必然に自己自らもまた幸福を享受し得べきものであると論じたものである、かくて其の倫理的考察は第一成形を得たのである、しかして此の道德尊重のソクラテースの論唱は、其

の道德觀念に關する考察を誘致して、此處に其の道德觀は二つの傾向を生じたのである、即ち一は道德なるものは、其の本來に於て自我の規範でなければならぬのであるから、其の道德の本質は克己で即ち自制でなければならぬとするものであつて、此の派は其のソクラテースの知徳合一論に憑依して、其の道德の實踐を以て其の理想とする處の道德の奉行を以て唯一のものなりとする處のものであり、他の一方は、其の福徳合一論に偏依する處のものであつて、其の思想は道德の功利觀に重きを置く處のもので、此の派の論ずる處によれば、道德なるものは、要するに其の本來の性質は個人の幸福に立脚して生起せられたものであるから、従つて其の道德なるものは、其の本體は其の快樂を目的とする處のものでなければならぬと論ずるのである、しかしてプラトーンに至りて此等の諸説を綜合して其處に一の體系を整へられたのである、尙また其の道德觀念を推究して、其の體系的組織を成就して其の倫理學なる一成形を與へたるものは、彼のアリステテレス其の人である、アリステテレスによれ

ば、人生なるものは、其の人間に於ける其の圓滿なる幸福を以て其の終極の理想とする處の不斷の活動であると認めたとのである、かくて倫理學は成形せられたのである、而して其のアリステテレスの其の道德説を繼承するものにおいて、二つの傾向を生ずるに到つた、しかれどもこれなほ、其のソクラテースに於ける場合と等しく、道德の其の本來の性質たる其の實踐的行爲に即する處の問題として、其の一派は克己慾制を以て其の理想となし、人生は其の自然の理に従つて行動せざるべからざるものなる事を唱導し、其の一派は人生の目的は快樂に於ける享樂の生活其れが人生の唯一の目的でなければならぬと主張したのである、しかして此の人生の、其の現實的傾向と其の理想的傾向とは相互に對峙して、なほかつまた其處に一種の懷疑を生ずるに至つた、しかして此の懷疑派なる一派は其のプラトーンの思想に原因する處のものであつて、此の一派の論唱する處によれば、即ち至善は其の神明と冥合する處のものであつて、人生の唯一の理想唯一の目的は此の至善の奉行に於て、其の意義を有し其の目



的に合し得るものとしたのである、即ちしかして彼等は、知を絶ち聖を捨つれば其の幸福の存在を確保し得るものと論じたのである、此の至上善的觀念は、其の形式に於て著しく宗教的形態と相似する處のものであつて、哲學は又一種の宗教的なるものなるかの觀を呈するに至つたのである、かくて其の個々人の關係に就いて論究せるもの即ち道德の問題に即する處の考察は、轉じて其の個人に即する處の其の徳性の問題即ち其の善行と罪犯の問題に轉向して來たのである、かくて其の人間關係の問題は、其の一般人間其のもの、問題となり來つたのである、こゝに於いて其の倫理は、其の人間と人との兩方面を抱括せる處の論究となり來つたのである、かくて其の倫理なるものは其の複雑なる學的攻究の對象たるに及んだのである、で此の倫理説は、其の最古に於ける其の至善論より其の徳性論を経て、近世に於ける義務觀念にまで推進して來たのである、これ等の傾向は其の羅馬に於ける其の法律思想に起因せるものであつて其の影響を受けたるもの、代表的なるものはホッブスである、彼れによれば、其の道

徳なるものは其の人爲の法則に基づく處のものであつて、しかして其の性質は國法の範圍にあるものとしたのである、これは道德を以て其の人間に於ける内的反省に原因するものと見ずに、其の人間生活に於ける處の外的規範即ち法律的規範其のものが道德の外形であると考へたのである、しかしてこれ等に於ける其の根本の道德觀念なるものは、其の人間に於ける其の利己主義が道德の原因であると思つたのである、即ち法律的規範は其の人間生活に於ける其の權利の確任と、しかして其の他をして其の義務を行はしむる處のもの、其の性質が道德であると思つたのである、即ちホッブスにありては、其の道德の根原は其の自己の快樂を目的とする處にありとするのである、しかして其のこれに反する處のベンサムにありては、人生の目的は社會多數の快樂と幸福に存せねばならぬと論じたのである、しかして此の兩派の主張その分立する處のものは、其の個人の幸福に立脚するものと、其の社會の幸福に立脚するものとの二傾向となつたのである、かくて人生の目的、道德の意義なるものは、其の外形に於て相

反對立の形勢を呈する事となつたのであるが、しかしながら其の根本に於て一致點あるを認むるのである、即ち人生が其の目的に於て、其の幸福に關する問題として相一致するのである、此處に於て人生の意義は略了解し得べきものでなければならぬ、即ち人生とは、其の生の享樂即ち幸福を目的としての行爲の連續であると見なければならぬのである、此の點に於てアリストテレスの其幸福説に立脚する處の其の倫理説は動かすべからざる處の論究である事を認めなければならぬのである、倫理學は即ちアリストテレスに於て其の成形を得たるを認めなければならぬと思ふのである。

## 二、人生の現實

人生問題は、其の人生の現實より其の出發點を得る處のものでなければならぬ、人生の現實とは如何なるものであらうか、人生の現實とは、即ち吾人の其の不斷に其の經驗する處生活の過程其のものである、生の持續の様式其のものである、此の現實なるものは其の人間の其の生活に於ける種々相の其の複雑なる如く、其の内容は複雑多

端なるものである、即ち各個人は其の各個人の現實生活なるものを經驗するのである、其の個人の生活の實際に其の經驗しつゝある事其れが現實生活である、而して今其の現實と云ふ處のものは、即ち此の現實なるものを概括的に抽象的に客觀化して見たる處の概念である、しかしして此の人生の現實に關する概念は其の内容に二様の觀念があるのである、即ち其の一は人生は意義あるものと觀るもの、其れは其の傾向は樂天觀となる、しかしして其の一は、人生の其の無意義なるを觀ずるものである、其の其れ等の人達にありては厭世觀を形成するのである、しかしして其の樂天的傾向の人生觀を有するものによりては、其の人生の種々相に經驗なき場合もしくは其の無頓着或はこれを磊落とも云ふべき傾向にあるものに於て多く其の樂天的人生觀を有するものである、しかしして其の厭世的人生觀を有するものによりては、其の人生の其の複雑なる世相に倦厭たるに原由する處の人生觀であつて、此の傾向にありては多く其の經驗の豊富な知的思索に於ける其の瞑想的產物として現れる處の傾向を帯びたるものである、だ

から其の樂天的人生觀を有するものにありては、此の人生なるものは要するに生の持續其れ自身以外のものではない、即ち刹那々に生きる處の其の生活其れ自身が人生のすべてである、刹那々は確實に自己の存在を確認し得るところのものであつて、なにもことさらに苦慮するの愚を學ぶには及ばぬ事である、生は刻一刻に進展して、其の現實は刹那々に確實に其の過去へ過去へと其の殘骸を屠ふつて行くのであるから、此の刹那々の現實こそ我々にとりては其の最も確實たるものであり、其の最も安易なる實際である、だから此の人生は吾人の其の確實に存在し得る處の過程其のものであつて、其處に何等顧慮憂慮すべきものあるを認むるの要はないのであつて、我はたゞ、其の生の推進に即ち刹那々に於ける現實に生きる其れが人生のすべてであり、其處に人生の意義があるのである、即ち人生は安易なる生の刹那的現實以外の何者でもあり得ないのであるから、すべからく吾人は、其の生の現實を肯定し、其の人生の意義ある事を確認し、しかして其の人生を樂天的に觀じて其の人生を一貫して

其の生の終焉までに至らなければならぬ、これ其の樂天的人生觀に於ける其の抱有する處の思想であり人生觀である、即ち人生の樂天的觀察は其の安易なる現實肯定に基づく處のものであつて、此の傾向は其の人生の種々相の紛淆を無視して生きる處の形式に於て、此の傾向を有するものである、即ち吾人の其の少時は概して其の人生の種々に經驗なく、また其の人生の紛淆にも顧慮する處少なきに原由して、其の生活は現實的であり刹那的であり、而して其の人生肯定にあり得るものであつて、なほかつ其の内容は如何に人生は其の刹那に於ける現實に意義ある即ち、苦慮なき處の享樂を經驗せんかと考へる單純なる生活である、しかして此の吾人に於ける少時の生活はまた、古代及び未開人の中にも开が此の傾向にあるを認めなければならぬのである、即ち古代人及び未開人にありては、其の單純なる生活は其の人生を肯定せしむる要素を多く保有してあつたからである、即ち彼等にありては、人生なるものは單に生の推進に於て意義あるものである、たとへば其の生活資料の豊富であつてしかして其の安易

單純なる生活様式の、其の顧慮を要せざる程の邦土ありとせば、そは當然に其の現實肯定にあらねばならぬ必然の状態のもとに其の樂天的人生肯定なる刹那の現實生活に憑依して生きる處の人生觀にあらねばならぬ筈である、即ち彼等にありては、其の經驗と刺戟の少なさに原由して従つて其の内的反省に乏しき傾向にあるものであるから其の人生肯定は容易に行はれ得るのである。

ところでまた厭生觀にありては、其の知的經驗の豊富となるに従つて其の人生の種種相其の人間生活の紛淆は彼れを刺戟して其の内的反省に陥入らしむるのである、即ちこれにありては、其の内省は善と惡との矛盾せる事實に關して其の生起を促さるゝのである、即ち、其の現實生活は其の厭生觀的思想のもとにありては、其の裏面を流るゝ處の意識の現實でなければならぬものである、しかして其の意識の現實の生活は其の必然に其の現實否定の生活であらねばならぬのである、現實は意識の上に即ち其の精神生活の上に於ける現實でなければならぬ、しかして精神生活に於ける現實は、

其の現實本來の性質たる處の刹那／＼を否定する、なんとなれば、意識の實體は意識の集團によりて成形せるものである、だから其の意識なるものは、單に其の瞬間の意識として存在し得る事は不可能の事である、其の瞬間の意識は、其の過去の意識の集團として其の統一せられたる意識として、しかして其の瞬間の意識は、其の吾人の所謂其の集團的意識のもとに抱攝せらるべきものでなければならぬ、だから其の基本意識が其の意識を抱攝しようとするには、其の必然その分析批判に於て其の其れ自體の意識中に統一せなければならぬ處のものである、だから、此の精神生活にありては、其の現實なるものは、其の樂天的人生觀に於ける如き刹那／＼の存在として現はるべきものではなく、其の過去より未來への過程としての現實でなければならぬ、即ち過去より持續し來れる處の進路の新らしき展開でなければならぬ、しかして其の新らしき其の展開せられたる方面は未來に向つて接續さるべき一條の過程でなければならぬされば其の厭世觀的なる立場にありては其の所謂現實なるものは、其の本來に於て非

有的なるものでなければならぬ處のものであつて、其れは其の精神生活に於ける其の持續の中にあるべき性質のものでなければならぬ、即ち其處には現實を否定すべき論理がなければならぬ、即ち現實は其の一系持續なる人生に於ける一系の一部である、だから、其の樂天的人生觀が、其の現實を刹那と見る處の斷片の生活なるに反して、此の厭世的人生觀にありては、其の現實なるものは、其の人生の持續相に於ける一部である處のものであるからして、其の現實なるものは到底その過去と未來との關係を無視する事は出來ないのである、かくて其の精神生活による處の現實觀は、其の内省に俱つて其の人生の種々相、人生の複雑なる紛淆によりて其の倦厭を招致するのである、即ち其の現實なるものは開が過去の經驗に照合されて其の批判を受けつゝ推移するのであるから、其處には幾多の矛盾や罪要觀を構成するのは當然で其の人生の世相に於ける必然でなければならぬ、これ其の厭世觀の生起さるゝ處の原因である、即ち樂天的人生觀は其の知的經驗を無視して生起さるべき傾向のもとにあるべき性質のも

のであり、其の厭世的人生觀にありては其の知的經驗の内省によりて生ずる處の傾向にある處のものである。

以上に於て述べたる如く、其の人生に對する開が樂天觀と厭世觀とは、其の生起さるゝ處の原因は其の必然的なる二傾向、即ち其の知的内容による處の反省と非反省的なることに原由する處のものでなければならぬものである、しかして其の單に開が傾向的範圍にあるものは、其のこれを素朴的樂天觀或は素朴的厭世觀と稱する處のものであつて、しかして其の哲學的思索による處の樂天觀及び厭世觀は、其のこれ等の二傾向の奥底に徹して其處に立論の根據を形ち造る處のものでなければならぬのである、即ち人生の眞趣に關する批判として現はれ來たるものでなければならぬのである、而して其の眞の樂天的人生觀及び其の厭世的人生觀にありては、其の根據とする即ち前項に於て述べたる處の、其の倫理學的根據即ち人生の原理に立脚せるものでなければならぬのである、即ち此、厭世觀及び其の樂天觀なるものは、其の人生の原理たる處の、

幸福の慾求に由來して發生せらるゝ處の二方面でなければならぬのである、即ち吾人の活動の根本原理は幸福の慾求でなければならぬ、しかして其の幸福なるものは、其の個的にも全般的にも、其の幸福は當然到達し得べき或は其の當然にあり得べき處の目的たり得ない處のものである、而して此の幸福の反對なる處の苦痛はより多くに此の人生に實驗する處の事實であつて、此の二つの即ち幸福なるものと非幸福なるものは、此の人生に於ける處の二つの終極的事實乃至は兩端的事實として存するのであるから、此の幸福にてあり得る處の事實と、其の幸福にてあり得ざる處の事實とは、其の如何なる性質のものであるかとの考察は當然起らざるべからざる處の要因を爲す處のものでなければならぬのである、處で其の幸福であり得る處の原理が人生に於ける其の必然的具有なりと観る處の思索攻究上の確認を得たるものは、其處に樂天的人生觀を提唱する事となり、しかして其の人生に於ける幸福が其の不可得的なりとする處の其の思索攻究上に於ける觀念を形成せるものにおいて、其處に厭世的的人生觀を樹

立する事となるのである、しかして此の二様の人生觀は、其の本來に於て其の論者に即して起こる處の傾向を有するものであつて、即ち人生は其の一般的問題であると同時に其の個人其れ自身の問題であるからである、したがつて其の此れに關する論辨は最も其の個人性を帯びたるものと見なければならぬのである、かくて今そが此の人生觀に關する諸家の見解を徵するに、ミルハートレーは其の聯想學者の立場から、快樂と苦痛との分量を計算的に比較して、其處に快樂の分量をより多くに認め而して其の樂天觀を提唱したのである、しかるに又かのハルトマンは其の經驗的考證によりて人生の苦痛多き事實を認め、かくて其處に厭世觀を構成したのである、而してミルハートレーにありては、其の苦痛なるもの、其の快樂に比して忘れ易しとする處の論證から其の樂天説を述べた、しかして其の人生觀に於て其の價值の憑依するに足る處のものは、其の哲學的根據による處の論理的徹底性に於てこれを認めなければならぬ、しかして其の代表的なるものを求むれば、ライブニッツとシヨールペンハワーに於て其のこ

れを認むるのである、即ちライブニッツによれば、其の單子説の立場より論究して、其處に豫定調和説を提示して其の樂天觀を證明したのである、即ち、單子は其の神の恩寵によりて調和せらるゝものであつて、しかして此の世界なるものは其の神意によりて生せられたる處の最も完全なる調和を得たる處のものでなければならぬ、害悪苦痛の如きものは素より單に其の完全を成就せんが爲めの方便たる處の事實に過ぎざる處のものであると論じたのである、ところが又かのショーペンハワーにありては、即ち、世界の根源たるものは意欲である、世界はこの意欲の活動によりて、即ち其の意欲の悶々己まざる處の煩惱が其の發現に於て諸般の現象を生起せるものである、したがつて此の世界なるものは此の意欲の接觸の必然の結果として、其處に不満足、争闘、苦痛なるものを具有すべき必然性にある處のものである、従つて人生なるものもまた、此の意欲發現の原理に伴ふて其の害悪苦痛なる存在を認めなければならぬ處のものであると云ふのである、即ち人生の現實なるものは、其の人生の開が本來の原理たる

處の其の幸福を欲求する處の思念の、其の可能と不可能との問題に即する處の現前の實際其のものでなければならぬのである、しかして其處には其の樂天的生活と其の厭世的生活との二様の生活現實を認めなければならぬのである。

### 三、人生の理想

人生の理想とは、そは何を意味するものであらうか、人生の理想とは、人間の思惟生活の其の必然に欲求する處のものであつて、其の人間に於ける其の知的内容の必然の發露でなければならぬのである、即ち吾人が其の生存するに當りて其の何事かの自己の其のよりよき生活即ち、其の自己の其の好適せる状態の欲求、換言すれば其の人生の目的とする處の幸福への途、しかして其の途への動的原因、其れが所謂理想と呼ぶ處のものである、即ち理想とは、其の人生に於ける動的原因である、其の人生に於ける二方面としての其の現實と理想とは其の並行相背的状态關係にあるものと云はなければならぬのである、即ち、現實は其の理想を呼び起す處のものであり、しかして

其の理想は其の現實を誘致する處のものである、蓋し此の兩者は其の性質に於て、其の現實なるものは、既に其の與へられたる生活なるものより見て其の本來の性質は受動的なるものである、而して其の理想なるものは、其の本來の性質は、其の人生に其の意義ある事しかして其の價值あらしめんとする欲求に起因せる處の動的原因であるのであるから、其のこれにありては自動的傾向にあるものでなければならぬのである、即ち吾人が其の人生に於て其の如何にして其のよりよき生活に即ち其の最も其の自己に好適なる状態に到達し得べきか、斯かる好適なる状態、其處に其れへ到達の可能の形式の確認に於て其の理想なるものは形成されるのである、即ち理想なるものは、其の其れ自身の人生に於ける目的の具體的決定によりて存する處の思念の形式であるのである、しかして此の形式は其の内容に於て二様の差別を存するのである、即ち其の一は自律に於て其の形式を定むるもの、尙また其の一は他律に於て其の形式を定むるもの、この二つである、しかして其の自律説なるものは其の自己の心性中に於て此の

形式を有すると認むる處によつて現はれ、しかして其の他律説なるものは其の外部に於ける法則に即ち理想的假定に準據して行動せんとするものである、しかして其の自律説にありては、其の理想の根源は其の自己心性全體の作用に基づく處の法則によりて各自に其の各自の行爲を律する處の作用であると認むる處のものである、即ち其の精神全體の作用に於ける自律は、其の其れ自身の有する處の良心の命令によりて自己の行爲を律する作用に於ける理想によつて説論する處のものである、なほまた开が他律説にありては、其の理想の根源とするところのものは、其の知的考察の結果に成る處の規範乃至は標準に信據して、其の人生の目的の開が好適を其の表榜せられたる假定のもとに認むる處のものであるのである、即ち彼のホッブズに於ける其の道德の標準を國家の權力と其の規定に於て認めたるが如き、其の所謂他律説たる處のものである、で彼のベレーにありては其の原因を宗教の權威によりて形成する處の心的状態を同じくまた他律説としたのである、しかして其の自律説にありては、彼のカントの其



の所謂斷言的命令或は無上大法と稱するところのもの、これ即ち其の自己に於ける其の意志の善に立脚する處の先天的道德法則であつて、即ち意志即ち自律に於ける處の法則即ち理想に従つて人は行動せざるべからずと云ふが如きそれである、しかしまたグリーンにありては其の自己實現説に於て其の自律説を提示して居るのである、しかしして其の理想なるものは开が自律的・他律的なる二様の形式の存するあるはこれを認むべきものであらうけれども、本來に於て此の理想なるものは、素より其の人身の生活の内容であるべき性質のものであるからして、其の理想なるものは又その本來の性質上自律的なるものでなければならぬのである、即ち理想の本質は自律的である、しかしして其の他律的なるものは特種の場合に於て其の形式を造るものでなければならぬのである、しかしして今その理想の开が自律的内容を觀るに二様の見解があるのである、即ち其の一は快樂説であり、しかしして他の一は嚴肅説である、即ち其の快樂説にありては、人は开が天性に於いてかの快樂を欲求する處のものであると論ず

る處のものであり、かつまた其の嚴肅説にありては、其の快樂と云ふ處のもものは此の人生に於ける罪惡の根源であるが故に、吾人は此の罪惡の根源なる處の欲望の放恣を制止して其の理性の善なる命令に従つて嚴肅なる生活をなさなければならぬと云ふのである、で此の快樂説と嚴肅説とであるが、其の本來の傾向としては、其の快樂説なるものは個別的・理想的傾向を有する處のものであり、しかしして其の嚴肅説にありては全的・人生的理想としての傾向を有する處のものである、しかれども人生なるものは、これを要するに其の人間的生活の上に存する處のものであつて、其の狹義に於ける人生は其の廣義に於ける人生と相共に密接なる關係を有する處のものであり、其の廣義に於ける人生と狹義に於ける人生とは其の共通内容を有する處のものであるのであるからして、兩者とも其の個人的と公衆的なる二方面を有するものと見なければならぬのである、併し同じ快樂説でも、所謂利己主義即ち個人の其れ自身の快樂と利益とを以て其の人生の目的とする處のものと、それからまた其の公衆的なるもの即ち其

の所謂利他主義と云ふ處のものがある、其のこれにありては、個人は單に自己其れ自らの快樂と利益とを欲求するのみでなく、社會一般の快樂と利益とをも目的とせなければならぬとする處のものである、これを或は功利主義とも云ふのである、しかし其の嚴肅説にありては、其の理想の目的する處の觀念の統一せられたるに於て、其の個的人生と全的人生とを貫く處の理想として見なければならぬものである、即ち其の所謂、吾人の理想を統一して完全なる自我の理想を實現する點に於て究意の満足を得る處のもの、即ち個人は社會と有機的關係を有するものであるから、社會の安寧と幸福とは、其の善なる理想によりて實現さるべきものであると、即ち人生は、其の個的人生と其の全的人生と共通せる處の理想の作用を受くる處のものであると見なければならぬのである。

人生の現實と理想とは其の人生哲學の原因たる處のものである、即ち人生の現實は其の吾人の人生に於ける其の幸福を欲求する處の思念の活動其のものであり、しかして其の人生の理想なるものは、蓋し吾人が其の人生の意義あり價值ある處の存在であり得んとする處の欲求其のものであつて、一の現實に於ける動的事實其のものゝ活動原因たる處のものである、かくて其の活動原因其のものこそは人生の目的其のものであつて、人生哲學に於ける原理でなければならぬ、つまり其處に倫理學が所生され、しかして成形を得なければならぬのである。

### 第十三章 社會哲學

社會哲學とは、蓋し人間の共同生活に於ける其の根本的原理の攻究をなす處のものである、ところで社會學なるものは、彼の倫理學と其の内外表裏の關係にある處の學であつて、即ち倫理學なるものが、其の人間生活の内面的統一の作用に於ける原理を攻究するに反して、此の社會學にありては、其の人間生活に於ける其の全般的外形に就きて其の統一の原理を攻究する處のものである、しかして此の社會とは何を意味す

るものであらうか、社會とは、人間の其の共同生存に於ける其の團體組織に對する一般的名稱である、しからば其の共同生存に於ける團體組織即ち共同團體なるものは如何にして現はれたるものであるか、それは人間に於ける其の先天的共同作用に基づく處の發展に於いてある、即ち人間なるものは其の本來の性質に於いて其の單身孤獨の生活に堪へざる處の其の天性に従つて、其の共力的生活は開始せられたのである、此の共力的生活なるものは、人間が其の共力の可能を認め相提携して其の共同生存に於ける共同勞作をする事によつて行はれたのである、即ち、其の人間に於ける其の共力生活の可能が社會的組織の原因であるのである、此の共力生活なるものは、其の集團なる少數集團より遂次と其の集團の集團を形成する、即ちそれは人間に於ける其の共同生存を欲求する處の天性の必然的なる傾向であつて、此の集團性なるものは其の無限に擴大さるべき性質と傾向とを抱持して居るのである、だから其の人間の社會生活なるものは、其の一部分的集團即ち其の社會生活より漸次大なる團體へと推移するのである、即ち其の單なる集團生活は進んで其の部落生活となり、其の部落生活は更に進んで其の邦土生活となり、其の邦土生活は更に進んで其の世界生活まで進むべき傾向のもとに在るのである、即ち社會なるものは、人類の共同生存に於ける組織の形式、其れが所謂社會と稱する處のものであるのである、しかして其の社會學なるものは、此の吾人の共同團體に關する其の可能の原理を、其の所謂社會を對象として攻究せる處の學である、しかして此の社會學は彼のコムトに於て始めて創始せられたる處の學的攻究であつて、此の社會學を説かんとするには其のコムトの説を引用し來りて述ぶるを便宜とするのである、コムトの哲學は其の思索の様式が其の動的觀察と其の靜的觀察との二様式のもとに行はれてある、しかして其の社會學にありても、其の彼れにありてはこれを其の社會靜學、社會動學なる名稱のもとに攻究されてあるのである、即ち其の社會靜學とは其の社會に於ける一定不變の制約を攻究せるものであり、しかして其の社會動學とは其の社會に於ける其の進歩發展に關する理法を探究せるも

ある、即ち其の單なる集團生活は進んで其の部落生活となり、其の部落生活は更に進んで其の邦土生活となり、其の邦土生活は更に進んで其の世界生活まで進むべき傾向のもとに在るのである、即ち社會なるものは、人類の共同生存に於ける組織の形式、其れが所謂社會と稱する處のものであるのである、しかして其の社會學なるものは、此の吾人の共同團體に關する其の可能の原理を、其の所謂社會を對象として攻究せる處の學である、しかして此の社會學は彼のコムトに於て始めて創始せられたる處の學的攻究であつて、此の社會學を説かんとするには其のコムトの説を引用し來りて述ぶるを便宜とするのである、コムトの哲學は其の思索の様式が其の動的觀察と其の靜的觀察との二様式のもとに行はれてある、しかして其の社會學にありても、其の彼れにありてはこれを其の社會靜學、社會動學なる名稱のもとに攻究されてあるのである、即ち其の社會靜學とは其の社會に於ける一定不變の制約を攻究せるものであり、しかして其の社會動學とは其の社會に於ける其の進歩發展に關する理法を探究せるも

のである、ところで其の社會に於ける其の一定不變の制約と云ふ處のものは、其の社會的秩序に關する處のものである、かつまた其の社會の進歩發展に關する理法と云ふ處のものは、其の進歩の作用に即する處のものである、即ち其の社會靜學に於ける根本概念は秩序であり、其の社會動學に於ける其の根本的概念は進歩であるのである、即ち社會に於ける其の秩序は其の社會に於ける其の組織的内容であり、しかして其の社會の進歩に於ける理法は其の社會に於ける其の外的形式である、即ち社會なるものは其の人間の开が共同生存上に於ける其の團體生活の全稱的名稱である、しかして其の社會なるものは、其の秩序と進歩との二方面を有する處の實體であるのである。

### 一、社會の内容

社會の形成が其の秩序に於いて行はれ居るは云ふまでもない事である、社會なるものは其の集團に於いて組織せられたものであるから、即ち其の單子となる處のもの意欲的なる人なるもの、集團によつて出來せるものであるのである、換言すれば其の群

居に於ける統制に於て現はれたる處の一體的のものであるから、従つて其の内容なるものは其の統制なるもの、即ち其の群居の整理の形式に於て其の形體の確立が行はれなければならぬ筈である、即ち其の統制なるものは、即ち秩序の其の外形に外ならぬものである、即ち社會なるものは其の秩序によつて其の形體を維持する處のものである、素より秩序は社會の開が存立を確保する處のもの、其の内的既存性でなければならぬのである、即ち其の社會組織に於ける處の統制なるものは、其の社會に於ける开が單位の存在の保障として其の必然に生起せられ或はなからざるべからざる處の必樞なる條件でなければならぬのである。

社會の根原は其の社會に於ける單子たる處の人間其のものでなければならぬ、しかして其の人間なるものは其の意欲に生きる處のものである、其の意欲なるものは其の自我の放恣に存する處のものである、自我の放恣は其の自己のために其の他を顧み得ざる處の其の傾向的内容を有する處のものである、若し社會が其の單子たるもの即ち

人に、其の根本内容たる處の其の自我の放恣を其の意欲のまゝに放任することを認め  
たならば、开が各人の其の自我の放恣は相互ひに其の杆格軋轢を生じ、其處に爭鬪紛  
擾は到底其の停止するの時あるを豫想する事は出来ないであらう、かくて其の社會組  
織なるものは到底其の實現不可能なるものとならなければならぬ事となる、或は其の  
社會なるものは其の安寧秩序の紊亂の免れ難き運命を招致するに到るは蓋し其の必然  
でなければならぬ、即ち其の社會組織なるものは其の統制を唯一の途として形成せら  
れたる處のものでなければならぬのである、しかれば此の統制なるものは其の如何に  
して行はるゝ處のものであるか、其れは權力の發現に於て行はれ得るものでなければ  
ならぬ、しかして其の權力の發現なるものは如何にして生じたるものであるか、これ  
は其の單子に於ける其の優越による處の其の必然の作用が其の他の劣弱なるものに其  
の屈伏意志を表示せしむる事によつて、其の權力なるものは其存立を保有する事とな  
るのである、しかして此の權力なるものは、其の範圍を起原として生起され、従つて

此の開が範圍に於ける權力は、其の他の範圍と合して其處にまた新らしき權力は樹立  
せらるゝのである、で此の權力の起原は其の家庭なるものに於て其の萌芽を認めなけ  
ればならぬ處のものであると思ふのである、即ち其の家庭と稱する處のものは、其の  
兩性と其の兩性の種族保存に於ける其の先天的意志の結果による處の其の血肉の分身  
たる處の兒童とによりて關係せられたる處の其の一團的組織のことを云ふのである、  
しかして此の家庭なるものは其の夫妻親子に於ける其の扶養關係、即ち其の生活上の  
優越が其の他の生活力劣弱なるものを扶育する形式の其の當然乃至は其の必然に於て  
現はれ或は行はれたる處の自然の組織である、しかして其の優劣の關係即ち其の扶養  
者と被扶養者との關係は其の本來に於て其の扶養者の意志を主として行はるゝ處のも  
のであつて、其の扶養者の意志は其の力は其の權は、此の場合其の被扶養者に對して、  
其の意志は自由であり且つ絶對的なるものでなければならぬのである、即ち其の扶養  
者にありては、其の被扶養者に關して其の單獨自由なる意志のもとに、其の扶養を拒

否する事は全く自由に且つ隨時なる處のものである、しかして其の被扶養者にありては、其の生の欲求の必然的作用として、其の扶養者に對して其の請願と屈伏とは其の當然なる状態のもとにあるものと見なければならぬものである、即ち扶養者と其の被扶養者、此の兩形式の存在は、既に其の權力意志の其の自覺なき場合にありても、其の既に俱伴せられたる處の内容事實でなければならぬのである、即ち權力なるものは、人の其の集團生活に必然に俱伴する處の現象でなければならぬ、しかして其の權力の起原は疑ひもなく其の一系列的組織の集團たる所謂家庭と云ふ處の状態に於いて其の發生せられたるものなる事を認めなければならぬのである、で其の人間の集團的生活其の共力生活は其の一系列的組織の自然の結合による處の家庭の形式にあるは吾人の其の認むる處である、しかして此の家庭なる一系列的血肉關係に於ける組織集團は、また他の其のこれと同じ状態のもとに組織せられたる集團を豫想する、しかして其れ等の集團は其の無數に存在するものでなければならぬ、しかも此の集團と集團との關

係は、其の利害關係のもとに離合される、しかして其の離れる場合に其處に争鬭を生じ、かつまた其の合する場合には其處に其の二個の結合せる新らしき集團を生ずる、かくて此の利害の同じい場合には、其の集團なるものは相合して遂次に其の集團の大成す、しかして其の極度に達せる形式は、其の國家と稱する處の形式である、即ち國家なるものは、其の單位たる家庭の其の共同生存に於ける其の利害の一致によりて集團せる處の一大共同團體でなければならぬのである、しかして其の内面的統一の作用は、其の單位なる家庭に於ける統一の原理、權力意志の其の統括力に關する其の遂次累進的憑依によつて、其處に其の國家としての其の國家に相當する處の一大權力を形成し其のこれを全體として承認する事によつて、其の國家を存立せしむる處の内的統一は行はれ得るのである。

國家の權力、其れは如何なる性質のものであらうか、其れは其の單位の其の集團より集團への過程に於ける其の自然の約束によりて必然に形成せられたる處のものであ

る、だから此の權力なるものは、其の所謂ルツツに於ける民約に基づく處のものであつて、蓋し之は或は其の習慣的原因によるものとも見なければならぬのである、されば其の權力なるものは或はこれを習慣的承認の力とも見る事が出来るであらう、さすれば國家の權力なるものは其の社會の承認に基づく所のものであつて、従つて其の社會の習慣或は其の承認を無視して其の存立を確保すべからざるは當無なりと觀せなければならぬ所のものである、かくて國家の權力なるものも其の表面的其の絶對性は其の裏面に於て其の社會との相對關係のもとに其の存立せるものなる事を認めなければならぬ所のものである、ところで开が社會に於ける統一力たる國家の權力なるものは、如何にして其の社會の秩序に關する所のものであらうか、其れは其の權力の發動による所の法政なる作用によりて其の統一力に於ける秩序の可能性を有するものである、此の法政なるものは、其の人間に於ける其の集團生活の可能的條件として俱存せる所の習慣の其の律定制度する事によりて行はるゝ所のものである、即ち律定とは其

の人間に於ける开が相互關係の其の全體的共通の便宜に従つて律する處のものである其のこれを所謂法律と云ふ處のものである、しかして制度なるものは其の集團生活の國家團體への成長に於ける其の過程の有害なる事項に科する處の制止の條項である、其のこれを所謂規則と云ふ處のものである、即ち國家の權力は法律と規則と規定と行使とによりて其の社會の秩序を維持する處のものであり、しかして其の存立を確保する處のものである、けだしまた此の國家の權力なるものは其の何人によりて行使されるものであらうか、其れは政府なる一中樞機關の社會の承認による處の權力の行使作用によりて行はるゝのである、しかして其の政府なるものは如何なる組織状態のもとにあるものであらうか、それは國家の其の代表者たるもの、即ち民約に或は其の習慣的既然の主權者によりて統轄せらるゝ處のものであつて、従つて其の主權者の开が民人への其の約束履行の要求機關である、しかして社會の其の秩序は、其の國家の法規と其の行使に於ける權力とによりて維持さるゝものでなければならぬのである。

## 二、社會の外形

社會の外形は、其の社會の内容の整理によりて現はれしかして行はるゝ處のものである、ところで其の形式は進歩發展の形式でなければならぬ、即ち社會の進歩なるものは其の社會の外廓的形態を作りて進む處のものである、即ち其の社會の内容の變化に伴ふて其の外形に變化を現はす其の形式は進歩として認むる處のものでなければならぬのである、で此の進歩の形式は、彼のコムトによれば、其の三階段によりて行はれるのである。

第一の階段、それは強制的階段である、即ち其の社會なるものは、其の集團の性質に於て、其の利害關係に基づく處の其の共力意志によりて行はれたるものである事は前項に於て述べたる處である、ところで其の團體的結合は其の利害を共にするものによりて其の結合が可能であり、しかして其の利害の相反するものによりては其の睽悞鬭争の免がれ能はざる處のものである、これ其の強制的階段の存せざるべからざる處

の因由である、即ち強制とは、其の約束に於ける義務の履行或は其の利益の爲めの便宜的狀態への服従を強要する處の作用を云ふのである、即ち強制とは、其の強者及び權力者の其の弱者及び其の被權力者に科する處の制裁である、此の強制なるものは、其の團體的協力の全體的活動に於て其の當然に必要な處の形式の一つであつて、其の最も著しきものは彼の軍政に於いてある、即ち其の軍政なるものは其の團體的利益を保護する爲めの共同意志の全體的活動の誓約によりて現はるゝ處のものであつて此の軍政の用は、其の團體の個的存在の確保の爲めに、其の團體の結合作用に於ける被征服乃至は併合の不利益を避くる爲めに、或は其の團體其のもの自らの團體意志の發動による統合作用の實行によりて其の其れ自らの利益の増進を企圖する場合に於て發動すべき處の意志團體である、此の軍政なるものは社會の其の進歩の未開なる時代に於て最も多く見る處の、其の混沌不統一の整理意志の實行に於て最も其の緊要なる處の意志團體であつて、其の社會の開が未完成の度に従つて其の存在の要求を最も經



驗する處のものである、しかしまた此の軍政なるものは、其の一面に於ては其の團體に於ける權力意志の表徴となる處のものである、即ち其の其れ自らの團體の其の内の統一の作用に於ける其の障壁に對する威嚇の用を爲す事これである、即ち其の内の統一に反對する處の不逞の觀念に其の可能なる意志の消散を命ずる處の威力である、だから軍政は、或はこれを威力と見る事が出来るであらう、しかし此の威力は其の團體に於ける其の統一作用の保障である、しかし其の統括的權力の實際的表現である、軍政は其の統一に於ける力量的方面である、しかし其の團體の外形態の確存に關する鐵柵であるとも見なければならぬ處のものである。

第二の階段、これは政治的階段である、これは其の團體の表面的形式である、即ち彼の軍政的階段にありては、其の團體に於ける其の外廓的形式であつて此の形式の其の動的方面は、其の團體と團體との其の利益の保全に於ける其の杆格による處の戦争に於ける其の戦争意志の表示と實行に即する處の攻撃的軍事組織であるが、此の政治

的階段にありては、其の強制的階段に於ける其の積極精神より其の當然の轉向による處の消極的精神に基づく處のものであつて、其の主たる精神は其の民人棲息上の安定の確保にある、即ち其の團體が其の棲息安定を得たる時は必然に其の内容とする處の單位に於て、其の生の享樂を思念する、其の享樂は其の團體的共同の完全と其の共同の完全による處の安寧を欲求する處の傾向に在らんとする精神となるのである、此處に於て其の強制的階段に於ける其の進取的好戰的なる精神は、轉じて其の保守的生產的なる精神と變ずるのである、かくて其の軍政なるものもまた其の攻撃的精神より轉じて其の防禦的精神と變じ、しかして其の單なる其の團體の全體の權力の威力の表徴として、其の外的威示よりは其の内的威示として、單に其の内的統一の實際的保障を以て理想とする處のものとして存在する處のものとなるのである、此處に於て開が軍政なるものは、其の政治的權力の外圍として、其の政治的權力の開が實施力に於ける保障たる處の其の政治的權力の從的狀態として存するに至つたのである、で此の政治な

るものは、其の團體の安寧福利を保障する事を以て其の職能とする處のものであつて、其の作用する處は其の團體生活の運営にあるのである、しかして其の運営なるものは其の國富の増進による民人の安堵にあるのである、而も其の國富の増進は其の民人の産業的發展によらねばならぬ、これ此の階段に於て其の産業的精神を鼓勵する處の原因である、即ち此の階段にありては、其の社會の自存の方式を策定する處の表面的整理を行ふ處の、社會の其の表面的形式である。

第三の階級、これは實業的階段である、これは言ふまでもなく前に述べたる如く、産業的精神の作用として生産せられたる處の其の生産物の處理に關するものである、即ち此の階段にありては、其の商業的制度の分配の方法を決定すると同時に、力の分配即ち勞働問題或は社會問題の論議せらるべき階段である、即ち社會は其の安定による平靜時代より、其の内省的時代に入り來つたのである、で此の階段を或は其の實證的階段とも稱するのである、即ち此の階段にありては其の社會其のもの、真相を證明

して、しかして其の矛盾の存在を論議改革せんとする處の表面的形式の整理を企圖する處の整理的階段である。

以上に於て述べたる通り、其の社會なるものは、其の内容的には其の秩序によりて存立する處のものであり、しかして其の外的に於ては其の進歩的階段に於て存在する處のものである、しかして彼の社會學なるものは开が社會の其の成形が、其の何等の原理によりて行はるゝやの其の根本的原理に即して成形せる處の學である、換言すれば社會學は其の人間の其の社會生活が如何にして行はれ得るか、或は其れが何等の原因によりて即ち原理によりて行はるゝやを攻究する處の學である、しかして彼のコムトによれば、其の社會に於ける其の根本原理は、義務なる觀念であると言ふのである、で其のコムトに於ける其の義務なる觀念は、其の團體に於ける其の全體的意識に生ずる處の觀念であると言ふのである、で此の觀念は或は其の犠牲的精神と見べき處のものであつて、此の精神は素より吾人が社會生活に於いて、各自に其の自

己的傾向を防止し、しかして其の社會的活動に於て其の團體の其の發展を企圖せなければならぬ、此の精神は即ち其の團體意識による處の義務觀念に於て可能である、此の觀念は、人類の其の最も高尚なる精神に基づく所のものである、従つて此の活動其のものは、其の外的報酬を離れたる處の眞幸福即ち內的滿足の源泉であつて、社會の光榮は其の高尚なる此の義務觀念に於て、人類は其の自他の幸福と社會の光榮に到達する事が出來ると云ふのである、かやうの點に於て、此の社會學なるものは其の原理に於て、其の倫理學へ或る種の共通を認むべき或るものを認むる、要するに倫理學は、人の其の生活に於ける內的攻究であり、また社會學は、其の人の其の人間としての外的團體的生活の攻究であると、しかして此の兩學の根本原因たるものは人及び人間としての人に即する問題に歸するべきものと一致する、従つて其の兩學に於ける根本的原理は各々其の人間の精神に屬する處のものである。

### 第十三章 宗教哲學

宗教哲學なるものは、其の宇宙に於ける其の實在の本體の人格的攻察によりて其の淵源を存する處のものである、此の點より見れば、彼の唯心論的傾向にある處のものであるのである、従つてまた其の唯心論に於ける或るもの、其れが、其の著しく宗教的色彩を帯ぶるのも且つこれが爲めである、ところで吾人が其の唯心論を以て其の哲學に於ける其の體系中に收め、しかして其の宗教哲學なるものを以て其の旁系中のものとする所以のものは、其の宗教哲學者なるものは其の原理たる處の神なるものは要するに一つの假定たる處の性質たるを認むるが故に其の宗教哲學を以て其の旁系哲學なりと斷ずる處の因由である、神なる觀念はもと假定の觀念に基づく處のものである、即ち神なるものは其の人格的實在として其の想像に依る處のものであつて、それが空想的産物たるの觀あるは到底其の免れがたき假定の觀念たるを認めざるを得ざる處

のものである、宗教の原理は假定である、即ち哲學の正宗的系統は假定を拒否する處のものである、假定の存在は其の科學的形式範圍にあるものである、されば宗教もまた其の科學的形似の點を否定すべからざる状態にあるものと見なければならぬのである、宗教は要するに其の旁系哲學に屬するものでなければならぬと思ふのである。

で此の宗教なるものは、其の神なる觀念に俱伴して生起せられたる一現象である、しかして其の宗教哲學なるものは、其の神なる原理の作爲の不可思議觀に立脚して、其の神秘的考察のもとに形成せられたる處のものである、しかして彼の原始宗教にありては、其の驚異の全般的なる、其の神秘觀の萬象的なる、これ其の古代に於ける其の幼稚なる萬有神觀による處の多神教乃至は汎神教であつたのである、宗教が其の假定による處のものである事は其の發生原因に於ても略其の假定たるの誤らざるを覺ゆるのである、しかして此の宗教は其の哲學の其の進歩に伴ふて其の神秘説は哲學的幽玄を加味して、其の假定の假定にあらざる處の實在の真相なるかの觀を呈するに至つ

たのである、彼のプラトーンにありても、其の對話篇に於いて述べたる如く、智は獨り神の有なるのみ、人間はたゞ之れを愛するを得るのみと、即ち此の神なる觀念は唯心論者に於ても其の或る形態のもとに之が其實在感を有せるものゝ様である、即ち宗教なるものは其の唯心論的根據の人格化に於て其の原理を把握せるものであるのである、しかれども其の人格化其のものは要するに假定である、宗教哲學は唯心論的類似を存するも、其の假定は其の哲學に於て其の唯心論的正宗體系たるは拒否せなければならぬものでなければならぬ、しかして其の汎神的乃至は其の多神的傾向に於ける宗教の其の假定の假定感の最も顯著なるよりしてこれ等の傾向は漸時其の知的成長に伴ふて、其の傾向は其の哲學的考察と其の進歩の相似的形式を取る事は、其の當然に行はれなければならぬ處の順序でなければならぬ、即ち假定の其の假定の顯著なるに於て其の宗教に於ける人間心理の其の宗教的統一即ち歸依の感情は、其の假定の假定感に於ける程度に應じて稀薄となり行くは蓋し免れ難き處のものでなければならぬの

である、かくて其の原始的萬有神教は、やがて其の萬有神なる假定が漸次統一せられて、其の根據の有力を求むる事となる、しかして其の有力なる原理は其の哲學に於ける其の唯心論的本體と相似或は共通的性質に於ける其の唯一の原理に歸向せられなければならぬのである、即ち其の原始宗教に於ける、其の萬物を以てすべて其のこれを神と観するの觀念は、其のこれ等の其の許多の神佛なるものが皆同一なる權力と其の靈力とを有するものなりとは信じ難き處の其の宗教的歸依に於ける疑問を惹起せなければならぬ、かくて开がこの傾向は、其の萬有神に於ける其の主神の存在を豫想せなければならぬ、しかして此の主神の觀念は其の所謂一神教に到達せなければならぬのである、かくて其の一神教の形態は、其の單一なる其の原理は、其の哲學的思索に於ける其の根本原理と相似する處のものとなり、かくて其の宗教の幽玄なる其の哲學的範圍は形成せらるゝのである、しかれども宗教はもと假定の觀念に基づく處のものである、しかして假定は其の單に觀念として其の實在的根據の薄弱なるものである、即

ち假定は其の内容に或る種の動搖性を有する處のものである、これ宗教なるものゝ、其の常に安定せず而して其の常に動搖する處の所由である、宗教的形態は其の一神教たるに於て其の宗教的内容は完成せられたものでなければならぬのである、しかるに其の假定の假定たるによりて此の宗教的完成は其の假定の不安定的性質即ち其の内容の動的傾向上、また其の完成は分裂せられ行くのである、かくて其の一神教に於ける其の宗教的完成の形式は、其の假定に於ける懷疑によつて、其の原理の作的方面の分裂に即して、蓋し其處に二個の異なる觀念を惹起するのである、即ち此の人生には二つの人間的作爲がある、其の二つの作爲なるものは、其の人間に於ける其の必然俱有的なる二大對抗として存在する、されば其の二大對向の實在する事によつて、其の二つの事に就ての其の支配者は各々其の異なる立場にある處の二個の神を豫想せなければならぬ處のものでなければならぬと観るのである、しかして其の人間作爲に於ける其の二大對抗事實と云ふのは、其の善と惡なる二つの現象であるのである、即ち宇

宙に於ける其の善と惡との存在は、其の根本的性質に於て其の相反する二方面である。此の異なる處の二個の事實に對しては、其の矛盾せる二つの内容が、其の一形式の下に認められ得べきものは豫想する事の出來ない處のものでなければならぬ、即ち其の異なる事實に關しては其の各異なる其の支配者或は主宰者の存在を豫想せなければならぬのである、かくて其の人間に於ける或は其の宇宙に於ける、其の善的方面と其の惡的方面とは、其の各主宰する處の一神の存在を假定せなければならぬのである、かくて宗教に於ける其の完成形式なる一神的宗教は分裂して、其處に善惡二神の對立する處の二神教は生じたのである、しかれども此の二神教なるものは、其の假定の分裂に於て其の宗教的事實と其の原理に容れざる處の論理の缺裂を有するのである、二神教は此の意味に於て其の存立性は確固たる能はざる處の内的原因を有する、かくて此の分裂は其の宗教的歸依の形式の統一による批判に觸れて其の當然に、また其の一神教に歸入せざるべからざるに至るのである、一神教は宗教に於ける其の完成形式で

なければならぬ、しかれども其の假定に基づく處のものは、其の動搖の避くべからざるは當然である處の傾向である、しかして其の一神教に於ける其の神なる觀念は、其の人格的假定なるに原因して其の存在は、此の宇宙に於ける其の實在の内存在たる事は出來ざる處の約束にもとに置かれてあるのである、これ其の哲學的思索に於て、其の神なる觀念の其の實在性に疑惑を有せざるべからざる處のものとならなければならぬのである、即ち一神教に於ける神にありては、其の全く此の世界の外に有る處の或る實在であるとする處のものであるから、其の神なるものと此の世界なるものとは其の分離せる二個の實在として、其の神なるもの、此の宇宙の内的原因となり得る處の論據を見出し得ざる處の缺點を有するのである、かくて宗教は此の開が神と宇宙關係とに於いて其の論據を求めなければならぬのである、かくて其の一神教は其の多神教に於けるとともに、是れこの種の思索に觸れて其の此處に異なる處の神觀を形成する事とならなければならぬのである、しかして此の思索の結果其の到達し得たる處の

の、其の原理は、所謂汎神教を形成するのである、此の汎神教にありては、神なるものは此の宇宙に内存する處のものであつて、其の本體は宇宙其のものであるとする處のものである、これ彼の唯心論の宗教化とも云ふべき形態である、宗教は哲學に追隨する、宗教は其の哲學的根據を得る處の厚薄によりて其の價值を増減する、此の傾向は其の玄奥の神秘的なるに立脚して生起される處の原因に準じて其の必然に當然に宗教は其の哲學に隨伴せなければならぬ處の約束を有するものと觀なければならぬのである、しかして其の汎神教に於けるも、神なる觀念はもと其の恒常不變の眞理に立脚する處のものであるから、従つて其の宇宙なるものが、神其のものゝ實體たることによりて、其の宇宙に於ける其の變化相を説明する能はざる處の不合理を存するのである、かくてまた宗教は其の汎神的形式に於ても其の假定の性質は安定すべからざる傾向に存するのである、宗教は其の一神論に於いては先づ、宇宙と神との分離によりて其の哲學的思索の満足を買ふ事に於て失敗し、しかしてまた汎神論にありて

も、其の宇宙的説明の可能を豫想して、其の神と世界との數量的均等に於て調和せんとしたものであるけれども、其の宇宙の變化相に觸れてこれまた其の哲學的思索の満足を得る事を得ざる處のものとなつたのである、かくて其の宗教の哲學的根據への傾向は、其の汎神論に一步を進めて、萬有在神論に到つたのである、即ち萬有在神論にありては、此の宇宙なるものは其の神の中に於ける現象であるとする處のものである或はまた神自身が其の宇宙に於ける現象其の過程の中に於て發展するものであるとするのである、かくて其の宗教哲學に於ける其の宇宙觀は、其の到底其の假定の性質の範圍を出づる事能はずに、遂に其の科學的類似のもとに止まらざるべからざるに至つたのである、かくて其の宗教なるものは、其の人心の奥底に遡源せる處の其の眞相の把握に於て頗る其の思索攻究的價值を有する處のものであり得ると云ふまでに過ぎざるものであつて、それは要するに價值の哲學でありしかして其の旁系哲學以外のものではないのである、しかして其の宗教なるものゝ價值は要するに其の假定の價值であ

る、しかして其の假定の價値は其の信仰上の價値である、しかして其の信仰上の價値は其の知信の合一によりて生ずる處の問題である、即ち人知が其の宇宙の究竟的真相を求めて其の不可解に到達せる時、其の不可解によりて導かるゝ處のものは信の領域である、即ち假定の價値に憑依する處の觀念である、換言すれば、其の假定なる神の實在を信する事によりて其の宇宙の其の真相の神秘の其の不可解なるものに解釋を與ふる事である、其の所謂宗教に於ける處の其の成形たる知信の合一は其處に行はるゝ處のものでなければならぬのである、即ちかくて其の神なる觀念は其の動かすべからざる信仰を確立するのである、しかして其處に所謂宗教上の教權なるものは存立するのである、即ち、吾人の其の狹隘なる知識は到底そが宇宙の神秘を理解する事は不能の事である、吾人は唯その天啓即ち神の告示を受けて茲に始めて开が宇宙の神秘現象の其の不可解を解するを得る處のものでなければならぬ、だから若し人間にありて其の天啓を受けたる人がありとしたならば、开は實に驚嘆すべき事實であつて、其の

權威や畏るべきものでなければならぬ、即ち其の天啓を受けたる人にありては、其の神の意志を行使する處の人でなければならぬ、吾人の其の慶福は开が天啓を有する人に於ける其の權威の作用によりて支配されなければならぬ處のものである、これ即ち宗教に於ける其の教權の存立する處の基調である、即ち宗教は其の假定即ち其の人格的實在たる神に對する其の憑依の感情即ち信仰によりて組織せられたる處の其の知信合一に於ける一團の形式である、しかして其の教權なるものは其の信仰上の憑依の形式其のものである、しかして其の宗教哲學なるものは其の假定に基づく處の一團の知識である、しかして其の假定に立脚する事は到底其の科學的類似形にある處のものであつて、其の哲學に於ける正宗體系に得ざる處のものである、これを要するに宗教哲學は其の旁系哲學であらねばならぬ處のものである。



## 第十五章 美學

美學とは、素より吾人に於ける其の美意識の攻究に於いて組織せられたる處の學的に成形せられる一科の學である、即ち美學は其の吾人の开が美意識に於ける其の原理を追究せる處のものである、しかして此の吾人の其の美意識なるものは如何にして現はれたるものであらうか、それは其の對象に於ける處の吾人が其の無關心の適意に於いて行はるゝ處の現象其れが美と云ふ處のものである、而して其れが所謂美意識と云ふ處のものである、で此の無關心なる状態は其の如何にしてあり得るであらうか、其れは吾人の开が感情の上に於て其の絶對的に適合せる事に於て行はるゝ處の状態である、ところで此の美意識なるものは、其の美の本體としかして其の美を感じる處の其の意識との二つの結合される事によりて其の美なる一實有を顯象するのである、されば此の美なるものは其の自然の理想と人間の感情との相對關係のもとに置か

るゝ處のものであつて、しかして其の美の成立は其の自然の理想と其の人間の感情とが適合一致して其の絶對無我の一状態を形成せる時、即ち其處に美の成立があるのである、即ち美は其の自然と人間との抱合に於て生ずる處の一状態である、尙また其の内容は自然の理想と而して人間の感情との二つによりて成る處のものである、即ち美の本體は自然であり、しかして其の現象は人間にあるのである、ところで其の美なる一實有は自然に於ける理想であるのである、即ち其の完成全備の形式を認識され得る事に於て存する處のものである、蓋し其の完成全備なるものはもとより吾人の感情に於けるものであり、しかして其の認識なるものは其の直觀より來る處のものでなければならぬのである、かくて美は开が自然の理想であると同時にまた人間に於ける理想でなければならぬ處のものである。

で此の美學が其の成形を得たる事は、彼のバウムガルテンに於いて其のこれを認めなければならぬ處である、しかも此の美學は吾人に於ける其の理性の其の理想の區分

によりて生起せられたるものである。即ちバウムガルテンは、其のヨルフの哲學に於ける其の知性に關する區別に於て、其の高等なる理想を以て眞となし、かつまた其の下等なる知性に關しては其の理想を確認する事が出来なかつた事に於て其の攻究の端緒を得て、しかも始めて此處に其の下等なる知性に於ける理想を以て美なりと認定したのである、即ち美なる實有は、全く吾人の理想として認識せられたのである、しかして开がバウムガルテンによれば、其の美の認識に於ける考察は下の三件に於て論究せなければならぬとしたのである、しかして其の三件とは、一、如何なる感覺的認識が美なるか、二、如何に此の感覺的認識を排列すれば美なるか、三、美にして又美的に排列せられたる感覺的認識を如何に表現すれば美なるか、バウムガルテンは此の三件の論究に於て其の美學なる一科の學を組織したのである、かくて其の美學は开が思索上の一對象となり其の研究は漸く行はるゝ事になつたのである、しかして此の美學は彼れカントの、其の判斷力批判に於いて其の美學に關する處の其の範圍は確定せら

るゝに到つたのである、でカントに於ける美學は、其の内容を二部に分つてある、蓋し其の一は優美及び壯美に關するの論であつて、他の一は美術に關する處の論である、即ち其の前者は美の本質上の問題であり、また其の後者は美の人爲的作用の問題である、而して彼れカントの美に關する考察は前述の二者を以て形式に關するものと觀たのである、しかれども本來其の形式なるものは其の内容なしに即ち實質なしにあり得る處のものではないのである、でカントの後に於ける彼のヘーゲルは、其の美を以て其の實質に基づく處のものであるとしたのである、即ちヘーゲルによれば、美は其の常住無極的理念が倏忽有限的質料の中に現はるゝ處の状態なりとしたのである、即ちヘーゲルは其の實質的存在を高唱せるものである、けれども美はもと其の相對性から脱離せる處の絶對の形式に於て存在するものであるからして、單に其の實質にのみ即するもまた誤りなきを保す事は出来ないのである、かくて彼のヘルバルトの形式論は現はれたのである、即ちヘルバルトによれば、美は其の調和に存する處のものであ

ると云ふのである、しかれども又この美なるものは其の本來に於て其の一つの現象として實有する處のものである、だから其の實有する處の現象は开が必然に其の形式と實質とを俱有する處のものでなければならぬ筈である、されば其の何れにも其の偏する事は素より妥當ならざるものでなければならぬ、要するに美は一つの事實である、しかして其の事實は事實としての形式と内容とを有する處のものでなければならぬのである、即ち其の形式論と實質論とは各その單に开が立脚點の問題以外のものではないのである、即ち其の形式に即するものは开が美に關する客體による處の論であり、而して其の實質に即するものは开が美の主觀による處の論でなければならぬ、しかれども其の客體美論と其の主觀美論とは其の何れも、其の美の真相の誤解に基づく處のものにあらざるか、吾人の見解する處によれば、此の美なるものは其の自然の理想と人間の理想との抱合に於て現はるゝ處の現象である、しかして其の抱合が其の絶對無我の適意を経験する時、即ち其處に美は存在するのである、だから其の客體美と其の

主觀美とは共に其の美に於ける材料でなければならぬ、美其のものは其の客體美即ち自然の理想と見るべきもの、と其の主觀美即ち人間の理想と其の合致の場合に於て其の美を顯現するのである、だから美なるものは其の相對關係のもとに生起されて其の絶對なる状態に於て成立する處のものである、しかして美の其の本來の性質は、此の宇宙間に於ける一種の遊離現象として存する處のものでなければならぬのである、要するに其の存在は开が絶對的なる状態に於いて存する處のものである、美學の其の旁系哲學たるものとする處の理由はことさらに云ふまでもないことであると思ふのである。

## 第十六章 經濟哲學

十八九世紀の間に於ける、所謂浪漫的な氣分は、破竹の勢を以て、カントやヘーゲルの、理想主義を呼び起したのであつた、而して夫れが、或はリッチャリンの神學

なり、或はオイケンの精神生活の哲學となつたのであつたが、斯くしつゝある間に、また他面に於て、英國のベーコンを始祖とするところの、經驗派の哲學は、更にロツクやヒュウムを経て、着々思想の歩武を進め、經濟の方面に於ては、彼のペンザムなどの功利主義に移つて、所謂最大多數の最大幸福を以て、人生の目的とするところの經濟哲學と化するに至つたのである。

經濟學とは、經濟のことを研究する學問であることは云ふまでもない、ところで一體經濟なるものは、如何なることを意義するものであらうか、此の機會に於て、先づ开を明らかにして掛からなければならぬ。

元來經濟といふことは、最も少き勞費を以て、最も大なる効果を收むることを以て开が定義とするものである、此の定義によるところの働きが、取りも直さず經濟活動であるのである、そこで此の經濟活動は、如上の定義其のものをば、原則ともし、主義ともし、或る一定の計畫を立て、夫れに基いて、全體に於て、規則正しき順序と、

秩序的な方法を以て、开が欲望を満足さすために、經濟上の財貨を獲得し、若しくは之を使用することを目的とするところの、人類としての活動を意義するものである。

扱て翻つて思ふに、人間が經濟上の財貨を得るには、どうしても働かなければならない、即ち此の要約的事實からして、所謂労働なるものが必要となつて來る、併し單なる労働、即ちたゞ働くといふばかりのものであつては、其所に何等の統一的輪廓なるものがないのである、そこで人間は、其の働くといふことに就て、一定の計畫を樹てる、そして同じく一定した秩序の下に、最も自己に適した働きをする、これが取りも直さず職業と名づけられるものである。

職業といふことは、文化的勞作と稱すべきものであつて、社會が文化の形式と内容を有しない時には、決して職業としての労働を見ることは出來ない、言葉を換へて云ふならば、文化の進んだ社會に於て、理法的に財貨を得ようとするには、どうしても職業の形式によらなければならぬのである、斯うして得た財貨の使用方法は、直接

に社會に重大なる關係的影響を與へるものであるから、そこに所謂社會學と經濟學との、有機的關係が生ずるのである。

で經濟哲學なるものは、此の文化科學の中での、最も重要な社會的地位にある經濟をば、根本的に、また哲學的に、原理的なる研究をなすものに外ならないのである、凡そそんな科目であるにしても、夫れ自體の根柢には、必ず或る程度までの假定といふべき理論がなくてはならない、ところで如何に萬能的な科學であるにしても、其の假定にまで突き進んで研究し得べきものではないのである、果して然らば、何物がよく之れが研究を爲し得るかといふに、即ち哲學以外に之れを求むる事は出來ないのである、併し哲學と云つても、茲に要せらるゝものは、言ふまでもなく批判哲學であらねばならぬ、之れに由つて是れを觀るに、所謂經濟哲學なるものは、經濟と稱する科學に對して、夫れ自體に一定の基礎を與ふる學問に外ならぬのである。

經濟が産業の上に重きを置くことは、何れの學派にあつても同一のものであるが、所謂デモクラシーにも、經濟的に論議されて居るものがあるのは、大なる注目に値ひすべきものである。

經濟的デモクラシーは、一にまた産業的デモクラシーと唱へられるものである、之れは由來産業上に多數主義を適用したもので、即ち從來の資本家、企業家等の、所有階級本位の産業組織に反對して、之れまで殆ど因襲的に虐げられつゝあつた勞働者や、民衆等の、無産階級本位の産業組織を作り、斯くして有らゆる一切の生産機關をば、此等無産階級の管理の下に置かねばならぬと主張するものである、で此の單なる政治的方法に對し、よく之れが基礎に向つて、研究的學說を與ふるものは、前にも一寸述べた通り、唯物史觀なるものが夫れである。

此の學派の見解は、人類の歴史をば、物質的方面、即ち經濟的關係、若しくは生産的現象の上に於てのみに闡明しようとするところにある、今一層之れを簡明に云つたならば、物質的であり、機械的でありとする一種の人生觀に基いて、人類生活の上に

於ける一般的發展、即ちあらゆる社會的變化と、乃至は一切の政治的變遷までも、すべて此の物質的原因から説明しようとする學說なのである、勿論自然科學、殊に彼の進化論が、其の學說の基礎となつて居ることは云ふまでもない、そして早く已に、十八世紀頃から唱へられて居たのであるが、开が一個の學說として取扱はるゝに至つたのは、つひ近代のことである、そして其の學派の重鎮として、進んで代表者の地位に立ちつゝあるものは、言ふまでもなくカール・マルクスである。

ところで、マルクスの學說は、果してどんなものであるかといふに、夫れは次の如きものである、元來社會の經濟組織なるものは、決して個分的に簡單なものではないだから一人や二人の、少數なるものが、斯う改造したいとか、あゝ訂正したいとか思つたところで、迎も其の意思通りには、なか／＼改められるものではない、夫れは何故であるかといふに、此等のものは、すべて社會の經濟組織、即ち其の社會に於ける富の生産力の發達程度の如何によつて、否應なしに必然的に決定さるゝものであるか

らである、何人も知つての通り、封建時代にありては、單なる貴族と、單なる平民との對峙があるのみで、他に何等の複雑的狀態を存しなかつた、そして器械なども其の通りで、極く簡單なもので間に合つて居たのであつたから、産業組織の變化など、いふことは、餘りに問題にはされなかつたのである、ところが社會の進運に連れて、蒸氣や電氣の力を利用して、諸般の工業を營むやうになつてから、始めて其所に、資本主義的産業組織が出現したのである、サア斯うなつては、社會は當然其の容態を改めずには居ない、即ち曾ては、貴族と平民の對峙であつたものが、何時とはなしに、資本家と労働者の對峙となつてしまつた、之れに由つて見ると、富の生産方法の變化、即ち生産力の變遷なるものは、必然的に社會の經濟組織を變化移動せしむるものであつて、同時にまた全般の社會組織までも變動させずには置かぬものである、之れを要するに、物質生活に於ての生産方法なるものは、或は社會的に、或は政治的に、或は精神的に、开が過程を決定するのである、即ち此等の存在を決定するところのものは

人々の意思ではなくて、却つて之れと反對であるところの經濟力であらねばならぬといふのが、マルクスの唯物史觀的所論なのである。

## 第十七章 法律哲學

哲學としての普通の解釋によれば、法律哲學なるものは、法律の淵源と、开を構造する本質、及び其の社會的價値に關する學問である、而して其の目的とするところのものは、法律的の現象であるところの、最も高き原理、若しくは其の根本的原則を研究しようとするに存するのである、勿論學問には決して究極がない、之は獨り法律に於てのみではなく、何れの方面の學問としても、素より同様のものであるが、法律的原理を研究する學問に於ては、更に此の感を深うするのである、吾人は法律史學と稱するものや、法律や法律學によつて、所謂法律なるもの、過去を知つて居る、これによりて吾人は、法律の變遷と其の由來を理解することが出来るのである、そしてまた

實定法律なるものによつて、現代に於ける法律が、果して如何なる状況にあるかを知了することが出来る筈である、然しながら吾人は、吾人の啓發的意識の上に於て、決して之れだけに満足しては居られない、言葉を換へて云ふならば、此の種の學問や研究に於ては、單なる過去や現在の研究を以て甘んずることが出来ずに、更に進んで將來の研究にまで没入しようと考へるのである、即ち吾人が研究によつて得た過去と、現在の結果を綜合せしめ、之れによつて、古今東西に亘る法律全體に就ての、根本原理を研究し、斯くて法律とは、果してどんなものであるかといふ理想を明かにせねばならぬと思惟するものである。

此の法律的原理の研究は、果して何等の利益と價値を吾人に與ふるであらうか、言ふまでもなく开は極めて莫大なるものであらねばならぬ、即ち吾人は之れに依つて、先づ現在に行はれつゝある法律の、是非善惡を知ることが出来得ると同時に、併せて开が得失をも批判することが出来、夫れによりて、能く將來に於ての、法律の進み行

くべき途を明かにし、而も併せて今後に於ける法律其のもの、制定は、如何に之れを爲すべきであらうかといふ、最も重大なる指針を得るのである、此の重大なる効果を齎すための法理上の研究は、實に法律哲學の範圍に屬するものとせねばならない。

法理學が法律哲學であることは、一般に認められて居るところであるが、近時所謂法理學なるものが、果して法律哲學と云ひ得るや否やについて、往々異疑を挾むものが生じて來たのである、然しながら箇々の法律現象の研究は、謂はゞ法律としての科學であつて、現實法と名づけられる、ところのものである、此の現實體な、そして更に具體的な研究の結果に基いて、更に數歩を進めて、法律其のものをば、抽象的に取扱つて开が根本原理を研究し、萬有現象中に於ける法律現象の位置を認識することは、取りも直さず法律哲學であると同時に、また法理學其のものであらねばならぬ。

そこで法律哲學の分類的形態はどうかであるかといふに、其の研究法の上からして、先づ二つの種類に大別されるのである、即ち一つは先天論から來たものであり、一つは經驗論から來たものである、で先づ専ら世に唱導さるゝところの、經驗論に出發されたものをば掲げて見よう。

經驗論的法學としての、最も新らしい形は、社會法學である、社會法學といふのは取りも直さず社會學法學を略稱したものであつて、开が最初の唱導者はコムトである此の學派にありては、全般の共同生活をば、社會なる概念の上に統一して、元來國家と稱するものは、畢竟するに社會の一つの形態であつて、随つて法律生活なるものも詮ずるところ社會生活の一つの態様に外ならないのである、そして此等のものは、みな等しく、自然科学的法則の支配を受くるものであらねばならぬといふのである。

如上の説の感化を受けたものは、數に於て決して少なくはなかつたが、其の中でも著名なものとしては、マルクス一派の唯物史觀論を最として、グンブロウキツ及びオツペンハイメル等によりて唱へられたる階級争闘的國家觀があり、また別にアントンメンガー一派によりて唱へられたる權力即權利説など稱せられるものもある。



マルクスを代表としての、唯物史觀論は、可なり有名なものであるが、之れとても仔細に點檢して見ると、所謂法律哲學としての研究としては、猶ほ多くの省察を加ふべきところが尠なくない、併し并は別な問題として、社會法學其のものは、兎に角法律の原理的研究に就て、大なる寄與をなしたことは争はれぬところである、然しながら眞に玉を相しようとするには、他山の石を以てしなければならぬ、即ち左に開が缺點と目されるものを掲げて、長短を知るべき材料に供することにしよう。

社會法學の缺點としては、先づ法的規範といふことを以て、全く事實的法則の一種であるとするところにある、言葉を換へて云ふと、規範といふこと、事實といふこととをゴツチャに見て居るのである、だから如何なる場合にありても、決して規範と事實とをば、確的判明に認めようとはしないのである、ところで其の結果としてはどうであらう、其の事柄に於て、随分重要な根義的差別があるものまで、みな一式一樣の埧塙に打ち込んでしまふのである。

今そが二三の例を擧げて言ふならば、統治權なるものと、權力なるものとをば、容赦もなく混同する、そしてまた所有權と占有權をさへ同じものとして片附けてしまふのであるが、更に甚しいものになると、婚姻と野合とをさへ、同等に取扱はなければならぬことになるのである、だから理論としては兎に角、研究法としては、到底失敗たることを免れぬのである、畢竟之れは、批判に於ける大なる缺陷を持つものであることを表明さるゝものであらねばならぬ。

次に此の學派の稱呼するところのものに、如何なる長所が算へられるであらうか、換言すれば、缺點は缺點としても、夫れ以外に何等かの貢獻がなくてはならない筈である、即ち眼を一轉して、そが功績を檢して見ると、其所にまた若干の興味ある功績が見出されるのである。

即ち此の派に於て、新たに人間の社會性を高唱し、夫れに力ある見案を興へたことが、其の當時に於ける功績とも見るべきものであらう、然しながら之れにしても、ま

た大なる缺點を有つことは、其の力に對して、頗る遺憾としなければならぬ、由來自然法學派に屬するものは、それが國家の起原を解説するに方つて、必ずや各個人の契約といふことをば、それが言説の根據としたものである、之れが好例としては、彼のルツソオの民約説などが算へられるのである。

然しながら今日に於て、我々が國家の起原を考想する上に於て、何よりも先づ家族であるとか、部落であるとか言つたやうな、一定の人の集團をば、それが出發點とするに至つたことは、全く此の社會法學の賜であらねばならぬ、即ち此の點から見ると、社會法學なるものは、時として法學の資料を供給すると同時に、また其の補正的功績があつたと言ふべきものである。

次に、之れもまた、經驗論から出發されたものであるが、社會功利説といふのがあつて、此の論者の代表者としては、英國のベンサムを押すものであつて、一しきりは、ベンサムによつて、可なりに高調されたものであつた、が其の後にイエリソングが出て

此の學説をば、最も徹底的に、法學の上に應用したのである、斯くて此の説は、社會功利論的法學と稱せらるゝに至つたが、一部のものはまた單に目的觀とも唱へたものである、此の説は、現代に於ても、實論的法學を風靡して居るものであり、且つ社會改良論者などが、口を極めて高唱するところの法律論も、畢竟するに、此の風潮によつて、それが力を伸展して居るものであると見られて居る、然れども利益は感情であらねばならぬ、そしてまた相對的であることを要する、果してさうであるとするならば、之れを以て、法的規範の普遍妥當性を決定するには、餘りに菲薄であり無力である、だから此の派の説くところとても、同じく現代に於ける法制に對して、單に補正的作業を爲すに過ぎないのである。

此の他に、モーツ述べなければならぬところのものがある、夫れは社會主義者、共產主義者などが、好んで言説するところの法律觀である、之れは言ふまでもなく、自由平等の主義に據つて居るものであるが、元來自由平等などいふことは、素より個人

主義から出發されたもの、結論であらねばならぬ、そして之れは、明かに相對を意義するものである、即ち拘束といひ、差別といふところの觀念に對するところの、相對性觀念と稱すべきものであることは、毫も異議すべき餘地がないのである。

然しながら我々は、無拘束とか、無差別とか言つたやうな、單なる自由のみを以てしては、決して實際的な生活の目的を達し能ふものではないのである、殊に我々は、之れによりて共同生活の規範其のものを取り出すのである以上、斯くの如き生活には何等の價值をも認めることが出來ぬのである、一步を遡つて考へて見ると、所謂共同生活なるものは、疑ひもなく體制的生活であらねばならぬ、シテ見ると、絶對の自由平等などは、素より合致さるべき筈のものではないのである、また無政府主義的法律觀など稱するものは、實際に於て、法の客觀たる論議に屬すべきものであつて、事實は舊經驗派としての自然主義に向つて、突飛的逆轉を敢行したものに外ならない、故に之れとても、單に他山の石として、現代法學に於ける、補正的位置を占むるに止

まるものである。

## 第十八章 歴史哲學

歴史哲學として取扱はれるところのものは、文字通りに、歴史其のものをば、哲學的に研究し、夫れに所謂文化哲學としての色付けをしたものに外ならない。

言ふまでもなく、文化科學としての歴史には、夫れに對して、二つの見方があつた即ち一つは、事實の繼起的記述であるといふ、取りも直さず在來有り來りの解釋であり、一つは所謂新カント派の解釋によるものが之れであつた。

そこで在來有り來りの解釋に於ても、夫れにもまた廣義の解釋と狹義の解釋がある前者に於ては、前に言つた如く、事實の繼起的記述であるが、狹義の解釋としては、人類の國家的、社會的生活の繼起的記述であるといふのである、即ち廣義のものとしては、自然的事物の歴史があり、學問の歴史がある、そして狹義のものとしては、政

治史や文明史が之れに算へられるのである。

更に眼を轉じて、新カント派の解釋するところを見るに、歴史とは、歴史的文化的價值を含むところの事實、即ち歴史的事實の科學であつて、取りも直さず價值的意識に關係せしめて構作されたる事實であり、此の種の事實をば、歴史的因果によつて、残りなく統一したものであるといふのである。

如上の新カント派の解釋するところによつて、所謂文化科學としての研究的學問たる、歴史哲學が高唱さるゝに至つたのである、歴史哲學としては、もはや單一なる性狀を有つところの、繼起的事件の記述たる歴史ではなくて、开が史的事實の間に、因果的聯絡を求め、そこに人類としての生活を支配するところの、或る一定の法則を見出ださうとする、所謂哲學的研究を指すものであるが、之れとても、歴史と稱する科學に、一定の基礎を與ふるものに外ならないのである。

吾人は以上に於て、所謂文化科學なる語を繰返したのであつたが、抑々文化科學なるものは如何なるものを指して云ふのであらうか、先づ之れが釋明を試みることにせねばならぬ。

文化科學なる語は、獨逸のウインデルバンドによりて唱へられたのである、が後に至つて、同じ獨逸のリツケルトによつて、夫れが大成されたもので、开は素より科學分類上の名稱である、獨逸西南學派の思考するところでは、自然に對する概念は、決して精神ではあり得ない、然らば开は何であるかと云へば、勿論文化其のものでなくてはならぬ、夫れは何故であるかといふに、精神といふことも、これを心理學の法則的認識の對象として考想さるゝ限りは、素より之れとても、自然の一部に外ならぬからである、夫れであるのに、若しも自然對文化としたならば、自然其のものは、沒價値の概念であつて、文化其のものは、價値の體現であることになる、ところで所謂自然科學は、此の如き沒價値を研究する學問であるに對し、文化科學は、开が文化の價値、即ち人間が、人間としての本質の上に有するところの、理想其のものゝ上に基づ